

鄭淵潔童話研究

-鄭淵潔児童文学作品の分析を中心として-

2020年 学位論文

弘前大学大学院

教育学研究科 学校教育専攻 国語教育コース

学籍番号 18GP301

張 雪晶

目次

研究の目的	1
1 “童話大王” 鄭淵潔	1
1.1 鄭淵潔の紹介	1
1.2 雑誌に着目した理由とその考察	3
1.3 「童話大王」の運営及び著作権を守る意識	4
2 中国現代児童文学の沿革および鄭淵潔童話の時代背景	6
3 鄭淵潔の教育理論と実践の作品	7
3.1 「児童本位」理論と現実との間の矛盾	7
3.2 「在宅教育」から鄭淵潔の教育実践への考察	7
研究の方法	9
1 鄭淵潔童話の発達段階から見える児童文学観	9
1.1 『幼児期』-詩から童話寓話へ	9
1.2 『児童期』-活気派童話	11
1.3 『青年期』-童話から長編小説へ	16
1.4 結果と考察：鄭淵潔にとって児童文学とは	17
2 鄭淵潔の子ども観から子どもという存在そのものへ	17
2.1 「子どもの天性を守り、想像力を自由にはばたかせる」という主張	18
2.2 「ピピル」などキャラクターの設定について	20
2.3 結果と考察：作品を通して子どもにどんな影響を与えるか	24
結論 鄭淵潔作品が提示する子どもの発達に関する問題点	24
1 発達段階の特徴に合わせた教育視点を選ぶ	24
2 子どもに選書の自由を与える	25
2.1 書店の減少、本を手にする機会が減る	25
2.2 好きな本と出会うきっかけを作る	26
2.3 子どもには本を選ぶ力が備わっている	26
今後の課題	26
1 「～たい」という意欲の養成	26
2 良書を判断する能力の育成	27
添付図表	28
1 図表1 中国作家印税収入ランキングー鄭淵潔の順位および印税収入	28
2 図表2 鄭淵潔の作品（一部）	29
参考文献	31
「ピピル伝」訳文	33
1 赤いソファのミュージック・シティ	33
2 名画騒動	52

研究の目的

子どもの頃どんな童話を読んだか？と思ひ浮かべてみてほしい。グリム童話、ギリシャ神話など西洋のものを読んだり、親からおとぎ話を聞いたりなどと答える人は少なくないであろう。中国の現代のものは…？と引き続き聞くと、おそらく「童話大王-鄭淵潔」の名前が挙げられるだろう。現在 10～40 代の中国読者の中で、鄭淵潔の名前を知らない人が居たとしても「童話大王」という雑誌の名前を耳にしたことはかならずある。鄭淵潔は 1977 年頃から文学の創作を開始し、1985 年から「童話大王」の唯一の執筆者として 35 年間（2020 年）書き続けている。一つの雑誌がただ一人の作品を連載する形で出版されているということでは世界最長記録となった。「童話大王」雑誌を含む鄭淵潔の創作した作品の累計発行部数は 3 億部を突破する。現在、公式オンラインショップのピピル総動員旗艦店では、鄭淵潔児童書 1 日の販売部数が 27000 部である¹。鄭淵潔は 12 年連続中国作家印税収入ランキングに入り、3 度ベストセラーに輝いたのであった（図表 1 による）。その実売部数や知名度によって、中国の 3 世代読者に影響を与えたと言っても過言ではない。なぜ鄭淵潔の童話作品は 40 年の歳月を経てもなお読者たちに愛読され続けるのか？中国現代児童文学の中で鄭淵潔童話はどんな使命をはたしているのか？作品の分析を中心に、鄭淵潔に関係する研究論文、新聞・雑誌に載った評論、ソーシャルメディアやインタビュー等から収集した資料や情報に基づいて、彼の児童文学観や子ども観の変化・発展を考察する。さらに考察の結果を踏まえて今まで行われてきた鄭淵潔の児童文学観、教育観に対する賛否両論を読者論や教育論の視点から検討を行う。

1 “童話大王”鄭淵潔

1.1 鄭淵潔の紹介

鄭淵潔は 1955 年 6 月 15 日、中華人民共和国河北省石家荘市に、父鄭洪昇、母劉効坤の長男として生まれた。父は解放軍石家荘上級歩兵学校の教員であった。幼い頃に父が勉学に励む姿を目にしていたため、読書することに憧れていた²。小学校 2 年生の頃、鄭淵潔が書いた作文「ぼくは大きくなって汲み取りの仕事をする」は担任先生の推薦で学校の出版物「優秀作文選」に掲載された。この時のことを後年「それから自分は文章を書く自信を持ち、それが将来作家という職業を選ぶ一つの理由であるかもしれない。」と鄭淵潔は取材の際に語った³。また先生の勧めで児童文学作家張天翼の童話「宝ひょうたんの秘密」（中国少年児童出版社、1958 年）と出会った。ある少年は川からしゃべれるひょうたんを手に入れた。そのひょうたんはなんと少年の心で思う願いを何でも叶えてあげる宝物である。想像力に富んだ童話のおかげで、彼は本を読むことがより一層好きになった⁴。

小学校 4 年生の時文化大革命（1966～1976 年）の影響を受け、両親と一緒に地方に移転（上山下郷運動という）した。河南省遂平県（町）の五七幹部学校に入学した。口数少ないが実に活発な子で、授業中に空想にふけることがよくある。ある日、先生は「早起き鳥は虫を捕まえる」というテーマで作文を書くこと指示した。鄭淵潔は作文でこう書いていた。

「鳥であれば早起きして生きられるけど、虫であれば朝寝坊しなさい、身を守るべきだ。」

作文のテーマを勝手に変えたうえに、自分の視点から先生と議論することは教師の権威を無視する挑発的な行為と見られ、教師たちにとってはやっかいな存在となった。ある先生は「『淵』の字は学識が深いという意味だが、君にとって無意味だ。君は無知な者だから。」⁵とクラス全員の前で強い口調で指摘した。「もうこれ以上我慢できなくなり、自分の気持ちを告げたい。遊ぶ

¹ 童話大王雑誌社,2019-4-16,微博 WEIBO.COM

² 鄭淵潔,「父の背中を見て育つ」(父亲的含义是榜样),齊魯晚報,2009-7-23

³ 史競男,新華網新華社,“童話大王”鄭淵潔:子どもの好奇心を守る,2018-05-31

⁴ 鄭淵潔,「機会・成功・感恩」,中国德育第三卷,2008 年第 11 期

⁵ 鄭淵潔,南国都市報,一个著作等身的文盲,2005-07-10,第 9 面

ため持っていたクラッカー（紐を引くことで中に仕込んだ火薬が発火しパンと音が鳴る爆竹）を一気に爆発させた。さいわい周りとの距離を置いたので、けが人はいなかった。」と鄭淵潔はインタビューで告げた。翌日、父と一緒に先生に謝罪したが、結局受け入れられず退学を余儀なくされた。父は「仕方ない、家で勉強しろ」と言い、家庭で識字教育をした。

1970年12月から1976年3月まで、鄭淵潔は空軍航空部隊第14師団に所属し、J-6戦闘機の整備士⁶として軍役についた。1976年退役後、北京に戻った鄭淵潔は北京大華無線電気設備工場の作業員となった。この時、「天安門詩歌運動」に遭遇した。逝去した周恩来総理を悼むため、人々は天安門広場の人民英雄紀念碑の前に集まって花輪や詩歌を献げた。天安門詩歌運動は歴史的意義と文学の価値を伴う人民の詩歌運動である。人民により創作した「天安門詩歌」は、いきいきとした芸術様式を通して伝統詩の生命力を示した。鄭淵潔が運動の激昂する場面を見た時の衝撃は大きなものであった。「海のような詩に心を奪われ、詩の力に感動させられた。ぼくは詩人になりたい」⁷とその時、心に決めた。文化大革命が終わった後、中国は新たな繁栄を迎えた。鄭淵潔は文学創作を始め、約80～100篇の詩を続々と創作し発表した（図表2による）。このような時期にあるとき、鄭淵潔は本屋で一人の男の子と出会った。男の子は児童書「知恵を出すおじさん」⁸を買い求めるため6軒の本屋を探しまわったが全く買い求めることができず、悔しくて泣いていた。子ども好きである鄭淵潔に鮮明な印象として心に残った。この時、子どものために本を書く人は少なすぎると意識し始め、鄭淵潔は児童文学の創作に取り組むことに心を決めた。

その後1978年河南省人民出版社の「向陽花」という雑誌の第4期に、鄭淵潔の児童文学のデビュー作寓話詩「ヤモリとコウモリ」（「壁虎和蝙蝠」）を発表した。雑誌の編集者である于友先から手書きの採用通知をもらった。「子どものために文章を書くことはたいへん素晴らしいことで、大いに力を発揮する余地があるだろう。これからも頑張ってください」という新人の鄭淵潔への励ましの手紙であった。鄭淵潔は手紙が届いた1978年5月30日を児童文学創作生涯のはじまりとしている。まもなく、鄭淵潔はあることに気づいた。子どもたちは詩よりも科学幻想小説に興味を持っている。小学校中退のため理科知識の欠如という困難を抱えているにもかかわらず、「叔父さんの腕時計」⁹という科学幻想小説を発表した。1979年、鄭淵潔は「児童文学」雑誌に「黒黒ちゃんは誠実島にいる」（「黒黑在诚实岛」）という童話を発表した。1981年、中国少年児童出版社は鄭淵潔の才能を見抜いて、「児童文学」の編集者として採用した。その後、鄭淵潔は雑誌「布谷鳥」¹⁰の編集者になった。

80年代初期からシリーズ童話の創作をはじめ、ピピルとルシシ、舒克と貝塔（ShukeとBeita）など知名度の高いキャラクターを創り上げた。改革開放政策が実施する前、童話のなかに書いてある動物には「出身階級」が決めつけられていた。例えば羊、ウサギは「良い人」、狼、ネズミなら「悪い人」というおきまりで書かれていた。鄭淵潔はきまりにそむくため、1982年9月、「舒克」という「良いネズミ」の物語を創作した。やさしい心を持つ子どもネズミ舒克は、泥棒であるネズミ出身のためまわりに軽蔑されていた。このままで生きたくないため、ヘリコプターを操縦し家出をした。これは運命を変えようとする舒克の物語である。舒克の苗字の由来は、服役期間で最初の指導者、優しい整備士の舒さん。また、作者が詳しい「道具」があれば、物語の展開はスムーズになると考え、舒克にヘリコプターを与え、パイロット舒克という設定に仕上げた。5年間の戦闘機整備士としての服役経験は彼の有利な経験となり、続いて「戦車兵貝塔（「坦克兵贝塔」）」（1983年）「ヘリコプターを操縦する子ネズミ（「开直升飞机的小老鼠」）」（1986年）など作品を発表した。1982年以来、舒克と貝塔にちなんだシリーズ作品の累計発行部数は7000万部を超えた¹¹。この時期、鄭淵潔は出版社計16社に童話の連載を行っていたため、当時のメディアでは「童話大王」と呼ばれていた。掲載先のある雑誌社に原稿料を上げるよう要求した

⁶ 鄭淵潔、「ソ連19戦闘機のおかげでパイロット舒克が誕生」、環球網、[HTTP://NEWS.IFENG.COM/A/20170919/52075267_0.SHTML](http://news.ifeng.com/a/20170919/52075267_0.shtml), 2017-9-19

⁷ 鄭淵潔、「作家葉永烈への手紙」,1979-2-15

⁸ 少年児童出版社編、「知恵を出すおじさん」（「动脑筋爷爷」）,少年児童出版社,1964年

⁹ 「叔父さんの腕時計」（「舅舅的手表」）,「児童時代」雑誌,1978年第8期

¹⁰ 「布谷鳥」（「布谷鸟」）雑誌は1921年創刊、1982年4月より「東方少年」に雑誌名を変えた

¹¹ 鄭淵潔,2017-9-18,中ロ「シルクロード経済貿易人文交流対話」での講演「お詫びと感謝」, WEIBO.COM

が、出版社側に「ひとり作者の作品の掲載により雑誌の発売部数の増加と直接に影響することは証明できない」と拒否された。「もし自分ひとりの作品だけ掲載する雑誌を作れば、発売部数の増加に影響する証明となるだろう」と着想し、「いまそれぞれの雑誌社で連載している童話を一つの刊行物に集中すれば、読者がぼくの童話を買って求めやすくなるだろう。ぼくの作品で独り占めの雑誌を作ろう。」と児童文学出版社十数社に直接の持ち込み営業をした。「ただ1人で1期5~6万字の雑誌を書き続けるのか?」というのは、前代未聞の戯言といっても差し支えないだろう。1985年、山西省委員会宣伝部の許可を得て定期刊行物コードを申請した。雑誌社と20年間の専属の契約(期間満了後、さらに10年間を更新した)を締結し、唯一の執筆者になった。その雑誌の名前は「童話大王」である。当時児童文学作家にとって主な収入源は出版社から支払われた原稿料であったが、鄭淵潔は原稿料(1000字で3元、約50円)のかわりに印税をもらうという「前代未聞」の条件で出版社と契約をした。7年後(2014年)、印税を報酬の支払方式の一種とする「文字作品使用報酬支払弁法」が中国国家版權局より作成された。

「童話大王」創刊号は1985年5月10日付けで6~7万冊刊行され、1988年には月の販売冊数が100万冊を突破した。2007年、鄭淵潔のサインが入った創刊号(定価0.28人民元、約4円)は競売で10万元(155万円)で落札されるような現象まで引き起こしている。2020年、2月号「童話大王」(計第473期)が出版されるまで、鄭淵潔一人で35年間を執筆し続け、総計印刷冊数は2億を上回っている¹。このように一つの雑誌をただ一人の作品を連載することで世界最長記録となっている。

1.2 雑誌に着目した理由とその考察

なぜ鄭淵潔が多数の出版物の中で雑誌に目を付けたか。三つの理由が考えられる。

一つ、最強の販売ルート。1950年より中国一の総合新聞社「人民日報」は発行業務を郵便局(中国郵政)に委託して以来、全国各地の出版社、新聞社などは各自の販売ルートを書店から転じて中国郵政に依頼するようになった。中国全国範囲内で「郵便配達」と「定期刊行」を一つにする「郵発合一」制度が形成し、新聞の発行部数は著しく増加した。中国郵政は交通不便の農村部までカバーできる巨大な物流拠点網を有し、出版物と読者をつなげる重要な役割を果たしている。特に80、90年代に入り、当時、雑誌種類や印数の増加により出版業界の競争も激しくなっていた(図1による)。

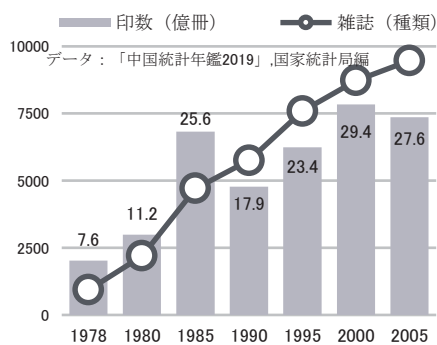


図1 雑誌刊行種類と印数

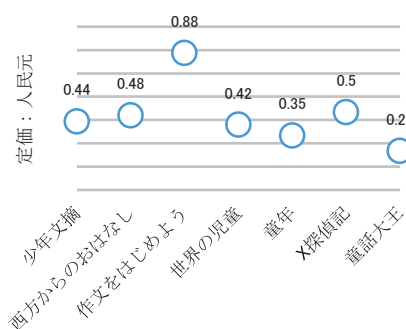


図2 児童文学出版物定価比較

二つ、子ども読者の意思決定で入手可能である。雑誌なら郵便局より定期購読を申し込めば配達してくれるし、街角の本屋や学校周辺のニューススタンドから最新号を購入出来る利便性もある。書店を何軒も回って好きな本を探す時代とは違って、子どもでも本を簡単に入手できる時代になっていた。

1985年刊行された絵本、雑誌、児童小説など書物計7種類の定価を調べ、「童話大王」雑誌の

定価レベルが分かった(図2による)¹²。

また、創刊以来「童話大王」の定価上昇について、同年代の児童文学雑誌「少年文芸」(1953年創刊)「児童文学」(1963年創刊)と3誌で比較した結果、ほか2社より値上げ幅の低いことがわかった(図3による)。

子ども読者は連載中の次の号で何が起こるか知りたいから読み続ける。他者から読めと命じられたからではなく、真に自発的で動機のある読みものだからこそ、お小遣いをためて買い求めに行くことになった。

三つ、読者と Win-Win な関係を築く。子どもは文化や価値の消費者として存在するだけではなく、鄭淵潔の作品の創作の場では子どもたちも新たな価値と文化の創造者であり、鄭淵潔と子どもたちは共に生産者として存在するのである。

雑誌「童話大王」の知名度が高くなり、1985年は隔月刊、1991年より月刊、2005年より月2回刊に変わっていた。80年代以来、全国各地の読者から数多くの手紙が届いたため、鄭淵潔は読者との交流の場として読者ポストを立ち上げ、「童話大王」を通して読者の意見を積極的に作品に反映する形で創作を続ける。読者の手紙が自分への信頼であると感じた鄭淵潔は北京でアパート10軒を購入し大量の手紙を保管している。鄭淵潔は子ども読者との平等な対話や交流を続けることにより、子どもの視点を重視し子どもの心の声を聴くことができる。連載中のシリーズ童話の中で創作の原動力になるヒントやネタを子どもたちからもらいながら、彼らの生活にぐんと近づけるストーリーを創り出せると考えているのである。それは今までの他の出版物とは比べられない新しい創作環境であった。

上述のとおり、鄭淵潔童話は子どもの代弁者として彼らの希望や心理をアピールし、子どもの仲間として受け入れられている。読者と共同で童話を創作することが幅広く受け入れられて、童話への関心が広がっていくにつれ、より幅広い年齢層やより安定的な読者を獲得できているのである。

1.3 「童話大王」の運営及び著作権を守る意識

1991年、「ピピル専売店」が北京でオープンし、「童話大王」雑誌や鄭淵潔の図書をはじめ、ピピル、ルシシ、舒克と貝塔などキャラクターの名前で商標登録されたグッズ(おもちゃ、衣料雑貨、文房具)を販売することになった¹³。90年代後半、鄭淵潔の作品の内容には教育、社会、人生などへと話題がどんどん広がり、童話の内容の成人化および社会現実の描写が増える傾向が顕著になった。このような中で2002年の「童話大王」は、雑誌「童話大王」の長編小説をはじめ鄭淵潔の新作の作品の連載等、出版されている雑誌への掲載を全て中止することを表明した。

その後2004年に、鄭淵潔は長男の鄭亜旗のアドバイスを受け入れ、トークショー番組の中で「鄭氏胡説」(計7回)を放送することにした。「やはり作家の言語は文字だ。トークショーは自分じゃなくて他人に任せよう。」と息子に伝え番組を中止した。2005年に鄭淵潔は「新浪ブログ」(<http://blog.sina.com.cn>)で個人ブログを開設し、『童話大王』の立場にとどまらず、自由に交流できる場を作った。2005年、鄭亜旗は「ピピル雑誌」(コミック)を創刊し、2006年、作文を教える「ピピル講堂」を開設した。同年、鄭淵潔は二十一世紀出版社と出版契約を立て、7シリーズ計80冊の作品集「ピピル総動員」を出版、トータルで3000万冊を超えるベストセラーになった。2006年8月12日、「ピピル総動員」など人気図書をめぐる海賊版事件が解決されたと中国中央テレビより報道した。320万冊の海賊版図書が押収され、被害額は2000万元(3億2800

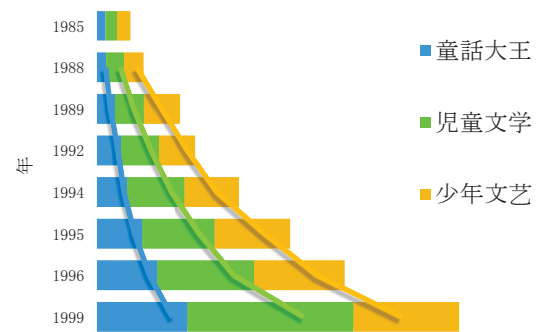


図3 児童文学3誌値上げ幅の比較

¹² 中国版本図書館編,「1985 全国総書目」,中華書局出版,1988年

¹³ 紅立編集, 央視国際, 「現象1980」-童話大王, WWW.CCTV.COM,2007-6-6

万円)に及ぶ建国以来最大の海賊版図書事件であった¹⁴。

2010年、鄭淵潔は北京ピピル総動員文化科学技術有限会社(以下「ピピル総動員有限会社」とする)を設立し、鄭淵潔の全作品の知的財産権を開発・運営する。鄭淵潔のIP(Intellectual Property 知的財産)を出版、デジタル・コンテンツ制作、オンライン教育など幅広いビジネスに活用することによって、中国最強のIP商業化企業を目指して実績を積み上げていく。2011年、国連の発表による5年間の累計売上部数ランキングトップ10という「世界十大図書」¹⁵では世界で出版された図書の中で「ピピル総動員」と「ハリーポッター」は二つとも世界4位と位置づけられた。

実は80年代、鄭淵潔の童話をアニメ化された作品(図表2による)がテレビで放送されることにより大きな反響をもたらしたが、「文字こそ想像力を養い、読むときに脳内で映像化するのが大事だ」と主張していた鄭淵潔は当時映像化された作品を見て納得しなかった。その後、著作権(二次的著作物の利用権)侵害などの影響を受けたため作品の映像化を拒否した。2018年、鄭淵潔は鄭淵潔の同名童話をもとにウェブisodes(ウェブ配信専用の短編映画)「馴兔記」をiQIYI社(中国で動画ストリーミングサービスを提供しているインターネット企業)と共同で企画・制作した。制作プロデューサーを担当する鄭淵潔は「IPの開発や活用において、著作権を尊重し責任感を持つ制作チームを集結することが大切だ。ウェブisodesをはじめ、(鄭淵潔の)作品の映像化を進みたい」と表明した。鄭淵潔は「(内容は)足し算ではなく、原作に忠実である(ウェブisodes)」と高い評価を与えた。また、長年にわたり著作権侵害行為の差止訴訟も成功した影響で、今後作品の映像化に対して前向きな姿勢を見せた¹⁶。ウェブisodes「馴兔記」は、国家新聞出版广电总局によって「2018年度優秀短編映画作品」に選ばれた。同年、コンペティションの作品として、第21回上海国際映画祭金爵獎(短編部門)にノミネートされた。

このような中で「80年代から90年代前半には、雑誌『童話大王』の売れ行きが好調である一方、これとともに深刻な海賊版の被害を受けることになった。当時、私(鄭淵潔)は海賊版と戦うという現実エネルギーを消耗して行くだけ、作品をもう書かない、と何度も告げることとなった。その後、国が著作権を認め保護することに力を入れたことによって、著者の権利を守る(著作権)環境が少しずつを整えられていっていると感じている」と鄭淵潔は語っている¹⁷。2019年8月、ピピル総動員有限会社の告発を受けた江蘇省淮安市公安局は重大著作権侵害事案を摘発した。「ピピル総動員」を含む75種類、約11万冊の図書が著作権侵害を受けた。ネット書店で販売している海賊版書籍約100万冊、被害額は1000万円あまり、出版社21社が被害を受けた¹⁸。

鄭淵潔が創作した童話人物に関連する商標権侵害やパクリ被害などが相次いでいる。「33年間、『童話大王』雑誌の連載のため、毎日朝4時半から6時半かけて6000字を書くのが日課だ。仕事の空き時間は知的財産権、商標権と公共利益など合法的權益を保護するための活動に取り組んでいる。」と鄭淵潔は語った。2018年、「ピピル」商標権侵害訴訟は14年かけて輝かしい勝利を収めた。この事案は中国商標年度会議で「2017~2018年度商標訴訟最優秀事例」に選ばれた¹⁹。熱心な鄭淵潔の侵害対策活動は現在も続いている。

鄭淵潔の社会活動としては、2008年の四川大地震や2010年の青海地震の後、鄭淵潔は印税を被災地の児童たちに寄付する(寄付額が最も多い中国作家である²⁰)など慈善活動で社会福祉に貢献している。その結果「中華慈善賞」(中国民政部より、2008年)「著作権創意金賞」(The WIPO-NCAC Copyright Awards、2008年)などを受賞、「著作権保護の広報大使」(中国新聞出版総署、

¹⁴ 鄭淵潔、「新聞聯播」ニュース番組に報道された「ピピル総動員」の海賊版被害事件、[HTTP://BLOG.SINA.COM.CN/S/BLOG_473ABAE6010006VL.HTML](http://BLOG.SINA.COM.CN/S/BLOG_473ABAE6010006VL.HTML),2006-08-12

¹⁵ “THE WORLD’S TEN LARGEST BOOKS”BY THE UNITED NATIONS IN 2011

¹⁶ 周慧曉婉,新京報,「鄭淵潔IPの改編方針:子ども時代の思い出を絶対に裏切らない」[HTTP://WWW.BJNEWS.COM.CN/ENT/2018/06/27/492742.HTML](http://WWW.BJNEWS.COM.CN/ENT/2018/06/27/492742.HTML),2018-6-27

¹⁷ 鄭淵潔,「童話大王鄭淵潔:作家の財務管理は著作権の保護」,中華人民共和國国家版權局

¹⁸ 鄧建榮,法制網,「重大著作権侵害事案が摘発された」,[HTTP://WWW.LEGALDAILY.COM.CN/LEGAL_CASE/CONTENT/2019-08/26/CONTENT_7975654.HTM](http://WWW.LEGALDAILY.COM.CN/LEGAL_CASE/CONTENT/2019-08/26/CONTENT_7975654.HTM),2019-8-26

¹⁹ 中華商標協會,「2017-2018年度商標訴訟最優秀事例」,WWW.CTA.ORG.CN,2018-9-4

²⁰ 雨悦編集,文化中国—中国網,「鄭淵潔:死ぬ前に全財産を寄付する」,CULTURE.CHINA.COM.CN

国家著作権局より、2011年)等に委嘱された。

今まで(2018年6月)鄭淵潔が創作した童話作品は約1.2万編、計3000万字、3億冊¹⁷図書・雑誌が出版されている。彼の児童文学作品の中で作り上げられた主人公達、ピピル、ルシシ、ShukeとBeita、オオカミロックなどキャラクターが多く読者達に支持され読み継がれている。

2. 中国現代児童文学の沿革および鄭淵潔童話の時代背景

中国の現代児童文学(以下「児童文学」とする)は五四時代(1917~1921年)から始まったと考えられる。その後30年間の発展期を経て第一の黄金時代を迎えた。この黄金期1950年代の新中国では、文芸創作や思索活動の環境が整ったため、叶聖陶、氷心、張天翼、陳伯吹など優秀な児童文学作家が活躍しはじめた。1960~1965年、児童文学は模索しながら発展し、児童詩、児童小説、童話寓話、児童映画と児童演劇文学等ジャンルを誕生した。1966年から10年あまりの文化大革命の間は、四人組による迫害を受けた時期に、ファシズム的な文化運動であらゆる優秀な文芸作品が破壊されたため、この間の童話創作は「空白の10年」と言っても過言ではない時代であった。さらに四人組は児童文学作品を「毒草」と称してこれらを否定し、多くの児童文学作家や作者から創作の権利を奪い去った。10年間、中国中央・地方より出版された児童文学作品のなかには、海外作品や「文革」以前の作品の再版は非常に稀で、中国本土児童文学作品がメインであった。10年間で計1291種類の児童文学作品を出版したと先行研究の記述でわかった²¹。1982年1年の間に出版された児童文学作品種類に相当している²²。この重大な破壊を受けた結果、文化の飢饉とも言える大規模な児童書不足が露わになった。3~4億人²³の児童たちが読める本がない、読ませる本がないという心を満たすための児童書の食糧危機に陥ったのである。文革の収束から党第11期3中全会までの経済運営機軸の転回が開始され、ようやく児童文学創作の回復期を迎えることになった。

この時から中国の現代児童文学の創始者である叶聖陶をはじめ、大先輩の児童文学作家たちは創作活動の再開への意気込みを見せた。新しい観念や思想が現れ、児童を楽しませる童話作品を創作する意欲的な作品が現れた。想像力を最大限に掻き立てる童話の価値性を重視する一方、政治的立場を示す傾向がだんだん希薄になっていった。作家たちの創作の自由度がますます高くなり、束縛から解放され自由に書けるようになる兆候も見えてきた。その創作環境のもとで、児童文学は芸術探索と芸術回帰をより一層重視するとともに、児童の生活に近づけ、日常生活との密接に結びつくことにより生活に根ざした作品が生み出されるようになった。80、90年代に、児童文学創作への道を志した実力のある青年作家が大量に生み出された²⁴。この時期、1977~2000年間の児童文学は現代児童文学発展の第二の黄金時代とも呼ばれている。

80年代、童話寓話では作品の多様性が顕著になる。その中には、「抒情派童話」「活気派童話」など個性のある作品が見られる。形式が多様で内容が豊富な作品が現れてくる。「抒情派童話」とは優美なる童話の境地を中心にして、詩境と哲理を融和させている作風の童話。また代表的な作家の氷波の「毒蜘蛛の死」(「毒蜘蛛之死」,四川少年兒童出版社,1989年)「シロナガスクジラの瞳」(「藍鯨的眼睛」,華夏出版社,1995年)金逸銘の「チャンピオン米米松」(「冠軍米米松」,中国少年兒童出版社,1989年)などが代表作としてあげられる。一方、活気にあふれたコメディ色が強い劇的な童話作品に対して、中国児童文学作家、翻訳家である任溶溶は「活気派童話」と呼んでいる。代表的な作家は彭懿「メタルブラケットをつけた蛙の王子様」(「戴牙套的青蛙王子」,明天出版社,2009年)、鄭淵潔などである。この時期、作品は個性と独特さに注目を集め、鄭淵潔は時間などの常識や考え、慣例を破ることこそ、童話の基本的な資質だということを提唱した。

²¹ 王泉根,2018年,「文革時期児童文学の編年史記憶」,「学术界」第241期,P127

²² 「1982年全国総書目」,中華書局

²³ 「中国人口調査資料」,国家統計局,児童人口数量:1964年、3.2億;1982年、4.1億;1990年、3.83億

²⁴ 北京晨報,「児童文学」雑誌社徐徳霞編集長インタビュー:「児童文学」雑誌は作家の成長を見守っている [HTTP://NEW.S.IFENG.COM/GUNDONG/DETAIL_2013_07/22/27742287_0.SHTML#6467378-TSINA-1-45900-C61ED62311C3E83EE6C7315BFE5CDBFE,2013-7-22](http://NEW.S.IFENG.COM/GUNDONG/DETAIL_2013_07/22/27742287_0.SHTML#6467378-TSINA-1-45900-C61ED62311C3E83EE6C7315BFE5CDBFE,2013-7-22)

3. 鄭淵潔の教育理論と実践の作品

3.1 「児童本位」理論と現実との間の矛盾

2006年12月、「中国作家富豪ランキング」(Writers Rich List、以下「ランキング」という)は「財経時報」のTOPページに掲載された。当時の創業者である呉懷堯は「精神的価値を与える文学作品を創作した作家は経済的価値も創出した。作家たちの現状に目を向けてほしい」という目的で前年度の印税収入をメインに予測・計算によるランキングを創立した。2006～2017年のデータによると、鄭淵潔は毎年TOP10入り、うち3年が1位(図表1による)であった。2019年4月、第13回のランキングが初めて「児童書作家」を独立ジャンルとしてランキング化し掲載する際(集計期間:2018年1月から12月)、鄭淵潔は三つの理由で自ら選考を辞退した。一つ、ランキングの順位より著書の納税額が実売部数を評価する信憑性の高い証明である。鄭淵潔は個人のマイクロブログより納税証明書の一部(納税金額約3400万円、ランキング最下位は約2347万円)を提示した。二つ、作家が出版社や書店と共謀して学校にキックバックすることにより、中・小学生向け図書を営業・販売する行為は「中華人民共和国義務教育法」第25条に違反する行為である。その行為をした作家と同じランキングにのりたくない。三つ、児童に自ら選書する権利を与えるべきである。読書を強制的に行ったり、良書でないものを与えたりすると、結果的に子どもの本離れ、読書率低下につながりかねないと考えられる。一時、これはインターネット上で炎上する騒ぎとなったが、読者にとってその言動は実に「童話大王」らしい率直な意見として受け入れられた。

3.2 「在宅教育」から鄭淵潔の教育実践への考察

実は25年ほど前、1995年鄭淵潔親子が「在宅教育」を選んだことにより「在宅教育」の是非や教育そのものが議論の的になり、賛否の議論が巻き起こった。例えば「在宅教育は義務教育に反するのではないか」「学歴がなきゃ成功できない」など非難・批判が殺到した。学歴が社会的地位や経済収入に大きく関係する風潮が強く、学歴間の大きな賃金格差がみられる「学歴社会」と呼ばれている。中国では、日本と同様9年制義務教育制度を採用し、カバー率は100%²⁵に達した。基本的に在宅教育(私塾教育、ホームスクーリングとも呼ぶ)は認めていない。アメリカでの全ての州で在宅教育を合法化する状況とは違い、自宅で私塾を開く「鄭式教育」は90年代の中国社会から大きな批判を受けた。

「学歴がなきゃ成功できない」と言われた鄭亜旗の今までの経歴をインタビューやQ&Aサイトで本人の回答から抜粋した。

小2の時、同級生に「君のお父さんは有名人だろう。70点って、親の顔に泥を塗るようなことじゃ?」と言われた。鄭淵潔は「60点で十分だ」と教えたが、その話を聞いた時、気持ちはなかなか晴れない。鄭淵潔は「18歳以後独立しなさい。実家に住むなら家賃を払いなさい。」と小さい頃から伝えた。その後、どうやって生きていくのかを考え始めた。

1994年から、ネットで知り合ったコンピュータ関係の雑誌社や新聞社の編集者からの原稿依頼がきっかけで、ゲームマニュアルやソフトウェアレビューの文章を投稿し収入をもらった。

1995年、HTML言語を独学してウェブ開発をやり始めた。当時中国語ウェブページの数量は30個未満、1ページあたり1万円(約164000円)を払うオファーを聞いて、ビジネスチャンスだとわかって、すぐ仲間と一緒にウェブスタジオを立ち上げた。100ページ以上のウェブページを作ったおかげで、30万円(492万円)の資金を集めた。

16歳(1999年)から2年間、株式投資を始めた。利益をもらったが興味が無くなったためすべて売り出した。

18歳(2001年)になって独立した。履歴書の学歴欄に正直に書いたが、面接すら受けさせてもらえず、学歴不問のスーパーマーケットで3ヶ月間の肉体労働を経験した。ある新聞社がスタッフ急募の情報を見てすぐ応募したら、パソコンに詳しいという特長を活かして技術部に採用され、1年後技術部主任に昇格した。

²⁵ 国家統計局,「中国統計年鑑」,2014年

人間関係が悪い職場が自分に合わないを見ると21歳になる前に会社を辞めた。その後、自力で起業するのを決意した。小さい時から日本のアニメやハリウッドの映画、それに鄭淵潔の作品を見てきた。内容を言えば、鄭淵潔の作品はそれらにも劣らないと思うが、当時の市場環境が芳しくない、鄭淵潔も作品を運営する気がないため、ピピルのブランド化について全力投球できない一つの原因だと自分で分析した。こうして作品の運営を任せると提案したが、鄭淵潔はぼくの提案にすぐ乗らなかった。互いに妥協した結果、最初は漫画化する許可を得た。

最初は運営経験が少ないため、ビジネスパートナー選びなどうまくいかず、「ピピル雑誌」の発行初期に大失敗を味わった。

その後、失敗から学びながら10数年の実績を積み重ねたうえ、ようやく鄭淵潔を説得できて、全作品の出版権を手に入れた。運営の結果、鄭淵潔作品の刊行部数は年間100万冊から1000万冊、およそ10倍以上に増加した。

2010年、鄭亜旗はピピル総動員会社を創立し、鄭淵潔の作品を中心にブランド開発を行い運営することにより、つぎつぎと実績をあげて行く。30年前の批判に対して、鄭氏親子が具体的な行動で反論しているようである。なぜ鄭淵潔親子が「在宅教育」を選んだか。その理由は、「子どもや保護者が学校教育に満足できない」、具体的に教師から無条件の愛、知識を楽しく身につけるという実感、道德教育の欠如ということがあげられた。

道德教育について、中国教育学会德育學術委員会の檀伝宝理事長は著書²⁶で以下のように定義している。

道德教育とは、教育者が教育対象の道德性の成長に適宜する価値観や環境の中で、道德的な認知、感情・実践意欲などを養い、道德性を発達させる指導活動である。

「道德教育の欠如」という鄭淵潔の指摘は、作品を通して示している。ピピルシリーズ童話の中で、進学率ばかりを重視する学校側は道德品質よりテストの点数で生徒に優劣を付けがちという現実をさらす。また、道德教育の教材は日常生活を離れている。「人助けは正義」「英雄的行為」という内容を通して詰め込み教育を行う結果、生徒は道德感情（同情や共感の気持ちを持つことを目指す）や道德的行動（気持ちはどうであれ、すぐに行動ができる）が覚えるが、道德的判断（善悪の判断や、規則の理解といった考え方に関する認知的な面）の発達に葛藤が生じると見られる。

人気作「ピピル日記」（1998年）の詰め込み教育への批判は読者に共感されている。例えば、「おばあちゃんと一緒に横断歩道を渡る」「高齢者に席を譲る」のような内容は作文の標準解答となっているため、ピピルは「得点アップするための作文」と「本当の気持ちを書く文章」をべつべつのノートに書くことによって小さな反抗を示した。

現実では、息子が小2のとき、担任の先生が学年試験問題を事前に漏えいし、クラスの点数をあげようと鄭淵潔に告げた。息子は鄭淵潔に「これって正しい？」と聞いた。まさに授業中に「正義の概念を教える」教師が、日常で不正行為を「手本を示す」という大人の言行不一致に混乱させた典型的な事例である。

ただ、注意して欲しいのは、子ども本人の志望や事情を無視して「学校に通わせない」こととは大きな違いがある。鄭淵潔はインタビューでその経緯を説明した。

「亜旗が退学することを決めたのは、従来の教育制度への反対ではない。亜飛に対して、学校を辞めさせるつもりはなかった。彼女は今年5歳で、兄とまったく違い、テストを受けることに楽しんでいる。テストしようと言ったら、大好きなアニメをほっといてこっちに向かって来る。テスト後のほめ言葉一言だけで、うれしくてたまらない。彼女はテストから達成感をもらえる子だとわかってた。だから彼女進学志望さえあれば応援しつづけるつもりだ。彼女の話によると、博士になるのだ。」²⁷

²⁶ 檀伝宝、「德育原理」,北京師範大学出版社,2006年6月

²⁷ 鄭淵潔、「『童話大王』鄭淵潔の常識を覆す教育論」,「同齡鳥」雑誌,広西教育出版社,2007年

2017年、長女鄭亜飛はアメリカの大学計6校（南カリフォルニア大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ニューヨーク大学、タフツ大学、エマーソン大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校）に合格し、現在監督専攻で留学している。鄭亜飛は鄭淵潔作品の英語翻訳版「Jumpy the Bunny」（ウサギびよんぴよんちゃん、天津人民出版社、2019年7月）を出版した。この作品は鄭淵潔が16年前、むすめが幼い頃に寝る前のお話として創作した。

鄭淵潔は子どもそれぞれの発達状況によって異なる教育環境を選択した。在宅教育であれ学校教育であれ、「学歴がなければ成功者になれない」「学歴無用論」などで一括りにした議論は無意味であることを証明した。学歴の取得は成功への唯一の道ではないと示し、子どもの可能性に制限をかけず、両親の無条件の愛を与え、子どもに適合する道を導くことの大切さが鄭氏教育の結果から教えられた。現時点では「在宅教育」について賛否両論だが、時代と共に、多様化する未来教育スタイルの選択肢の一つと言えよう。

鄭淵潔は童話作品の中で自由自在に想像力を駆使し、好奇心旺盛なキャラクターを次々と作り上げた。80年代から今日までの40年にわたって、先見の明を持つ「鄭氏教育観」によって教育のありかたは見直されている。本研究は鄭淵潔童話作品の中に示された児童文学観と子ども観の分析を通して、彼にとって児童文学とは何か、作品によって児童にどのような影響を与えたいかを考察することにより、教育かかわる諸問題や子ども読書推進活動を課題として取り上げる。

研究の方法

鄭淵潔童話について、長期にわたる創作活動、ハイクオリティで3000万字を仕上げた文字数という特徴により、時代の変化により作者の個人的経験に影響を与えたことにより、先行研究ではいくつか創作段階にわけて分析を行った。例を挙げると、論文「鄭淵潔の童話世界」（楊釗, 2011年）では、言葉の表現や読者層の変化など内部・外部の要素から「子ども向け」から「成人化」へ変化していく段階の特徴を明らかに示し考察をした。本研究では先行研究と同様に「段階分け」という方法でアプローチし、さらに鄭淵潔童話の発展段階をふまえた上で、児童文学観と一貫した子ども観に着目し、教育視点を取り入れながら研究を深めたいと考える。

鄭淵潔の作品を子どもの発達段階に例えると、早期作品では児童文学分野を模索していた『幼児期』であり、他の童話よりも抜き出ている発想はあるが鄭淵潔独自の考え方はまだ見えない時期である。80年代初期から「童話大王」雑誌の唯一の執筆者になって以来、育ちざかりの『児童期』に入り「活気派童話」という代表的な流派の中で成長を見せた。その後、不安と動揺を経験しながら90年代の『青年期』に入った。2000年頃、鄭淵潔は創作活動の重点を童話から長編小説に移った。しかし、次の発達段階へ移行する過程は難航となり、多くの課題を残したまま、2002年以降の新作は明らかに減少する傾向が見える。

本研究ではまず鄭淵潔の80年代から約20年の間に創作した活気派童話の人気作を論じて行くこととしたい。ここでは鄭淵潔童話作品の大多数は日本でまだ出版されていないため、「鄭淵潔四大名伝」（代表作の「ピピル伝」「ルシシ伝」「舒克と貝塔（ShukeとBeita）」「オオカミロック伝」を集結するシリーズ作品）の第一部、「ピピル伝」（《皮皮鲁传》）を日本語に翻訳した（本文の後ろに一部を添付する）。また、童話理論研究を踏まえ、童話評論家、童話作家の批評や読者の感想、フィットバックなど多角度から考察を行う。

1. 鄭淵潔童話の発達段階から見える児童文学観

1.1 『幼児期』－詩から童話寓話へ

『幼児期』では詩－童話詩－科学幻想小説－童話寓話のような模索をしている。鄭淵潔が70年代後半から文学創作を始め、最終的に児童文学への道を選んだことは決して偶然ではない。当時、小説と詩が文学の主流を占めたが、児童文学はあまり注目されていない。文革が収束した直後、創作自由を迎えた知名作家の中でこのジャンルに目を向けた人はほかと比べたらかなり少ない。1977年、中国全国でプロの児童文学作家は22名のみ、2億の児童に大きな影響を及ぼしている作品はほとんどいない¹³。詩人を目指し文学創作をはじめた鄭淵潔は「子どものために創作した

い」と決意して、子ども向けの寓話詩「ヤモリとコウモリ」（「壁虎和蝙蝠」、1978年）を発表した。その後、初めて書いた童話を上海市のある有名な児童書出版社に投稿したが、先方は「これは童話じゃない。君は童話のことわからない」と不採用通知を出した。「児童文学」雑誌社の編集者劉庭華が「その童話が輝いているのが分かった」と肯定したおかげで、1979年9月15日、鄭淵潔の童話デビュー作「黒ちゃんは誠実島にいる」²⁸は当時発行部数が全国1位の児童雑誌に掲載され、同雑誌社に「優秀作品賞」にも選ばれた。

その後、当時の科学ブームが広がり、彼は「詩より、子どもたちは科学幻想物語に興味を示している」とすぐ気づいた。

四人組の時期には新聞や雑誌によって科学を宣伝、普及することは罪に問われるため、科学に関連する文章は姿を消してしまった。文革後、中国科学普及文化芸術の創立者高士其（中国著名微生物学者、科普作家、詩人、1905～1988年）は講演で子どもにすぐれた科学知識を普及する作品を作ってあげようと作家たちに呼びかけ、数多くの科学文芸に関心を持つ若手作家を育てたことによって、科学文芸創作活動が盛んになった。高士其の科学文芸作品は正確な科学事実、理論をベースにし、読者を引きこむ活気のある文体、筋のおもしろさが特徴的である。子どもたちに愛されているため、「高士其おじいさん」と親しみを込めて呼ばれていた。

少年のみなさん、生地を発酵させるのを目にしたことあるだろう？ 生地にパン種をまぜて練ると、ちょうどいい暖かさで生地がどんどん膨らんでいく。ふわふわ、ふにゃんとなって、ブクブク泡が出てくる現象は発酵と呼ぶ。

酵母菌って発酵活動の最強の尖兵だ。発酵活動って自然現象で、酵母菌が糖に侵入した結果である。酵母菌は糖に侵入したら、糖をエタノールと二酸化炭素に分解させちゃう。生地を発酵させることを例として、生地に大勢の酵母菌を含んだ。彼が小麦粉の中の糖分と出会うと、たくさんの二酸化炭素（炭酸ガスとも呼ぶ）が出てきた。生地の中でこの気体が充満したら、体が膨らんでいく。人々は生地を饅頭やパンのかたちにすると、蒸したり焼いたりするとき、あつい蒸気で酵母菌が全員殺されてしまう。饅頭やパンを食べるときは香ばしくて、甘くて最高だ。²⁹

高士其の影響を受けた鄭淵潔は科学知識の勉強方法を身に付けるために高に手紙を出した。高からアドバイスや応援をいただいた後に、鄭淵潔の科学幻想小説の創作が始まった。同時期の作「奇妙な洋服屋」³⁰（1985年）の中で、主人公莉ちゃんは学校行事で合唱を演出するため、舞台衣装を作ってもらいたいとお母さんをお願いした。親子はあるモダンな「化学速成洋服屋」をたずねた。ロボット店員は莉ちゃんを有機ガラスで作った部屋に案内した。そこでレーザーホログラフィカメラによって撮影され、データをコンピュータに送った。わずか0.1秒で莉ちゃんの体型の計測数値がわかった。「発泡プラスチック成形機」は体型データを参考しながら、莉ちゃんと等身大の「ポリスチレン発泡プラスチックモデル」を作り出した。

続いて天井から噴射ガンを握る4本のロボットアームが降りてきて、発泡プラスチックモデルに向かい液体を噴射する。その液体は繊維単体、顔料、静電除去剤など速く形成したポリマーの混合物である。液体が乾かないうちに、好みによって生地の質感、厚み、仕様やツヤなど現場でデザインしたり直したりすることができる。莉ちゃんとお母さんの意見を聞いて、ロボット店員は熟練ぶりを発揮して洋服を整えている。襟を曲げたり、ポケットを作ったりしながら、ときどきアドバイスもしてくれた。そうとうゆたかな経験がある。なるほど、店員の「脳」に3万着の洋服デザインのデータが保存されたとお母さんが教えてくれた。

出来上がる寸前、ロボットに好きな色や香りを聞かれた。

「洋服に顔料を噴射する段階で、耐久性のある香料を入れる。お客さんは自分の好みで好きな香りを選べる。」

「あたしチョコの香りが大好きだ！」

²⁸ 鄭淵潔、「黒ちゃんは誠実島にいる」（黒黒在诚实島）、「児童文学」雑誌、1979年9月号

²⁹ 高士其、「酵母菌の物語」（酵母菌的故事）、「高士其全集2」、航空工業出版社、2005年

³⁰ 鄭淵潔、「奇妙な洋服屋」（奇异的服装店）、「爆発前の告白」、寧夏人民出版社、1985年、P39

すると、ロボットはあるボタンを押して、有機ガラス部屋の温度を調節した後、まもなく洋服が乾燥できた。続いて切り口を作って、ファスナーとボタンを貼り付けて、わずか 30 分、1 着の洋服を仕上げた。お母さんは科学技術に感謝すべきだと言った。科学技術のおかげで、われわれの素敵な幻想を現実に変えていくのだ。

莉ちゃんの視点で書いたこのエピソードで読者は主人公と一緒に最新技術の体験者になった。複数の専門用語で技術を紹介しながら、大胆な想像力や創造性を駆使することにより教育性と面白さが揃っている。しかし、科学小説の創作は簡単なことではない。作者に十分な科学知識や童話の表現力が要求された。科学者であり文学家でもあると言えよう。鄭淵潔は科学小説を創作する段階で科学知識という壁にぶち当たり、専門家のアドバイスを受けて努力したが、最後には高士其のような科学文芸作家になれなかった。

ただしその自由自在な想像力や独創性は他の作家にはない特徴であり、単に機械的な存在ではなく、創造的な柔軟性を持ったファンタジーである。時間や空間に制限されず、目に見えない「香り」を身に着ける洋服に織り込み、豊かな想像力で未来世界への展望を開いていったと言える。

もうひとつ注意すべき点として、鄭淵潔は作品を通してファンタジーにも実現の可能性があることを読者に伝えようとしたことである。2015 年、世界初の 3D プリンタープロジェクト「Electroloom」がニュースで発表された。コンピュータ上で型を作り、透明装置内にセットし、液体をナノファイバー（極細繊維）化して吹き付けて、密に重ねることで液体から布を生成し、洋服を出力できるという製造プロセスは 30 年前出版された鄭淵潔の作品とほぼ合致しているとわかった。

童話幻想と科学幻想との大きな違いは科学で解釈する必要がないということである。科学知識の欠如を実感していた鄭淵潔にとって、不得意なジャンルを書き続けるより、自分の「最優才能エリア」を最大限に発揮することのできる道を選んだということは必然である。彼は時間や空間という制限を超えて豊かな想像力を自由自在に駆使することこそ童話幻想の根本であると信じて、想像力を生かして独特かつ前衛的な童話世界を切り拓くことに成功したのである。

児童文学の道への模索の時期である『幼児期』という発達段階で、児童詩をはじめ科学幻想小説、児童小説、童話・寓話へと様々に方向を変えながら、自分の長所・適性を見極め創作の道を切りひらいて行くのであった。

1.2 『幼児期』－活気派童話

成長期の鄭淵潔童話はファンタジーや誇張という表現の特徴を持ちながら、思考の幅をさらに広げ、安定感のある作風が形成され、全体的に芸術性の高い表現力が見られる。中国児童文学作家、翻訳家である任溶溶によって「活気派童話」という名称を与えられた。この時期、鄭淵潔の作品は彼独自の作風を作り出し、一定の作品のスタイルが出来上がった。1981～1999 年は鄭淵潔児童文学創作のひとつのピークを迎えた時期であった。数多くのシリーズ作品を創作した。

特に登場人物に重点を置いた魅力的な主人公を設定するシリーズ「ピピルとルシシ」（1981 年執筆³¹）「Shuke と Beita の冒険」（人民美術出版社、1985 年）をはじめ、シリーズの登場人物をグループに分けて、別々の物語の主人公として再集結する「ピピル全伝」（四川少年児童出版社、1984 年）「ルシシ伝」（同出版社、1988 年）等がある。また、ゲスト出演の形で登場させるものや、別々のシリーズの主人公がその作品の設定を保ったままほかの作品に登場させるもの「ピピルとハートのキング」（二十一世紀出版社、2006 年）の中に、Shuke と Beita がエキストラとしてピピル兄妹と一緒にトランプゲームをした。さらに、シリーズの中に各巻ごとに主人公がいながら、ほかのシリーズの主人公と同一世界、同一時間軸を共有する形で登場するもの等がある。シリーズ童話「十二支の動物」（1986～1992 年）、馬編には「幻影号」というエピソードがある。主人公である陶磁器の馬は「幻影号」という自動車に変身した後、ピピルと手を組んでヒ

³¹ 鄭淵潔、「課外閲読」,2012 年第 8 期,P18-19

ーローになる構成である。

1.2.1 民族性と時代性を備え持つという特徴

児童文学理論家洪汎濤は、「童話において民族性と時代性を強調すべきである。いわゆる中国的（地域的）、いまの（時間的）特色を持つ民族性と時代性ということである。これこそ我々童話的時空観である³²」を提出した。中国現代最初の児童文学の辞典、今まで児童文学作者、評論家にとって主な参考辞典である「児童文学辞典」³³の中に、民族性の概念について以下のように述べている。

文学の民族性とは、文学作品による民族的な社会生活の特徴および民族的な文化伝承、民族習慣、心理的素質、言語の特色などが反映されたものである。

鄭淵潔のシリーズ童話を対象に考察を行い、その民族性と時代性を究明する。

「ピピルとルシシ」のシリーズでは現実生活からテーマを選び、双子兄妹といっても個性はそれぞれであるピピルとルシシという典型的な子ども像を持つ主人公が登場する。舞台設定でいえば、学校ではやりきれない宿題や友達との助け合いがあり、家庭では主人公の奇抜な想像力が親の理解によって認められるという幸せがある。エピソードの展開はどれも読者自身そのものと重なっていく。学校や家での生活を描くことで実感できるのである。これらは読者が自分の経験に重ねて共感し胸が熱くなるものである。また、「Shuke と Beita の冒険」の主人公は、勇敢で聡明な、心やさしいネズミたちである。彼らは正義感が強いキャラクターで、つねに正義のために戦う勇者である。読者に動物愛や人と自然が調和して生きようという気持ちを持とうと思わせる物語である。「十二支の動物」は中国伝統的な十二支の動物を主人公として登場する人気作である。動物それぞれの習性を誇張しながら象徴性（比喩）の芸術手段により加工し、創造的ファンタジーを加えて生き生きと描いている。伝統的な精神性や民族習慣をそのまま表現しながらも社会の現実の問題に挑戦しようとする新たな意味を持たせている。それらの作品に使われる言語の特色は、生き生きとした会話、ユーモアのある比喩などを多用していることである。このような言語表現を通して、読者が自然に登場人物の側に引き寄せられ、身近に感じられる。

言語表現	中国語	日本語
四字熟語	从这以后,皮皮鲁的考试成绩直线上升。本来考试成绩就不错的鲁西西更是锦上添花。	その後、ピピルの試験成績は一直線に伸びて、以前から成績の良かったルシシも <u>錦上に花を添える</u> ようにさらに立派になる。
かけことば	爸爸妈妈认定太阳从西边出来了。	パパとママは <u>おひさまが西から登ってきた</u> と信じた。
比喩・修辞	是啊,明明自己有绝招儿,眼看着朋友要退学,愣是不告诉人家,算什么男子汉?皮皮鲁一咬牙,一跺脚说:“王福!包在我身上了...”	そうよ、暗記のコツがあるのに、友達に教えないとは、男らしくないじゃ?ピピルは <u>歯を食いしばって、足を踏みつけたら言った</u> 「王福くん!僕に任せて...」
子どもの言葉づかい	“ <u>拿脑袋保证!</u> ”王福 <u>山盟海誓</u> 一番。	「 <u>頭をかけて</u> （命を捨てる覚悟で約束する）約束するぞ!”王福は <u>海や山のようにいつまでも裏切らないと誓う</u> 」

鄭淵潔の長男鄭亞旗（1983 年生まれ）は鄭淵潔童話の読者たちと共に成長して行った。それは雑誌「童話大王」（1985 年創刊）も共に成長して行ったことを意味している。多様化されたテーマや学校と家庭に限定しない舞台設定は、鄭淵潔作品の視野の広さや深さが今までの童話とは明らかに違う童話を創作したと言える。鄭淵潔は読者の年齢が上がるに連れて童話の内容を進化させている。

以前の政治の道具にされた童話の教訓的であったり説教調であったりする童話の創作風潮を排

³² 洪汎濤、「童話芸術思考」, 希望出版社, 1988 年, P44-55

³³ 韦苇,「児童文学辞典」, 四川少年儿童出版社, 1991 年, P9

除したからこそ、読者の心をつかむ童話の美に目を向ける感情を喚起できたと考える。子ども読者の文学作品へのニーズに対応しようとするこの意志によって、現実的な子どもがおもしろく読める作品を創出できたのだと言える。これこそが鄭淵潔の創作の鍵だと考える。

中国現代児童文学の二つの黄金時代の童話作品を並べて、時代性について比較してみることにしたい。第一黄金時代は張天翼の「宝ひょうたんの秘密」、第二黄金時代が鄭淵潔の「ピピルとルンシ」を並べ、時代性の特徴をみる。

作者 作品名	張天翼 「宝ひょうたんの秘密」1958年出版	鄭淵潔 「ピピルとルンシ」1985年出版
年代	50年代	80年代
時代背景	搾取階級に対する強い風刺、 労働者を謳歌する	四つの近代化、改革開放時代
意義	積極、健康的な教育意義	児童が以前より早く成熟すること、個性 尊重
空想	夢を作り→夢の打ち破り	創造的な想像力、実現する可能性がある
子ども像	理想的な生活状態を求める	自然のまま→「大人が望んでいる子ども」 ではない
テーマ	幻想だけで幸せにならない、地を踏まえた労働 をすることによって幸せを迎えることができる	自分を見つめ直させる、想像の翼を拡げ ることができる
心の葛藤	教化、教育により欠点を直す	愛で心を満たす。自省心により悪い習慣 をなくすため、関心、理解と愛が不可欠 だ
読者に楽しんで もらうところ	興味を引き起こす→幻想を抑える→童話のま まで終わる。興味、面白さは一時的（最終は 終わるものだ）、戸惑う、どうしたらよいか わからないままと感じる	児童の想像を無限に伸ばすことを目的と して、幻想の実現は「実に簡単なこと だ」と感じる

児童文学理論家浦漫汀(1928～2012年)は著作「簡論童話の時代性(簡论童話的时代性)」の中で以下のように述べている。80年代において、子どもの早期成熟化のため、審美眼や趣味嗜好は前の世代の子どもと大きな違いが見られる。彼らは社会生活に関心を持つ、つねに思考したが、探索の精神も宿る。これらの特徴は文学作品の中でリアリティのある人物に作り上げない限り、架空の類型化された人物や具体性の欠ける概念的人物や、十分に時代を映し出すことはできず、読者のニーズに応えられないと考える。³⁴

鄭淵潔童話は現代の子どもの生活をありのままに描いていて、時代性があり、時代の発展に適応している。鄭淵潔が創作した人物および童話作品の時代性について、浦漫汀は肯定的な視点から意見を述べている。

我が国の童話界の新人作家の中で、鄭淵潔が創作した人物や作品は特徴がある。もっとも重視すべきなのは、連続性のある人物像—ピピルとルンシ—を作り出すことだ。最近の作品「電!電!」³⁵の中で、ピピルの個性の伸長が見られる。もし今後の作品がその個性を十分に発達することができれば、必ず人々の心に深く染み込み、時代に認められるだろう。

³⁴ 浦漫汀、「簡論童話の時代性」,「河北民族師範学院学報」,1986年第3期,P11-17

³⁵ 鄭淵潔,「電!電!」(「闪电!闪电!」),「童話大王」,1986年第2期

1.2.2 鄭淵潔童話のファンタジーおよび童話論理の独特な表現

「子どもの好奇心と想像力を守ってあげる」と鄭淵潔は常に作品の中でアピールする。彼の作品の分析によると、想像力より「幻想力」という言い方がもっと的確だと思える。想像力には再生想像と創作想像があり、これは根本的に区別されている。再生想像は過去の経験を単純に再生産することであり、単純な機械的な生産であり、実際的な繰り返しの生産であるため、実際的な目的のみに役に立つものでしかない(例えば、ソファの形はお城みたいだなあと想像すること)。一方、創作想像は、過去の経験を組み合わせて新しいものを創出することが可能であることで(例えば、お城のようなソファの中に、体が小さい演奏者たちが住んでいると想像すること)、鄭淵潔の童話のファンタジーは創作想像の産物であると言える。

ファンタジーは童話が生活を映り出すときに駆使する特殊な手法である。この特殊な手法によって、童話はほかの芸術表現形式とは大きく違って来る。また、童話のファンタジーは童話のいくつか芸術的な要素とむすびつくものでもある。先行研究では(賀宜「童話漫談」³⁶⁾ 童話の芸術的な要素について、誇張性、象徴性と童話論理性を特徴として挙げる。その中で、童話の論理性というのはファンタジーと現実とを結びつけるルールのことを指す。すなわち、童話作品のファンタジーは現実にもとづくべきものであるということである。ファンタジーは空想もとにして話を展開し、不思議な情景についての描写によって、人々の論理的な思考や規律の認識と連動しながら、非現実的な空想に合理性を与え、現実感をもたらしてくれるのである。童話の論理は童話に合理性や現実感を与える。このような芸術的な機能性を持っていることを無視することはできない。本研究では鄭淵潔童話作品を分析し、童話の論理の独特な表現について考察を行う。

- 鄭淵潔童話のファンタジーは児童文学の新境地を示している

童話の論理の中には様々な論理手法が含まれ、疑似論理もその一つ手法である。疑似論理は抽象的な対象や把握しにくい精神現象などを、一定の時間や空間範囲内にあるものに具体化する形で描く手法である。鄭淵潔は疑似論理の手法を利用し、インターネットが普及し始めたばかりの時代に「即時通信」という、当時わかりづらい現象や事物をわかりやすい物語のストーリーに取りまとめ、読者を現実を超えるファンタジーの世界へ誘ったのである。

「ピピル日記」³⁷⁾の主人公ピピルは放課後、家でピーナッツを食べながら宿題をする。食べるうちに、目の前に外人っぽい女の子が現れニコニコ笑っている。目に見えるが、手を伸ばしても何も触れられない。女の子は彼に教えてあげた。これは「ネットワークピーナッツ」に作用された結果であると話をする。

「ピーナッツの実実は土の中で成長するとき、根と茎から栄養分を吸収する。同じ株元から収穫したピーナッツたちは、お互いにテレパシーのような超感覚的なつながりがあるから、バラバラになっても、お互いに見えないネットワークのおかげでつながるからさ。あたしはただいまピーナッツを一粒食べたの。君もきっと一緒だ。あたしたち食べたピーナッツは同じ株元だ。だって私たちいまピーナッツのネットワークを通して出会ったんだろう。」

ピピルはすぐピーナッツのパッケージを見たら、たしか産地はアメリカと書いてあった。女の子はアメリカ人、モニカという名前だ。その後ふたりは各自の悩みについて話をした。

ピピル:「先生が出した宿題は多すぎる、退屈だ。キミはどう?」

モニカ:「あたしもう13だわ。全然誘われないんだ。いらいらする。パパとママのほうがとても心配で、よくあたしと一緒に理由を考えるの…キミは友達になってくれるの?」

ピピル:「無理だ。」

³⁶⁾ 賀宜,「童話漫談」,「学習資料」雑誌,湖北省出版局,1980年第20期

³⁷⁾ 鄭淵潔,「ピピル日記」,「童話大王」,1998年第4期

彼女は悲しそうに理由を聞く。

ピピルは「担任の先生は男子と女子が仲良くすることを禁止しているんだ。異性とひんぱんに話をする、すぐ先生に注意される」と説明した。

モニカ:「キミの担任、もしかしてロボットなの？」

ピピル:「違うよ、それは異性との交際は成績の低下につながると心配するからだろう。」

モニカ:「異性との交際は成績のほど重要じゃないの？異性とうまく付き合うことさえできない人なら、この先いくら成績がよくても、健全な人間とは言えないわ。うちの先生が言ったの、成績が良くても健全じゃない子ってもっとも残念だ。」

子どもにとって大量の宿題が「退屈」で「おやつを食べながら宿題をする」、教育現場では「異性との交際で成績が悪くなる」と一方的に悪い面ばかりを言い聞かせる性教育に関する学習内容を否定することなど、どれも子ども達の日常生活での悩みであろう。子どもの視点で子どもの生活を映し出し、読者を主人公の側に引き寄せる。現実には目に見えないインターネットをピーナッツの大地に「根を張る」といった想像で機能させる。それぞれの IP アドレスを同じピーナッツの根本で実が生る「ピーネット」に割り当てる。「ネットワークピーナッツ」を食べると、「時間・空間の制限が課せられず、開放されて自由に会話を交わす」ことが可能となるのである。

エピソードの末、ピピルは「ネットワークピーナッツ」の情報を家族全員にシェアするという実に巧妙な展開で締め括る。

その夜、家中のピーナッツはパパ、ママとルシシに一掃された。彼らは各自の部屋でピーナッツを食べながら、空気を相手にしゃべり続けているのをぼくは見たんだ。

鄭淵潔はファンタジーと童話の論理を結びつけることにより、読者に自分を見つめ直すきっかけを与えた。子どもの読者に限らず、大人の読者にとっても「信じること」の大切さが伝わっている一目に見えないことに対しても「信じること」が大切であると言っているのである。それゆえ、20年前に出版された「ピピル日記」は今でも読者にとって新鮮な体験になりながらも、その中に普遍的な価値観を見出すことができるだろう。そのわけは、創造的ファンタジーの日常と非日常との間を描く、童話の倫理を巧みに使う鄭淵潔の作品の芸術的な魅力があるからではないだろうか。

- 鄭淵潔童話に先を見通す力が見える

前述したように、先見性の一例として挙げた 1985 年に発表された児童文学作品「奇妙な洋服屋」について述べてみよう。鄭淵潔は洋服をプリントアウトできる機械を空想し創り上げた。世界初の 3D プリンタープロジェクトが発表されたのは 2015 年である。「飛馬自動車」³⁸の中で、交通渋滞でバスは道路で十数年も立ち往生したシーンを描写している。今の北京の交通渋滞の模様を鄭淵潔の作品の中で既に予知していたようである。実は当時の北京市のモータービークルの数を調べればわかるが(1989 年 47.2 万台, 1998 年 130 万台, 2008 年 350 万台, 2018 年 608.4 万台³⁹)、この作品の舞台設定は完全に鄭淵潔がマイカーを購入した時の予想であった。

1995 年の長編小説「ワタシはお札である」⁴⁰は色々な人の手で扱われ、色々な人生を体験したことによって、凝縮されたお札の「人生劇場」を見事に演出した。

ワタシは人間に一言を捧げよう。「金で幸せは買えない」

遅かれ早かれ紙幣は人々から消えて行く、電子マネーの登場が必然だとワタシは思う。世の中にはワタシたち、お札のように自由自在に人間の間に渡されつつある。

³⁸ 鄭淵潔, 「飛馬自動車」, 「童話大王」, 1989 年第 1 期

³⁹ 北京交通発展研究センター, 「2001 北京市交通発展年度報告書」

⁴⁰ 鄭淵潔, 「1 元札」, 「ワタシはお札である」 (「我是钱 一元钞」), 「童話大王」, 1995 年第 10 期

2018年まで、中国で電子マネーを利用する人（18歳以下の未成年者のデータを含まない）は人口の82.39%⁴¹になった。鄭淵潔の予言「遅かれ早かれ現金が消えていく」というある意味、お札の人生で描かれた状態が進行し、お札の現状は物語と偶然の一致のような状況を呈している。

「創作ファンタジーは空想の機能の一つの応用にすぎない」と佐藤さとるが著書「ファンタジーの世界」⁴²の中で語った。ファンタジー童話は空想の世界から抜き出し、現実世界で自分の空想を実現させようという努力をはじめめるきっかけであると考えられる。

先を見を通す力のある童話は、連想ゲームのように展開しながら現実世界や未来予想へ切り込んで行く、その切り口が巧みであり鮮やかであるからこそ、読者たちは感心させられて新鮮感が味わえる。このように鄭淵潔は空想の断片と未来への憧れを作中に盛り込んで行き、子ども読者から大人読者までこの趣向を味わえように仕掛けをしている。

また、これらのエピソードを通した現実の世界とファンタジーの世界の関係づけにおいて、作者の目の付けどころに変化の兆候が見える。それは童話という冠を外したところで次の発達段階への創作を試みていたと言えるのではないだろうか。

1.3 『青年期』－童話から長編小説へ

中国児童文学史の研究者蔣風は中国現代児童文学の発展歴史を記録した「中国児童文学発展史」⁴³を編集した。90年代に入ると、各少年児童出版社はさらに作品の独創性に注目する。中長編作品の創作は空前のブームとなっている。また、文学創作では児童文学作家のパイオニアのひとりとして、鄭淵潔の名前を挙げた。パイオニア児童文学作家は児童本位を重視し、ファンタジーや空想的なものが公明正大な創作表現より尊重された。彼らが作品を通して児童文学の文体特徴を強調したり実験したりすると述べられていた。

鄭淵潔の創作手法とその作風は、幻想、誇張、豊かな想像力の特徴を持ちながら、形式の安定感が増し、高い芸術性は表現の巧みさによって見事に表現されていると記述されていた。特に現実生活に目を向ける部分である。中国当代児童文学研究者、北京師範大学王泉根教授は児童文学の現実主義について以下のように述べた。

現実主義の思潮とは、現実を目を向けることを強調する。この現実というのは、成人の現実から児童の生存状況の現実および精神、発達の現実を含む世代的にも幅のある現実を指す。(中略) 児童文学作家は、丹精込めて現実、人生、人性に目を向けることで、本質的には写実的小説を創作していると言える。彼らが注視すべきものは、児童の現実や児童にまつわる問題、児童の生存、児童の権利、児童の現状、児童の感情、児童の未来ということであり、これは世代を超えた問題ともなる。⁴⁴

90年代後半、「童話大王」の初期の読者はすでに思春期の発達段階に入った。彼らは自分の年齢層にあわせた作品の創作を鄭淵潔に要求した。鄭淵潔は読者たちから豊富な創作素材を提供してもらったともいえる。例えば、パソコンの操作を覚える、運転免許の取得、テコンドーの稽古、株式投資など成長に伴う読者が直面している現実問題を作品に反映させる。鄭淵潔の童話は読者層に合わせて青年期に入り、同時に作者の知識、注目すること、人生に対する見方や思考も発達していく。それらが作品化され多様な観念まで織り込まれた。

1999年、鄭淵潔は童話創作から長編小説創作へ転じて、20部作を仕上げる予定していた。同年12月、長編小説「病菌収容所」（「病菌集中营」）を連載した後に、鄭淵潔は「童話大王」とい

⁴¹ 新華社「中央銀行の報告：9割成人はインターネットバンキングの口座を持ち、8割以上が電子マネーを利用」,2019-10-22日,HTTP://WWW.GOV.CN/XINWEN/2019-10/22/CONTENT_5443495.HTM

⁴² 佐藤さとる,「ファンタジーの世界」,講談社現代新書,1978年8月

⁴³ 蔣風,「中国児童文学発展史」,少年児童出版社,2007年

⁴⁴ 王泉根,「現実主義:百年中国児童文学発展の主潮」,河南社会科学,2016年6月,24-6

う冠の童話という制限から脱却することを決意した。このままでは自由自在に創作することに支障が出ると感じたからである。

それは、「童話大王」に掲載するには「子どもに不適切」な内容であり生理機能および性に対する子どもの好奇心をむやみに煽り触れている作品であると言われた。これは鄭淵潔から見れば「(性教育は)先手を打つべき、はっきり教えるべき、避けようとするところこそ不適切だ」⁴⁵。しかし、この内容について、多くの人たちは「ダブー」と捉えている。子ども読者の保護者から「童話大王(鄭淵潔)の著書が出版されたら、未成年者が内容について知らずに雑誌を手に入れてしまうため、低年齢層の子どもが読んだ後、理解が追いつかずに誤った方向へ混乱しがちだ」と批判の声が出た。2001年、当時知名度の高い法律テレビ番組「今日説法」は童話作品の成人化傾向の話題を取りあげた。つまり「童話大王」雑誌の内容の変化に対して批判的な立場で言及が行われた。その後、「童話大王」雑誌編集部宛に読者の親から手紙が届いた。それは長編小説の内容に成人向けの表現や記述の傾向があるため、子ども読者に不適切だと思われるというものだった。そこでは、「缶詰小人」(「罐头小人」)時期の子ども向けの内容に戻ってほしいと要求が出された。これに対して鄭淵潔は雑誌のコーナー「ルシシとピピルの対談」⁴⁶を使い声明を発表した。鄭淵潔と雑誌社は2002年から「童話大王」に新作を掲載しないことを決定した。すでに出版された「鬚象」(「仇象」)等、他7部、掲載予定であった13部の作品の出版は見送りになった。連載中の「鬼車」(「鬼车」)が途中で掲載打ち切りとなり、これはあらためて学苑出版社から単行本で出版することになった。

鄭淵潔の「童話大王」での作品の転型の試みは成功に至らなかったが、一つ重要な課題として提起した。それは性教育のダブーを破り自分の身を守ることを教えるという重要な主張を諦めないということである。性教育の一番理想的な状態は、すべての学校の、すべての子どもが系統的な性教育を受けることであると考えていた。ところが実際の教育現場では、性教育が不十分であり、形式的な教育が行われていたのが現状であった。鄭淵潔は長男のために性教育の指導に効果的な教材を作った。この教材は長い年月を経て、当時使った教材を改めて編集する形で出版することができた。それが性教育図書の「あなたはどこから?わたしのお友達よ」⁴⁷である。異なる発達段階(3~6才、7~9才、10~13才)の子どもに性に対する認知や必要性に合わせて童話、対談、漫画などいろいろな方法で性知識を教え、親のサポートになる内容である。

1.4 結果と考察：鄭淵潔にとって児童文学とは

鄭淵潔の児童文学は小川未明の「小説創作から児童文学へ」とは違い、「児童文学から小説創作へ」の新たな試みを行ったというのが特徴である。小川未明が「童話と随筆」(昭和9年)で童話の使命について述べたように、童話の使命は児童を中心とする芸術の使命にほかならない。一つは児童等を自省心の誘発によって感化することであり、もう一つは、児童等の天性を保持するために社会に対する代弁でなければならぬのであります。「童話大王」の『幼児期、児童期、青年期』を振り返ってみれば、鄭淵潔は童話をその中心に据えて創作活動を行うという信念は一貫していることがわかる。それは児童本位であり、児童権益を意識しアピールし、児童の好奇心や想像力を守ることとそれぞれ児童の能力・素質に応じた多様な教育の必要性、また道徳教育を重要視することより、規範意識を持った健全な人格を育ててあげるといった主張とその信念である。

2 鄭淵潔の子ども観から子どもという存在そのものへ

「児童文学辞典」では子ども観を以下のように定義している。

(子ども観とは)子どもをどのような存在として捉えているか。

子どもを尊重し、独立人格の個人として同一視し、理解を与える態度で接する。児童文学作家は正確な子ども観で子どもに理解を与え、作品の中で子どもの現状や社会の発展にふさわしく新ら

⁴⁵ 鄭淵潔、「名人対面」インタビュー,2011年

⁴⁶ 鄭淵潔、「ルシシとピピル対話録」,「童話大王」,2002年1月

⁴⁷ 鄭淵潔、「あなたはどこから?わたしのお友達よ」(《你从哪里来,我的朋友》),天津人民出版社,2015年

たな時代の人物像を創り上げるべきである。児童文学批評家は正確な子ども観で子どもの生活、子どもの心理、子ども教育および児童文学創作のルールなど問題について研究を進むべきである。

子どもは現実生活の客観的な存在である。子ども観は子どもを対象とする研究であり、大人の意識形態で主観意識より出した結果である。子ども観は子どもに近づいてゆきながら、近似値を求める。子どもを目標として向かいつつあることは動態的な過程であり、常に発達途上である。

2.1 「子どもの天性を守り、想像力を自由にはばたかせる」という主張

鄭淵潔童話の中の子どもたちは、子どもとして調和を認められ、いきいきとした個性的な生き方をしている。子どもの天性(無邪気、ナチュラル、調和して生態系の一つとして存在するということは、文明や社会化に対照的な概念である)は登場人物を通して十分に表現できている。

「紅塔楽園」(1987年)のエピソードの中で、都心で生活している子どもたちは放課後サッカーをするつもりだったが、ある事情で遊び場がなくなり、誰かの家の中でおもちゃでみんなと遊ぶことにした。主人公ピピルはある噴霧器のおもちゃに目を付けて、色違いのレバーを押すだけで人間を大きくしたり、小さくしたり、現状維持したりすることができる不思議な噴霧器だということがわかった。すると子どもたちは自分の体を小さくし、おもちゃを使って家の中を「大きな」楽園に変えることができた。そこにはジェットコースター、迷路遊びなどで思い存分楽しむことができた。その遊園地を「紅塔楽園」に名前をつけた。

みんなはとても楽しかった。だって、やっと自分たちの楽園ができたもの。これからは、ここで遊ぼう、サッカーの試合でも、自動車競技でも、海戦でも、航空作戦……

ピピルはオリヅルランを運んできた。そのオリヅルランは原始林になり、馬小丹は積み木で「紅塔ホテル」を積み上げた。蘇宇は粘土を持ってきて、みんなと一緒にテーブル、椅子、ソファなどを作った。またそれらをライトで飾られた紅塔ホテルの中にセッティングした。ピピルと蘇宇は大きな風呂桶に水をたっぷり入れてホテルの建物のそばに置いた。そこに2隻の軍艦を水に浮かべ、風呂桶に埠頭まで作り上げた…

ピピルも紅塔ホテルの豪華さや広さに驚いた。彼らがこんなに広くて、素晴らしい建物に入ったことはなかった。生まれてからずっと同一の狭小な空間で暮らしていた。目の前の広々な建物は彼ら自分の楽園だと思いついたとき、5人の友達は揃って抱きしめて、大変感激した！生まれてからずっと大きな活動空間に憧れていた。以前、先生は授業で地球はどれほど大きいか、宇宙はどれほど大きいかと言ったとき、彼らはいつも「だったらなんでわたしたちの居場所はこんなに狭いの？」と戸惑う。今はもう違う、彼らは広々な空間で児童の天性を思い存分発揮することができるからだ。

ピピル探検隊は紅塔ホテルから出発し原始林に歩みを進めた。オリヅルランの葉っぱに沿って登り始めた。

やっと大自然に触れた。やっと緑が見えた。彼らは緑の葉っぱの中に身を置くと、初めて命ということが実感できた。自然の中に属するひとつ生命体だ。ここには高層ビル、環境汚染や騒音がない、親の説教や先生の指摘がないんだ。泣いてもいい、笑ってもいい、ふざけてもいいんだ……

ピピルは友達と玩具のヘリコプターを操縦して室外に出た。偶然にヘリコプターの窓からあるおじさんが心臓発作で苦しんでいる姿を発見した。彼らはヘリコプターを出窓に着陸させて、穴が空いている網戸からおじさんの部屋の中に入り、みんな協力しながら電話機の手話器を持ち上げ、ダイヤルを回し救急車を呼んだ。直ぐに救急隊員が来たのを見届けて、彼らは黙ってヘリコプターで紅塔楽園へと戻った。そして海戦が始まった。

ピピルと馬小丹はうれしくてうれしくてたまらない。夢の中でも軍艦に乗りたかったが、今日はやっと夢を叶えた。しかも海戦をするのよ。やっちまえ！砲艦は相手の動きに鋭敏に反応できるメリッ
トがあり、まもなく巡洋艦のうしろに回ってきた。

「船体に衝突！」ピピルが言った。

ちょうどそのとき、敵船は後ろにいる砲艦を見つけ、Uターンしようとし、艦船が横になった。

「行け！」ピピルは拳を振った。

砲艦は野生馬のように敵船に向かい猛ダッシュした。

ものすごいひびきとともに、天地がひっくりかえるようなめまい感に襲われ、ピピルはひんやりと冷たく感じた。

軍艦2隻とも撃沈した。

ピピルは一生懸命水面に浮く、やばい！ミスを犯したとわかった—蘇宇と張璋は溺れるぞ、彼らは水泳できないもん。

幸い、みんなが心をつにして協力し合ったおかげで、「はてしなく広大な海」から溺れていた人達を救助できた。みんなはホッとした。もう日が暮れて、誰でも紅塔樂園から離れたくないんだ。でも、家に帰らないと親に心配されるとわかっていた。

「あしたは原始林に関する本を借りてくる。原始林のこともっと知りたいんだ。」蘇宇は言う。

「将来、ぼくは航空学院に行きたいんだ。」馬小丹は言う。

「ぼくはダイバーになりたい。」張璋は泳げないことをちょっと恥ずかしく思った。

「あたしはあの電話交換台のおばさんのようになりたい。」田莉は言う。

「ピピル、君は？」蘇宇が聞く。

「ぼく？ぼくならまず空中に止まっているヘリコプターをどうやって地面に着陸させるのを研究したいんだ。」ピピルは窓の外に浮かんでいるヘリコプターを指差して言った。

みんな笑った...

帰ろうとしていた際、子どもを探しに来た親は誤って「現状維持」のレバーを押し噴霧したため、子どものふたりが永遠に小さい状態になってしまった。ふたりの子どもは喜んで叫んでいる。他の子は「わたしたちも戻りたくないから、噴霧してください」と親たちに大きな声で叫び出した。このエピソードの始末とは？結局小さくなった子どもは元に戻れたのか？読者の想像に任せる形でおしまいとなる。

中国では一人っ子政策(1979～2015年)の影響で、都市部の一人っ子の比率が高まり子どもの数がすくなくなり、友達同士で遊ぶ機会が少なくなっている。また、都市の居住環境では、マンションに住む子どもは自然に触れる環境が少なく自然に憧れている。このエピソードの中で、子どもの遊びの天性は思う存分に発揮できている。彼らは遊びの中で想像力や創造力を発揮させ、協力しあうことや人のために力を尽くすことなどを学んでゆく。彼らは自分の望みを素直に受け入れ、達成する方法を自発的に考える…これらの行動はかえって我々の子どもに対する知見を深め、子ども研究の分野にも触れることができる。例えば心理学の立場の子ども観を見ると、「創造力と感受性という純粹的、主観的な人格を見落とししたか」という観点を掘りおこすことができる。「想像にお任せ」という結末は、まさに鄭淵潔の「自然のまま」の教育観を披瀝しているのではないかと考える。彼は「説教をする大人は、本当は子どもの知力を過小評価している。正直な人、想像力のある人になろうと子どもに伝えればそれでいい」と指摘した。

子どもの天性を認めてアピールする童話として、この作品は大成功であったということが読者のコメント⁴⁸からも分かる。

⁴⁸中国の読書コミュニティサイト, BOOK DOUBAN, [HTTPS://BOOK.DOUBAN.COM/SUBJECT/1263273/](https://book.douban.com/subject/1263273/), 2020-1-27 確認

「紅塔楽園は子ども時代の夢を描いた。」(WHATSERNAME,2010年)
「もう何年経ったかな。今でもあの紅塔楽園、噴霧器、海戦が覚えている。」(蘇耽鶴,2011年)
「紅塔楽園は、もっとももっとも美しい子ども時代の思い出」(範徳一彪 ROCKY,2011年)

子どもを正確に認識することを基本的な研究課題として捉えたのはルソーである。「エミール」(1762年)の中で重要なことは「子どもをどう見るか」ということである。ルソーは三つの発達理論、人の教育、事物の教育(ほんのちょっとしか左右できない)と自然の発達(まったくこれを動かすことができない)を提出した⁴⁹。この三つは互いに矛盾なく、協調しながらバランスよく発達する状態を実現することが望ましいとされる。その中で、自然の発達は動かすことはできず、人の教育は自然の発達と合致させることが要求されている。

人間は生まれつきの感受性があり、外から刺激を受け取ることにより認識が始まる。求めることがあれば避けることもある。最初は自分の喜ぶものを求め、不愉快を感じることを避ける。続いて便利を求め、不便を避ける。最後、理性で幸せもしくは完全性の観念で判断を行い、その判断にふさわしいものを求め、ふさわしくないものを拒否する。すなわち、人の教育は自然の発達と合致することである。児童期なら児童らしい育ててあげるし、大人への期待を押し付けない。特に愉快、不愉快を行動原則としての発達段階である。

目の前の利益は勉強の最大の原動力であると子ども観の第一人者であるルソーは提示した。言い換えると学習の意欲を起こさせること。鄭淵潔は子どもの遊びの天性をもとにして、「体を小さくする噴霧器」という道具を創り出す。児童小説「アリスは不思議の国に迷い込む」の仕組みと一見似ているが、本質では異なっている。「紅塔楽園」は最初から存在した「不思議の国」ではなく、子どもたちが想像力と創造力を駆使しながら作り上げたといえる。そこで、「原始林、潜水、操縦士」など興味や関心をもたらす源から「知りたいという求知心につながる感覚」が湧いてくる。

2.2 「ピピル」などのキャラクターの設定について

2.2.1 児童期における友情観念

ピピルとルシシは双子兄妹とはいえ、性格はまったく違う。ピピルはわんぱく小僧で、学校で有名な成績の悪い子だ。家でもいつもミスを犯して、パパとママに叱られるのは日常茶飯事だ。一方、ルシシは兄と違い、クラスの優秀生であり、家でもいつも褒められ、いたずらもめったにない。(「缶詰小人」⁵⁰)

主人公たちの性格の設定で多くの読者の共感を得る一方、ふたりにちなんだ家庭、学校、社会を舞台に温かみのあるエピソードの展開によって、読者たちの生活では体験できないちょっと不思議な場面での悩みや矛盾に出会い、友情の大切さが伝わってくる。

「赤いソファーマジック・シティ」は信頼と約束を基盤とした友情のことを子どもに教える擬人化童話である。赤いソファの中に住んでいる住民たちはピピル兄妹に発見されてしまい、居場所や秘密を守るためある「取り引き」を申し出た。

「ひとつ、どんな場所からも、どんな方法でも、マジック・シティをのぞいてはならない。ふたつ、このことをだれにもしゃべってはならない。みつ、われわれの音楽をだれにもきかせてはならない」

「もしその要求をちゃんとまもったら？」とピピルはたずねます。ただで返事をするわけにはゆきません。だって、それらの要求をまもるのは、そんなに簡単じゃないのですから。

⁴⁹ 梅根悟、『ルソー「エミール」入門』,明治図書,1971年

⁵⁰ 鄭淵潔,「缶詰小人」,「ルシシ全伝」,四川少年兒童出版社,1988年

「あなたとあなたの妹に、毎日うつくしい音楽をきかせてあげます。これはしあわせなことですよ」

物語の仕組みとして「約束破り」が起こった。ミュージック・シティの「勉強上手の曲」を聞いたら「ピピルの点数はぐっと上がり、いつも成績の良いルシシがさらに優秀になった」。クラス内の成績ワースト 1 位の王福くんはピピルに「成績をよくする秘訣を教えてください」と頼んだ。ということで、ピピルは自分と同じ成績の悪い王福くんを同情するため、この「秘訣」の一部をふたりだけの秘密として教えた。彼はミュージック・シティの曲をひそかに録音し友人に貸し出した。その後、曲を聞いた友人はテストに合格し退学せずに済んだ。しかし、友人の姉は勝手に曲をコピーすることにより「勉強上手の曲」の存在は世間にバレてしまい、大騒ぎになった。

家の中、あきらかに違和感を持つ父に本当のことを言えず、ウソまでついた。ピピルは自分の過ちを知り一晩中寝られなかった。彼は三つ目の約束を破ったことをミュージック・シティに打ち明けた。

ピピルはどういうことがおこったのかという事情を、総指揮者にくわしくしゃべりました。

「それでよいのです」

この返事をきいて、ピピルの心はパッと明るくなりました。

「でも、ぼくは自分の誓いをやぶってしまった」と、総指揮者がゆるしてくれたことをうれしくおもいながらも、ピピルはつぶやきます。

「きみの友だちのたすけになれて、われわれもうれいのですよ」と総指揮者。

「ありがとう」ピピルは赤いソファのミュージック・シティの音楽家たちのやさしさに感激しました。

ルソーによる「自然の教育」における罰とは「自然罰」であり、「罰がつねに、子どもの悪い行為の自然な結果として子どもに起こるようにせねばならない」とし、そして子どもにとって「自然な結果」に見えるようにするためにも教師は配慮すべきである、という考えを著書「エミール」の中で紹介している。鄭淵潔の論説では徳育とは管理ではなく、体罰を放棄し、讃える教育方法と考えるべきである。ピピルは友達を助けるため約束を破ったとき、ミスをした結果で自然に心が苦しむ。ミュージック・シティは罰を与える代わりに褒める一言で彼の行動を肯定してあげて、大事なことに内側から気付かせるという形で教えたのである。彼は信頼や信用の大切さを認識するようになった。発達心理学の観察では、友情概念にいくつか発達的変化があることがわかった。児童期（6～12 歳）では他人の観点に立って自分の考えや感情について内省できる。行為の互惠性よりは考えや感情の互惠性に気づくことになる。⁵¹

2.2.2 子どもをテストで評価することへの疑義

ピピルの数学成績は 70 点を超えたことない、クラス内の成績はワースト 2 位、学校をサボったため先生は親に知らせ、先生を悩ませ、親に怒られる子だ。しかし、鄭淵潔は彼を「劣等生」と決めつけないし、子どものお手本にするつもりもなかった。ピピルは犯したミスに対する責任を果たすためには、ときにはウソまでつく。「缶詰小人」の中に「ウソいっちゃダメ」という教育について鄭淵潔は違う見解を示していた。

ルシシはお母さんに頼まれ缶切りで缶詰の蓋を開けた。

彼女はいつものように缶詰に鼻を近づけて嗅いだ。突然、彼女は缶詰の中身に目をつけた。なんと、缶の中にマッチの大きさである小さな人が 5 人もいる！

ルシシは缶詰のラベルを見ると、間違いなく「肉の缶詰」と書いていた！ いっぽう、缶の中にいる

⁵¹ 無藤隆, 高橋恵子, 田島信元編, 「発達心理学入門」, 東京大学出版会, 1990.2, P158

小さな人たちもいきなり強い光を浴びてまぶしいと感じるようで、手で目を塞いでいる。

ルシシは注意深く観察したら、小さな人たちはみんなそっくりだ。腕も足も揃い、サイズは小さいだけで、自分と全く変わらないんだ。

「キミは誰？」どこかから声が聞こえてきた。（「缶詰小人」、第1節）

ルシシは缶詰と小人たちをお母さんに見せようと思い、部屋から出たところで思い出した。お母さんはピピルが動物を飼うことが大嫌いだ。いままでたくさんの小動物を飼ったが、例外なくお母さんに処分された。ほら、前回ピピルはどこかからシロネズミ1匹を家に連れてきたが、お母さんにベランダから投げ出しちゃったんだ。

「ママとパパは缶詰小人たちをどう処分するだろう？」とルシシは考えても考えてもわからないが、きっと不幸な結果になる恐れが多いだろうと信じている。

そう考えたら、ルシシは缶詰小人のことを隠蔽しようと決めた。

お母さんはむすめの手元から缶詰を取った。

「肉はどこ？」

「この缶詰の中に肉が入っていない。」

とルシシは事実を言った。その後、お父さんにも怒られた。ルシシの心が揺れている。

ルシシはほんとうに缶詰小人のことをお父さんに伝えたかった。しかし、お母さんがピピルが飼ったかわいいシロネズミをベランダから投げ出したこと思い出すと、もうこれ以上というのがこわくなった。缶詰小人がシロネズミと同じようにさせられちゃうかと心配している。

ルシシへの疑いはまた続く。

「ルシシ、一体どういうことなのか？パパに教えて、いい？」お父さんは優しくむすめをお願いしてみた。

ルシシは小さい頃から親からみると聞き分けの良い子であった。学校でも毎年優秀学生と評定される。彼女ならほんとうはパパとママに内緒にすることはしたくないだ。パパの期待している目線を感じながら「缶詰小人」のことばがすでに喉から飛び出すところだった。しかしパパとママがシロネズミをベランダから投げ出した情景を思い出したらすぐことばを飲み込んでしまった。

「ねえ、パパに教えて、なにがあった？」

「なにも...なかった。」

「ウソつきのをやめなさい」

「あたし...違うの」

ルシシは目をつぶった。今頃になって、彼女にはわかっていた。この世に生きるうちに、人間って仕方なくウソをつくのだ。愛と同情のため、彼女はウソをつかなきゃ。もし真実を言うならきっと缶詰小人たちはひどい目に遭う。

「ルシシ、あんたはピピルの真似をするな」お母さんは怒りを抑えながら言う。

ルシシは以前からピピルのことを多少軽蔑していた。わんぱくで成績が悪い、よくからわれているからだ。だとしても、なんでママがピピルの悪いところを真似したと断言できるの？今回の件はピピルとなんの関係もないのに。ルシシはうすうす感じている、一度ミスを犯した人に対し、これからどんな悪いことがあってもとっくにその人の仕事だと疑いがちなんだ。彼女は初めてピピルの濡れ衣を晴らしたくなった。

この段階からルシシは親の詰問に対してウソをつき始めた。その変化に対して、両親は「なんでむすめがガラリっと変わった」かがどうしても理由がわからず、お父さんは先生に相談してみ

たけれどさらにむすめに不利な情報を耳にした。一方、母は「息子の影響で、いい子であったむすめをいたずらっこにしちゃった」のではないかという疑いをなんども口にした。

「ピピル、キミは学校に行かないくせに、妹まで共犯者にするつもりか？」お母さんはまるで息子がむすめをそそのかしたと断言できるようだ。

「どうせいいことならぼくと関係ないと思うだろう」ピピルの目線は天井に向いて、「この世界での悪いことならついぼくのせいにするんだ」と呟く。

なるほど、ルシシはわかった。ピピルのようないたずらっ子って、実はパパとママ、先生に責められつつあり、そしてますます反抗的になるのだ。そもそも彼らと無関係だとしても、つい彼らのせいにして疑ってしまう。このようなことはいくらでもあるだろう。(第8節)

入学前後の発達段階から子どもはウソをつきはじめる。「ウソはダメ、正直にきなさい」と伝えるのは大切な道徳教育である。その一方、子どものウソについてルソーは深く分析を行っていた。

• ウソはどう生まれたか？

子どもは大人に「ウソはダメ」と教育され、ウソをつくると罰すると決められた時、うっかりミスをしたと意識するとたん、自然にそのミスを隠すためついウソを言い出す。子どもに不可能なことを要求し、こうしちゃダメと約束したら約束を破るとき罰を与える、これが子ども相手の教育方法となる。ウソをいう行為はこの教育方法に強制的に服従させる結果につながるのである。この方法で教育しないようにしさえすれば、ウソは生まれなくなるというのがルソーの観点である。

• 子どものウソ

ルソーは子どものウソについて 2 種類があると言う。一つ、すでに発生した事実を歪んで報告する。目的は罰を回避するためである。もし罰がなくなったら、ウソをつかずに済む。二つ、未来のことに対する約束をなんでも口に出すこと。

エミールは両親や先生の個人意志に服従することが要求されていないため、罰を受けたとしても、それは過ちを犯したとき自然の罰を受けただけで、ウソをつく必要がなくなる。二つ目の状況に対して、ルソーの見解では子どもとこの先のことに対して約束をする自体は発達段階に反する教育法である。彼らは未来への見込みがないため、どんな約束でも口にする。

ストーリーの最後、ルシシが隠蔽した缶詰小人の秘密が両親にバレてしまった。

「なんでこのことを親に内緒するのか？」お父さんは理解できずむすめに理由を聞く。

「パパとママは兄ちゃんの小動物たちを例外なく捨てたじゃないか。今度も...だって、怖くて」ルシシは小さな声で答えた。

まさか！この一連の事件の原因は我らの過ちだ！お父さんとお母さんは驚きのあまり棒立ちになる。自分で産んだ子だから勝手に誤解しているのか？そんな権利にはないはずだ！

この瞬間、お父さんとお母さんは混乱している。

心理学では「考え」と「感情」と「行動」の結びつきについてこう述べた。人間にはまずもともになる「考え」があり、つぎに人との関係による「感情」が生じ、その結果「行動」が起こるとすれば、「行動」の仕方を変えるには「考え方」と「感じ方」を変えなければならないということは容易に想像がつくであろう。⁵²

ルシシは缶詰小人のことを親に知られたら「きっと不幸な結果になる恐れが多いだろうと信じ

⁵² スーザン・フォワード著、玉置悟訳、「毒になる親 一生苦しむ子供」、講談社、2016年9月

ている」と考え、「だって、怖くて」の感情が生じ、反逆の行動パターン「ウソをつくこと」が起こった。間違った教育法で子どもに本当のことを言わせるのは、ただ子どものウソをつく行動に奨励を与えるにすぎないだとルソーは断言する。子どもの「考え」や「感情」を無視し、「ウソをつくな」のような服従的な「行動」を要求する教育法は子どもの精神的独立を阻んでいることが考えられる。

鄭淵潔が大人に伝えたいことは、正直な人になろうと励むようになる場合、そこには教師の無条件の愛が不可欠だということである。テストの点数が低いというだけで差別することは間違っている。両親は子どもを尊重すべきであり、平等で対話をすることや自尊心を養うことが大切である。教育とは管理ではなく、大人が自ら手本となり子どもを方向付けることであり率いることである。鄭淵潔の作品にどうしようもない劣等生やら理想的な優等生やらが存在しない理由を考えてみるべきである。ピピルのような子どもは、その良さや能力は学校風のテストではわかりかねる。ルシシのようなおとなしい子どもが優等生らしくない行動をすれば、もっと厳しく責められる傾向がみえる。教育者は子どものどこがいいのかということを見定め、評価する能力を持つべきである。子どもにいろいろ質問してみることができるとは、人柄や能力をテストという方法では判断できるわけがないというのが鄭淵潔の主張である。

2.3 結果と考察：作品を通して子どもにどんな影響を与えるか

児童期は子どもの感性（情感と想像力）が発達する最高の時期であり、農業でいえば二十四節気を逃すわけにはいけないようなことである。大人はその感性を芸術によって見守る。児童本位である児童文学には子どもの感性を見守って、発達させる責任を果たさなければならない。子どものいきいきしている審美力に信頼を与え、大人の鑑賞力をハイレベルと見なし、子どもの鑑賞力を低く評価する観点を見直さなければならない。児童文学の世界で、大人と子どもは対立関係ではなく連続した一体のものなのである。二つの大きさの違う同心円である。大人の児童文学作家は「子どもの心を持つ」成熟した「子ども」として、彼の価値観はまず子どもの価値観を受け入れたうえで周りへ広げていく。子どもの同心円より広げていく部分は作家の豊富な人生経験や知見である。それで子どもの自省や発達を方向付け導いて行き、それが未来へ羽ばたく羽がふっくらして健全な人生を生きて行くためにも必要なものである。児童本位の児童文学の中で、作家とは子どもの「相棒」であり、子どもの利益を根本的な立場として健全な成長を追求している子どものための案内人でもある。

結論 鄭淵潔作品が提示する子どもの発達に関する問題点

1. 発達段階の特徴に合わせた教育視点を選ぶ

鄭淵潔童話「児童期」（1981～1999年）の作品を調べる際、読者のコメントから愛読されるヒントを集めることによって、これらの人気作（「赤いソファーミュージック・シティ」「龍珠風波」「牛魔王新伝」「缶詰小人」）の一つの共通点にたどりつく。「活気派童話」の独創性や読者の興味を持続させるような物語の構成以外、主人公の発達段階を小学校4年生に設定するという共通点である。前の文で鄭淵潔の童話は読者層別に描き分けられたと述べたが、なぜこの「小4」の年齢層を切り口に創作された作品が今でも読み継がれているのだろう。

中国では小学生健康心理への研究について以下のような論述がある。

10-12歳の発達段階では、(子どもの)行動、性格や知力の発展が迅速である。身体の発育はより激しくなり、自我意識が強まる。ただし、彼らの知識や社会的経験が不足のため、心理的問題に遭遇する可能性が高い。我々が重要視すべき、向き合うべきことである。⁵³

発達段階について身体の発達とともに、子どもの心理的問題を取り上げられた。しかし、「壁」として越え難しく感じられるいっぽう、「10～12歳」という年齢と結びつけられる科学的

⁵³ 張桔紅,「小学生健康心理の現状や教育対策」,「学週刊 LEARNING WEEKLY」,2019年12月,P175

な根拠が説明されていない。心理学的な変化、心の領域の特徴などを発達心理学の観点から紹介する著書「子供の『10歳の壁』とは何か？ 乗り越えるための発達心理学」⁵⁴では、「発達心理学の領域でも、「9歳」「10歳」あたりを切り取って、どのような発達がある年齢なのかについて詳細にまとめられてはいない。しかし、発達心理学では、各年齢での発達の特徴について、多くの知見が蓄えられてきている」と述べている。

どのような発達のな変化が起きたか、10代の発達の特徴を考える。例えば、科学的・論理的に考える力の発達は、個人差が大きいと考えられる。日常のこれまでの経験から自分なりに導きだした独自の（誤った）考えに支配されて、科学的な知識を受け入れられず葛藤状況になりやすいところも出てくる。友達関係の変化について、「同じ遊びが好き」といった外面的な行動によって一体感がえられる子ども集団から、互いの類似性を「言葉で確かめ合う」ような仲良しグループに変化して行く。こうしてさまざまな心の変化が生じるわけである。発達の考えると、この時期の問題行動の生起には、特に友達からの疎外感や自尊心の不安定さが背景にあるように思う。また、葛藤体験を重ね、問題を解決していく力を育ていけるように支援すべきだとわかる。

ここで鄭淵潔が小学校4年生で転校・退学された事例を振りかえり、前述の著書を参考しながら「発達段階の葛藤状況」の視点で読んでみよう。

「早起き鳥は虫を捕まえる」という作文のテーマに対して、彼はその考え方を変えてみた。虫なら早起きすることは身を危険にさらす行為だと推論を立てて作文を書いた。考える力の発達の視点から見ると、子どもは10歳前後に「具体」から「抽象」への転換期を迎える。その変化の中に創造性の変化も挙げられる。課題を面白く考えようとする子どもは仮説や推論を立てて、自分なりのイメージを大胆に表したりするようになる。「子どものいたずら行為」という主観的な印象のみで話さず、客観的に見るのは必要だと考える。

「君は無知な者だ」と先生にクラス全員の前で強い口調で指摘された後、鄭淵潔は「もう我慢できない」「自分の気持ちを伝えたい」という感情を駆使し、「爆竹を一気に爆発させた」の行動をとった。子どもの感情の発達について、9、10歳は「感情」を対象化して考えられるようになり、それを文章や会話の中でも表現できるようになる。「ただし、自意識過剰になる傾向が強くなるため、傷付くのを恐れて感情を押さえ込んだり、逆にコントロールできない状況もできます。そこに、第二性徴におけるホルモンの分泌や受験などの環境の影響も受けることから、大人からすれば対応するのに難しい年齢に入ります。」

教職経験者ではないものの、鄭淵潔は小学4年生の味方を気取って創作したこれらの人気作から読み解いたのがこの「様々な視点から子どもの問題行動を見よう」という教育における大切な視点である。

このような視点を持つようになったら、大人は子どもに対して一貫性のある行動をとり、愛着をうまく形成するように取り組む一方、子どもを無視したり、後回しにしたりしてはならないことが意識できると考える。この発達段階で子どもにどうかかわったら良いかという課題において、周りの大人からの支援や環境を整えてやることが重要だと考える。

2. 子どもに選書の自由を与える

2.1 書店の減少、本を手にする機会が減る

「2019 中国図書販売市場報告書」⁵⁵により、児童書は図書出版市場での比率が高くなった(1999年、8.72%；2019年、25.31%)。

中国では、図書の販売ルートが主にネット書店と実店舗である。2012年、市場シェア28%しか

⁵⁴ 渡辺弥生,「子供の『10歳の壁』とは何か？ 乗り越えるための発達心理学」,光文社新書,2011年,P8

⁵⁵ 京開巻情報技術有限会社研究諮問部、馮小慧部長、生活データ、「2019 中国図書販売市場報告書」,HTTP://WWW.1991T.COM/ARCHIVES/997065.HTML,2020-1-12 確認

ないネット書店は、2016 年はじめて実店舗を上回った。さらに 2019 年、市場シェア 70%となった。販売実績からみると、ネット書店は 715.1 億円で年々増加傾向にあり、実店舗が 307.7 億円で、連続マイナスだった。児童書の割引率について、ネット書店の 40-50%off に対して実店舗は 10-20%off である。長期的な割引率の差の影響で、ネット書店で発注する読者が増えていて、特に顧客価値の高い（注目される作品、題材、IP など）図書出版物や、ベストセラーなどに集中している傾向がみられる。

また、2019 年発表された「第十六回全国国民読書調査結果」⁵⁶により、0～8 歳児童が（保護者と同行する場合）書店をたずねる回数は減少する傾向がみえる。年間平均回数について、2017 年 3.07 回、2018 年 2.87 回と発表した。

鄭淵潔の SNS での「子どもの読書は子どもにまかせるべき。子どもに選書する権利を与えるべきである。」というアピールをめぐって、「子どもがどんな本を読むことは誰か決める」という議論が起こった。

2.2 好きな本と出会うきっかけを作る

読者コメントを調査する際、子どものために鄭淵潔の作品を購入した親がこう説明した。「小さい頃この本が好きで読んでいた。自分の子どもに買ってあげたら、とても気に入ったようで、愛読している。」大人が子どものために本を選ぶことについて、小説家の大庭みな子は以下のようなアドバイスがある。

「読めというふうに置くんじゃなくて、ついでに読むなどということが本当にいいかもわかりません。（中略）大人が読んでおもしろくないものは、子どももおもしろくないと思うからである。子どもが本当に好きなものは、大人がよんでもおもしろい」

30～40 年前の「童話大王」の子ども読者たちは親になり、親子で読書を楽しむことで鄭淵潔による創作児童文学作品が今後も読み継がれていくだろう。

2.3 子どもには本を選ぶ力が備わっている

選書に対して子どもがはっきりさせることができないと思うのは、子どもの弱さのせいだと考える親は少なくないであろう。

「子どもにはできない」と思っているのは、実際には「できない」のではなく、「しないていること」を選択しているのである。

自分の意思で「しないている」のだということをはっきりと自覚してほしい。選択してそうしているのか、それともそうでないのかの二つには、大きな間違いがあるからである。⁵²

改めて「どのようにしたら好きな本を発見できるか」と意識しながら、好きな本と出会うきっかけを作るには大人の支援が不可欠である。選書する段階で「あんまり指導しなくていい、好きなものをよめばいい」というコメントもあるように、良い本も悪い本も、全て子どものまえに見せて子どもの選択に任せるべきである。

今後の課題

1. 「～たい」という意欲の養成

本好きな子もいれば、どうしても嫌いという子もいる。「おもしろい」と本当に興味を持って読み続ければ、子どもが自然に本を求めるようになる。きれいな子にとって、本を読むことが苦痛になる理由などに正面から向きあうべきだと思う。本とふれあうことによる喜びを体験することや読書習慣の養成はゆっくりと本を楽しめる環境を整え、大人からの支援が不可欠だと考えら

⁵⁶ 中国新聞出版研究院,「光明日報」,「第十六次全国国民読書調査結果」,2019-4-21,HTTP://CULTURE.PEOPLE.COM.CN/N1/2019/0421/C1013-31041115.HTML

れる。

文字を知らない幼い子どもにとって、おはなしや読み聞かせは耳からの読書という一つの読書の形態であり、子どもを読書に導くためのもっともよい手段である。例えば図書館でおはなしをする前後その本を紹介することや、読み聞かせで一方的に読んでやる態度をとるのではなく、読み合う中で子どもの心に対する理解を得ながら子どもと一緒に楽しむという姿勢が大切である。それ以上に、「しりたい」「トライしてみたい」という気持ちをもてるようにし、読書の環境をつくることは児童期に「本を好きになる、読んで見たい気持ちを育てる」という第一歩であろう。

2. 良書を判断する能力の育成

子どもの選書、閲読、フィードバック（大人からのサポートや指導を受ける、読書推進活動など読書活動への模索など）というプロセスは良書を見抜く判断力をつける過程とも言える。本を評価するには、いろいろな観点からその価値を判断すべきである。直接本を手にとって評価する基本的な方法や、書評、書籍ランキング、他の読者のコメント（例えば子ども同士のおすすめ）など間接的な評価も補助的な方法として利用できる。

情報過多になった現代では、ちょっと知らないことをスマホで検索できる手軽さは便利に感じる一方、それ以上の行動を起こす知的好奇心を減らしていると感じる。いつの時代にも読み継がれている「良質な本」のみを子どもに与え、良質でないものをすべて排除しようとする無菌環境を整えるというやり方は良い読書環境ではないと考える。公共図書館や読書調査研究グループは、「良い（読書）環境とは無菌室ではない、（子どもに）世の中を見せて判断力をつけさせたい」と述べている。子どもの選書は失敗もあるかもしれないが、そこで得た喜びや意外な発見による楽しさは、行動を起こすことにつながるものと考え。「知る」という感動体験を起こしたり、さらなる一生続けられる趣味としての読書につなげる案内とする課題を探求していくことが望ましい。

添付図表

1. 図表 1 中国作家印税収入ランキングー鄭淵潔順位および印税収入⁵⁷,

年間ランキング	順位	印税収入 (万人民元)	印税収入 (万円)	ベストセラー代表作
2006年第1回	8	780	12589.2	ピピル総動員
2007年第2回	4	570	9199.8	ピピル総動員
2008年第3回	2	1100	17754	ピピル総動員
2009年第4回	1	2000	32280	ピピル総動員
2010年第5回	3	1950	31473	ピピル総動員
2011年第6回	3	1200	19368	ピピル総動員
2012年第7回	1	2600	41964	ピピル総動員
2013年第8回	3	1800	29052	ピピルの身を守る 100の方法
2014年第9回	2	1900	30666	ピピルの身を守る 100の方法
2015年第10回	3	1900	30666	ピピル総動員
2016年第11回	1	3000	48420	ピピル総動員
2017年第12回	3	2100	33894	ピピル総動員
2018年第13回	-	-	-	-

⁵⁷ 公式サイト ZUOJIABANG.CN

2. 図表 2 鄭淵潔作品（一部）

発表時期	ジャンル	作品名	出版社・雑誌名・作品名	
1977年	風刺詩	「姚文元の筆」	山西省文芸工作室	「汾水」
1978年	詩	「送支書」	中央宣伝部	「光明日報」1月22日付
1978年	詩	「彩蝶紛紛」	中国共産党中央委員会	「人民日報」4月9日付
1978年	童話詩	「ヤモリとコウモリ」	河南人民出版社	「向陽花」
1978年	科学幻想 小説	「叔父さんの腕時計」	児童時代雑誌社 (現 中国中福会出版社)	「児童時代」8
1979年	童話	「黒ちゃんは誠実島にいる」	中国少年児童新聞出版総社	「児童文学」9
1982年	童話	「舒克と貝塔」 (「ShukeとBeita」)	中国少年児童新聞出版総社	「児童文学」
1983年	童話	「戦車兵貝塔」	中国少年児童新聞出版総社	「児童文学」
1984年	童話集	「ピピル新伝」	少年児童出版社	
1984年	童話集	「ピピル全伝」	四川少年児童出版社	
1985年	童話集	「奇妙な洋服屋」	寧夏人民出版社	「爆発前の告白」
1985年	童話	「ピピルとルシシ新奇遇記ー パパとママへの童話」	浙江少年児童出版社	
1985年	童話	「鄭淵潔童話三部曲」	北京少年児童出版社	
1985年	漫画	「舒克と貝塔冒険記」 (「ShukeとBeitaの冒険」)	人民美術出版社	
1986年	童話	「電!電!」	童話大王雑誌社	「童話大王」2
1986年	童話集	「ピピルとルシシのおはなし」	童話大王雑誌社	「童話大王」9
1986年	童話	「ピピル遇険記」	中国少年児童新聞出版総社	「児童文学」8
1986年	童話	「舒克と貝塔冒険記」 (「ShukeとBeitaの冒険」)	中国少年児童新聞出版総社	「児童文学」2
1986年	童話	「ヘリコプターを操縦するネズミ ちゃん」	中国少年児童出版社	
1987年	童話	「紅塔楽園」		「童話大王」1
1987年	童話集	「舒克と貝塔冒険記」 (「ShukeとBeitaの冒険」)	中国少年児童出版社	
1987年	童話	「赤いソファーム्यूジック・シ ティ」	湖南少年児童出版社	
1988年	童話集	「缶詰小人」	四川少年児童出版社	「ルシシ全伝」
1989年	現代劇	「ピピルとほら吹き王様」	安徽省話劇団	
1989年	アニメ	「舒克と貝塔」(13話)	上海美術映画製作所	「舒克と貝塔冒険記」
1989年	童話	「飛馬牌自動車」	童話大王雑誌社	「童話大王」1
1989年	童話	「ピピルとルシシ全伝」	四川少年児童出版社	
1990年	童話	「幻影号」	童話大王雑誌社	「童話大王」4
1991年	童話	「五つりんごと地球」 (「五个苹果折腾地球」)	童話大王雑誌社	「童話大王」6
1992年	童話	「活車」	童話大王雑誌社	「童話大王」
1994年	アニメ	「ルービックキューブの世界」 (「魔方大厦」10話)	上海美術映画製作所	「ピピルとルービックキ ューブの世界」 (《皮皮鲁和魔方大厦》)
1994年	童話	「馴兔記」	童話大王雑誌社	「童話大王」
1995年	童話集	「ルシシ全伝」	学苑出版社	
1995年	小説	「十元札」	学苑出版社	「わたしは札である」
1996年	小説	「7801号列車」	童話大王雑誌社	「童話大王」10
1998年	童話	「ピピル日記」	童話大王雑誌社	「童話大王」4
2001年	長編小説	「ピピルとゴールド指」 (「皮皮鲁和金拇指」)	二十一世紀出版社	
2001年	長編小説	「知齒」(「智齒」)	学苑出版社	
2002年	童話集	「ピピル伝」	学苑出版社	
2002年	童話	「うさぎぴよんぴよんちゃん」 (「小兔跑跑跳跳」)	学苑出版社	
2006年	童話	「ピピルと夢中人」	二十一世紀出版社	

2006年	童話集	「ピピル総動員」	二十一世紀出版社	54冊、2006-2008年出版
2008年	音楽現代劇	「赤いソファーミュージック・シ テイ」	中国児童芸術劇団	
2010年	現代劇	「ルービックキューブの世界」 「缶詰小人」	中国児童芸術劇団	
2018年	ウェブisodes	「馴兔記」	iQIYI&ピピル総動員有限公司	「馴兔記」
2019年	3Dアニメ	「舒克と貝塔」 (「Shuke と Beita」) (52話)	ピピル総動員有限公司&テンセ ント・ペンギン・ピクチャーズ (企鵝影視 Tencent Pictures)	「舒克と貝塔」

参考文献

- 1 童話大王雜誌社,2019-4-16,微博 weibo.com
- 2 鄭淵潔,「父の背中を見て育つ」(父亲的含义是榜样),齊魯晚報,2009-7-23
- 3 史竟男,新華網新華社,“童話大王”鄭淵潔:子どもの好奇心を守る,2018-05-31
- 4 鄭淵潔,「機会・成功・感恩」,「中国德育第三卷」,2008年第11期
- 5 鄭淵潔,著作等身の文盲,南国都市報,2005-07-10,第9面
- 6 鄭淵潔,「ソ連19戦闘機のおかげでパイロット舒克が誕生」,環球網,HTTP://NEWS.IFENG.COM/A/20170919/52075267_0.SHTML,2017-9-19
- 7 鄭淵潔,「作家葉永烈への手紙」,1979-2-15
- 8 少年兒童出版社編,「知恵を出すおじさん」(「动脑筋爷爷」),少年兒童出版社,1964年
- 9 「叔父さんの腕時計」(「舅舅的手表」),「兒童時代」雜誌,1978年第8期
- 10 「布谷鳥」(「布谷鸟」)雜誌は1921年創刊、1982年4月より「東方少年」に雑誌名を変えた
- 11 鄭淵潔,2017-9-18,中ロ「シルクロード経済貿易人文交流対話」での講演「お詫びと感謝」,WEIBO.COM
- 12 中国版本図書館編,「1985全国総書目」,中華書局出版,1988年
- 13 紅立編集,央視国際,「現象1980」—童話大王,WWW.CCTV.COM,2007-6-6
- 14 鄭淵潔,「新聞聯播」ニュース番組に報道された「ピピル総動員」の海賊版被害事件,HTTP://BLOG.SINA.COM/CN/S/BLOG_473ABAE6010006VL.HTML,2006-08-12
- 15 “THE WORLD’S TEN LARGEST BOOKS”BY THE UNITED NATIONS IN 2011
- 16 周慧曉婉,新京報,「鄭淵潔IPの改編方針:子ども時代の思い出を絶対に裏切らない」HTTP://WWW.BJNEWS.COM.CN/ENT/2018/06/27/492742.HTML,2018-6-27
- 17 鄭淵潔,「童話大王鄭淵潔:作家の財務管理は著作権の保護」,中華人民共和国国家版權局
- 18 郗建榮,法制網,「重大著作権侵害事案が摘発された」,HTTP://WWW.LEGALDAILY.COM.CN/LEGAL_CASE/CONTENT/2019-08/26/CONTENT_7975654.HTM,2019-8-26
- 19 中華商標協会,「2017-2018年度商標訴訟最優秀事例」,WWW.CTA.ORG.CN,2018-9-4
- 20 雨悦編集,文化中国—中国網,「鄭淵潔:死ぬ前に全財産を寄付する」,CULTURE.CHINA.COM.CN
- 21 王泉根,2018年,「文革時期兒童文学の編年史記憶」,「学术界」第241期,P127
- 22 「1982年全国総書目」,中華書局
- 23 「中国人口調査資料」,国家統計局,兒童人口数量:1964年、3.2億;1982年、4.1億;1990年、3.83億
- 24 北京晨報,「兒童文学」雜誌社徐德霞編集長インタビュー:「兒童文学」雜誌は作家の成長を見守っている HTTP://NEWS.IFENG.COM/GUNDONG/DETAIL_2013_07/22/27742287_0.SHTML#6467378-TSINA-1-45900-C61ED62311C3E83EE6C7315BFE5CDBFE,2013-7-22
- 25 国家統計局,「中国統計年鑑」,2014年
- 26 檀伝宝,「德育原理」,北京師範大学出版社,2006年6月
- 27 鄭淵潔,「“童話大王”鄭淵潔の常識を覆す教育論」,「同齡鳥」雜誌,広西教育出版社,2007年
- 28 鄭淵潔,「黒ちゃんは誠実島にいる」(黒黑在诚实岛),「兒童文学」雜誌,1979年9月号
- 29 高士其,「酵母菌の物語」(酵母菌的故事),「高士其全集2」,航空工業出版社,2005年
- 30 鄭淵潔,「奇妙な洋服屋」(奇异的服装店),「爆発前の告白」,寧夏人民出版社,1985年,P39
- 31 鄭淵潔,「課外閲読」,2012年第8期,P18-19
- 32 洪汎濤,「童話芸術思考」,希望出版社,1988年,P44-55
- 33 韦苇,「兒童文学辞典」,四川少年兒童出版社,1991年,P9
- 34 浦漫汀,「簡論童話の時代性」,「河北民族師範学院学報」,1986年第3期,P11-17
- 35 鄭淵潔,「電!電!」(「闪电!闪电!」),「童話大王」,1986年第2期
- 36 賀宜,「童話漫談」,「学習資料」雜誌,湖北省出版局,1980年第20期
- 37 鄭淵潔,「ピピル日記」,「童話大王」,1998年第4期
- 38 鄭淵潔,「飛馬自動車」,「童話大王」,1989年第1期
- 39 北京交通發展研究センター,「2001北京市交通發展年度報告書」
- 40 鄭淵潔,「1元札」,「ワタシはお札である」(「我是钱 一元钞」),「童話大王」,1995年第10期
- 41 新華社「中央銀行の報告:9割成人はインターネットバンキングの口座を持ち、8割以上が電子マネーを利用」,2019-10-22日,HTTP://WWW.GOV.CN/XINWEN/2019-10/22/CONTENT_5443495.HTM
- 42 佐藤さとる,「ファンタジーの世界」,講談社現代新書,1978年8月
- 43 蔣風,「中国兒童文学發展史」,少年兒童出版社,2007年
- 44 王泉根,「現実主義:百年中国兒童文学發展の主潮」,河南社会科学,2016年6月,24-6
- 45 鄭淵潔,「名人対面」インタビュー,2011年
- 46 鄭淵潔,「ルシンとピピル対話録」,「童話大王」,2002年1月
- 47 鄭淵潔,「あなたはどこから?わたしのお友達よ」(「你从哪里来,我的朋友」),天津人民出版社,2015年
- 48 中国の読書コミュニティサイト,BOOK DOUBAN,HTTPS://BOOK.DOUBAN.COM/SUBJECT/1263273/,2020-1-27確認
- 49 梅根悟,『ルソー「エミール」入門』,明治図書,1971年

- 50 鄭淵潔,「缶詰小人」,「ルンシ全伝」,四川少年兒童出版社,1988年
- 51 無藤隆,高橋恵子,田島信元編,「発達心理学入門」,東京大学出版会,1990.2,P158
- 52 スーザン・フォワード著、玉置悟訳、「毒になる親 一生苦しむ子供」、講談社、2016年9月
- 53 張桔紅,「小学生心理健康の現状や教育対策」,「学週刊 LEARNING WEEKLY」,2019年12月,P175
- 54 渡辺弥生,「子供の『10歳の壁』とは何か? 乗り越えるための発達心理学」,光文社新書,2011年,P8
- 55 京開卷情報技術有限会社研究諮問部、馮小慧部長,生活データ,「2019中国図書販売市場報告書」,[HTTP://WWW.199IT.COM/ARCHIVES/997065.HTML](http://www.199it.com/archives/997065.html),2020-1-12 確認
- 56 中国新聞出版研究院,「光明日報」,「第十六次全国国民読書調査結果」,2019-4-21,[HTTP://CULTURE.PEOPLE.COM.CN/N1/2019/0421/C1013-31041115.HTML](http://culture.people.com.cn/N1/2019/0421/C1013-31041115.html)
- 57 公式サイト ZUOJIABANG.CN

「ピピル伝」訳文

1 赤いソファーのミュージック・シティ

1

ルシシのママはお医者さんです。うちには薬箱があつて、薬やそれに体温計とか聴診器などの医療器具がはいっています。

ママはいつもお金をもらわずに近所のひとたちをみてあげます。昨日の晩、ママはおとなりの王おばあちゃんの診察からもどると、なにげなく聴診器をコートかけにかけっぱなしにしました。

つぎの日の午後、学校がおわって家にかえってきたルシシは、コートかけにひっかけられた聴診器を一目でみつけました。ルシシはランドセルをコートかけにひっかけると、聴診器をとりはずしました。

聴診器を耳にさしこむと、胸にあてるところを手でにぎって、「なにをきこうかな」とかんがえます。

とりあえず自分の心臓の音をきいてみることにしました。ソファーにすわり、聴診器を左の胸にあててみると、自分の心臓の音がきこえてきます。しばらくきいていたら、だんだん飽きてきました。

ルシシは無意識のうちに、聴診器をソファーの背もたれにあてました。

ちょっとビックリしましたが、すぐに顔いっぱいにわらいがひろがってきました。すばらしい音楽がきこえてきたのです。いままできいたこともない素敵な音楽です。いったいどういうことなのだろうと不思議におもうことすらありません。ただもうその音楽にうっとりとして酔いしれてしまいました。

音楽にみちびかれて、ルシシはいつのまにか、おいしげるジャングルのなかをさまよったり、すみわたる谷川のほとりにたたずんだりしていました。そうかとおもえば、遠くにつらなる山々をながめていたり、ふわふわの草のうえに寝ころがっていたりというふうです。

「この音楽には、なにか神秘の力があるみたいだわ」とルシシはおもいました。そういえば学校で勉強してきた疲れがすっかり消えて、頭のなかがスッキリしています。

そのとき、学校がおわったピピルが家にかえってきました。すると妹がソファーにすわり、両方の目をつむって、口もとにほほえみを浮かべているじゃありませんか。そして耳にはママの聴診器をさしこんでいます。

ルシシは、ピピルが部屋にはいつてきたことに、まったく気がつきません。うつくしいメロディーに完全にひたりにかかっています。

「なにしてるの？ ぼくにもきかせてよ！」というときピピルはルシシの耳から聴診器をとりはずし、すばやく自分の耳にさしこみました。

夢のなかにいたルシシは、いきなり目をさまさせられ、なにがおこったのかわかりません。

「ウォ！ 音楽だ！」とピピルはおどろきます。聴診器はイヤホンじゃないのに、いったいどこから音楽がきこえてくるんだろう！

どうして音楽がきこえてくるのかなんていうことを気にしているヒマもなく、ピピルはたちまち夢中になってしまいました。こんなメロディーはきいたこともありません。いまの世界じゅうのどんな有名な作曲家のつくる音楽とくらべても、まったくちがっています。

ルシシはようやく夢からさめてきて、ピピルに聴診器をとられたことに気づくと、すごく腹がたってきました。仕返ししてやろうとおもい、お兄ちゃんの耳から聴診器をもぎとります。

「おい！」とピピルは目をまるくします。

「目には目、歯には歯よ」とルシシは学校でならったばかりのことわざをいってみました。

そういわれてしまっはしょうがないので、ピピルは肩をすぼめます。でも、素敵な音楽をとりあげられてしまっで、つまらなくてたまりません。

そのときピピルの頭のなかに、ふと「その音楽はどこからきこえてくるのかな？」という疑問が浮かんできました。ちょうどおなじタイミングで、ルシシの頭のなかにもおなじ疑問が浮かんできました。

ルシシは聴診器を本棚にあててみました。ピピルはそれをじっとみつめています。

ルシシは首をふります。

ピピルは勉強机をゆびさします。ルシシは聴診器を勉強机にあてると、また首をふります。

ピピルは壁をゆびさします。壁からもやっぱり音楽はきこえてきません。

ピピルとルシシは確信しました。秘密はこのソファーにある。

このふたりがけの赤いソファーがピピルのうちにやってきてから、ちょうど1年くらいになるけど、まさか音楽を演奏するなんて、だれひとりとして気がつきませんでした。

ピピルは片膝をソファーにのっけると、耳をその背もたれにくっつけました。かすかに音楽がきこえてきます。もしルシシが偶然にママの聴診器をあてなければ、きっとこの秘密にはだれも気がつかなかったことでしょう。

「お手柄じゃないか！ ごほうびをあげるよ」とピピルはルシシにいいました。ルシシは口をへの字にまげたままです。だってピピルがごほうびをくれるといっても、いつも口ばっかりで、1度もくれたことなんてないんですもの。ルシシはお兄ちゃんのごほうびはアテにならないとわかっています。

「いったいだれがソファーのなかで演奏してるのかな？」とピピルは赤いソファーのまわりをグルリとまわってみましたが、ふつうのソファーとのちがいはみつけられません。ピピルは妹の手から聴診器をとりあげると、となりの部屋にゆき、ほかのソファーからも音楽がきこえるかどうかしらべてみました。ほかのソファーからは音楽はきこえてきま

せん。この赤いソファーだけのようです。

ピピルは地べたに腹ばいになって、赤いソファーのしたのほうをしらべます。赤いソファーの底はすっかり閉じられていて、なんにもみえません。

「おまえは折りたたみナイフをさがしてきて。ぼくは懐中電灯をもってくる。穴をあけてしらべてみようよ」とピピルはいいます。

「赤いソファーに穴をあけちゃうの？」とルシシは心配そうです。

「ソファーのなかがどうなってるか、おまえは知りたくないのかい？」

「そりゃあ知りたいけど……でも……」とルシシはためらっています。

「でも、なんだよ？ さっさとナイフをもってこいよ。もうすぐパパとママがかえってきちゃう。ソファーのうしろのほうに穴をあければ、きっとみつからないさ」といいながらピピルは懐中電灯をとりにゆきます。

ルシシは赤いソファーのなかがどうなっているのか、すごく知りたくなってきたので、お兄ちゃんの仲間になることにしました。

すべての準備がととのいました。

ピピルは折りたたみナイフをひらくと、その刃をソファーあてがいます。

「お兄ちゃん、ちょっと待って！」とルシシは大声でさげびました。

「なんだよ？」ピピルはルシシにいきなり大声をだされるのがいちばん苦手なのです。

「だれか……だれかが……あたしたちに話しかけてるわ……」とルシシはすこしおびえながら、それでも興奮をおさえきれずにいいます。

「だれか？ だれかってだれさ？」とピピル。

「きいてみて」とルシシは聴診器をピピルにわたします。

すると聴診器のなかから「きみたち、ミュージック・シティを侵略しないでくれたまえ」という声がきこえてきました。

「侵略？」とビックリしましたが、ピピルはすぐにちょっと偉くなったような気分になりました。これまでそんな言葉かけられたことがなかったからです。よその国を侵略できるのは、すごく強いもののはずです。じゃあ、ぼくもそこそこ強いってことかなとピピルはおもいました。

「あなたはだれ？」とピピルは赤いソファーに口をちかづけてたずねます。

「わたくしはミュージック・シティの総指揮者です」

「ミュージック・シティ？ 総指揮者？」ピピルはおもしろくなってきました。

「そうです。われわれのミュージック・シティにはたくさん音楽家がいて、それに音楽隊もあるのです」

「その音楽はあなたたちが演奏しているの？」とピピルはたずねます。

「そのとおり」

「あなたたちの音楽はすばらしいね！ ほんとうだよ。ところで、あなたたちは、いったいだれ？ 人間？ 動物？ なんてしゃべれるの？ なにを食べてるの？ あなたたちの楽器はなにで作られてるの？」とピピルはひと息にたくさん質問をたてつづけにぶつけました。だって1秒間のうちに全部の答えを知りたくてガマンできなくなってしまったからです。

「ごめんなさい。それは教えられません。もしミュージック・シティのことがそこの世界のものに知られてしまうと、われわれに災難がふりかかってくるからです」

「災難？ どうして？」ピピルにはさっぱりわけがわかりません。

「われわれの音楽がうつくしすぎるからです」

「うつくしすぎると、なんで災難がふりかかると？」ピピルはやっぱりわかりません。

「その理由はいつかわかる時がくるでしょう。わたくしはミュージック・シティの全市民にたのまれて、あなたとあなたの妹にみつつの要求をあくまであずかってきました。よろしいですか？」

「おまえがぼくの妹だって、ちゃんと知ってるみたいだね」とピピルはルシシにむかって舌をペロリとだすと、「いいよ、どうぞ！」

「ひとつ。どんな場所からも、どんな方法でも、ミュージック・シティをのぞいてはならない。ふたつ。このことをだれにもしゃべってはならない。みつつ。われわれの音楽をだれにもきかせてはならない」

「もしその要求をちゃんとまもったら？」とピピルはたずねます。ただで返事をするわけにはゆきません。だって、それらの要求をまもるのは、そんなに簡単じゃないのですから。

「あなたとあなたの妹に、毎日うつくしい音楽をきかせてあげます。これはしあわせなことですよ」

このことについてピピルとルシシは、これっぽっちも疑いはもちませんでした。もし毎日こんなうつくしい音楽をきけたら、きっと100歳まで長生きすることもできちゃうでしょう。

「どうする？ いい？」ピピルはルシシにたずねます。

「パパとママにもいっちゃいけないの？」とルシシがたずねます。

「もちろん」とミュージック・シティの総指揮者。

「わかった。いいよ」とピピルはきめました。ルシシもウンといいました。ルシシがなぜウンといったかという、ミュージック・シティに災難がふりかかるといってイヤだったからです。

「では誓いをたてましょう」とミュージック・シティの総指揮者はいいます。

「ぼくたちは誓います……」とピピルとルシシはミュージック・シティの秘密をまもることを誓います。

ちょうど赤いソファーのミュージック・シティにむかって誓いおわったとき、玄関のほうで音がしました。

「パパがかえってきた！」ピピルはあわてて聴診器をコートかけにひっかけます。ルシシもいそいで勉強机にむかい

ます。

パパは部屋にはいってくると、なんとなく雰囲気がいつもとちがうような気がしました。ルシシが宿題をやっているのを見て、「おまえは宿題がおわったのかい？」とピピルにいいます。

「いまやるところ！」とピピルはランドセルをたたきます。かれは宿題が大キライなのです。

パパはうなづくと、もうなにもいいませんでした。

ピピルとルシシはアッというまに宿題をすませてしまいましたが、とっても不思議でなりません。今日はどういうわけか頭がものすごくバッチリとさえているのです。

子どもたちが宿題をやりおえたのを見て、パパはステレオをつけました。かれは音楽が大好きで、1日たりとも音楽なしでは生きていられないくらいなのです。

スピーカーから音楽がながれてきました。

ピピルとルシシはふたりとも眉をひそめました。なんてつまらない音楽でしょう！ まったく不思議だけど、こんなにつまらない音楽だっていうことに、いままでどうして気がつかなかったのかしら？ なんでもすごい賞をもらった名曲らしいんだけど、ミュージック・シティの曲にくらべたら、まるで月とスッポンです。

ピピルとルシシは無意識のうちに耳をふさいでしまいます。

「どうした、ききたくないのか？」パパは子どもたちがどうして耳をふさぐのかわかりません。

「ききたいよ」といってピピルは、パパに疑われないように、いそいで耳から手をはなします。でも、またすぐに耳をふさいでしまいました。

ルシシはというと、ずっと耳を手でふさいだままです。

「これは〇〇さんの曲だよ！」とパパはいまいちばん有名な、だれもが知っている大作曲家の名前をいいます。「それなのに、どうしたっていうんだい？」

パパはごきげんななめです。ピピルとルシシが大作曲家をちゃんと尊敬しないっていうだけでなく、自分のことも、それに芸術のことも、なんだか尊敬していないような感じがしたからです。

ピピルはこころからおもいました。パパの耳を赤いソファークにつけて、その音楽をきかせてあげたいなあ。そうしたらパパも、どういうものを音楽とよんでいいのかっていうことがわかるのに。でも、ピピルは誓ったのですから、それはできません。ああ、もう！

「おいで、この曲のすばらしさを教えてやろう」パパは子どもたちの音楽的なセンスをやしなわねばならないとおもっています。

「ルシシに教えてあげて、ぼくは用事があるから」といってピピルは部屋からにげだします。ここぞというとき妹に苦しみを押しつけるなんて、まったくイジワルです。

「あたしはママをむかえにゆく」とルシシも負けてはいません。お兄ちゃんのあとを追ってにげだします。

「おやおや」パパはため息をつきます。いつもの子どもたちだったら、こんなふうには音楽をイヤがったりしないのに！ とりわけルシシは音楽が大好きなはずなのに、いったい今日はどうしちゃったの？

夕食のあとは家族そろってテレビをみる時間です。

ふだんはパパとママが赤いソファークにすわります。でも今日は、ピピルとルシシはふたりに赤いソファークにすわってほしくありません。とくにパパは体重がおもいから、ミュージック・シティがつぶれちゃうんじゃないかと心配です。

ピピルとルシシはさきまわりして、ふたりならんで赤いソファークにすわりました。パパとママはソファークの両脇にある木の椅子にすわりました。ピピルとルシシはなんにも気がつかないふりをします。

パパとママは子どもたちが赤いソファークをゆずってくれるのを待っています。ところが子どもたちときたら、まるで礼儀をわすれたみたいで、ひたすらテレビをみえています。

いつのまにこんな礼儀を知らない子どもになったのだろうか？ パパはガマンできずにたちあがりしました。

「パパにソファークをゆずりなさい！」とママはルシシにいいました。

ルシシはしょうがなくソファークからおります。

パパがすわろうとすると、「そっとすわってね」とルシシはあわててお願いします。

「え？ そっと？ どうして？」パパはいよいよ奇妙におもいます。

ピピルは妹をにらみつけました。ルシシはよけいなことをいったと気づき、すこし顔を赤くします。

パパはお尻をソファークにむけると、そっとどころか、わざとドシンとすわりました。

ピピルとルシシはあやうく跳びあがりそうになりました。

テレビの番組は音楽のコンサートでした。まったく魅力のない音楽を、パパとママはすごく満足そうにきいています。ピピルとルシシは笑いをこらえるのに必死でした。

つぎの日の放課後、ピピルはうちまで一目散に走ってかえってきました。ピピルは赤いソファークのミュージック・シティのすばらしい音楽をルシシよりもさきにききたかったのです。ルシシもそれはいっしょです。ふたりはほとんど同時に家にはいました。

ふたりは息をぴったりあわせたようにママの薬箱にむかって突進しました。でも、ルシシはどうしたってピピルには勝てません。当然のように、聴診器はピピルにとられてしまいました。

「あたしにさきにきかせてよ」ルシシは食ってかかります。兄妹のケンカがはじまりました。

「ケンカしないで。音楽のボリュームをあげてあげますから」と赤いソファークのなかからミュージック・シティの総指揮者の声がしました。

ピピルとルシシは目をパチクリとひらいて顔を見あわせました。赤いソファークのミュージック・シティはこんなに大きな音をだすこともできるんですね。

「昨日はわれわれのことを心配してくれてありがとう。ふたりが誓いをまもってくれてうれしかったです」と総指揮

者がいました。

「どういたしまして。気にしないで」とピピルは赤いソファーにちかづいていました。

「じゃあ、ちゃんと戸締まりをしてください。1曲、演奏いたしましょう」

「やったあ。はやくドアをしめて」ピピルはなんでも妹に命令するクセがあります。

ルシシはドアをしめると、ピピルといっしょにソファーにすわりました。

音楽がしずかにながれてきました。一陣の風となってピピルとルシシをつつみこみ、ふたりを地面から浮きあがらせ、天空へと舞いあがらせます……ふたりはなにもかも忘れはて、人間たちのいる世間からひきはなされ、いまだかつてみたこともない世界につれてゆかれました。うつくしい花たちが咲きほこり、木々の枝では小鳥たちがさえずっています。川のなかではキレイな魚の群れがおよぎまわり、そびえたつ青々とした松が山々の峰にいろどりを添えています……ピピルとルシシは、こころが澄みわたってゆき、「ああ、生きているって、すばらしいなあ」と感じられるのでした。

音楽がおわりました。ピピルとルシシは音楽にすっかり魅せられてしまい、こころが現実のほうにもどってこられません。

「すばらしかった！」ピピルはようやく口から声をしぼりだします。

「みなさん、ありがとう！」ルシシもよろこびをおさえきれません。

「もしパパがこの音楽をきこうものなら、あのつまらない音楽はもう2度ときけなくなっちゃうよ」とピピルはおもい、あの誓いさえなければ、パパにきかせてあげたいなあどこころからおもうのでした。

「そろそろ宿題をやらなくっちゃ」とルシシはお兄ちゃんをうながします。宿題のことをいわれ、ピピルはたちまち元気がなくなります。ため息をつきながら、ランドセルから教科書をひっぱりだしました。

「その教科書をちょっとみせていただけますか？」とミュージック・シティの総指揮者がいました。

「いいけど、でも、みてどうするの？」とピピルはたずねます。

「ちょっとみるだけです」どうやら総指揮者はピピルがあんまり勉強が好きでないということに気づいたらしく、ちょっと手伝ってあげようとおもったようです。

「どうやってみせればいいのか？」とピピルはミュージック・シティの総指揮者にたずねました。赤いソファーはしっかりと閉じられているし、それにどんな場所からも、どんな方法でも、ミュージック・シティをのぞいてはならないという誓いもあります。

「赤いソファーの底のほうの右側に、ちいさな裂け目があります。そこから教科書を押しこんでみてください」

ピピルはいわれたとおりにしました。

ソファーのなかから本をバラバラとめくる音がきこえてきます。ピピルとルシシは口をポカンとあけています。ミュージック・シティの音楽家たちは文字がよめるのかしら？

「いやはや、こんなつまらない教科書なんていうもの、子どもたちはよみたくないにきまつてるよ！」とソファーからは怒ったような声がきこえてきます。「この教科書は、明日の午後におかえしするのでもかまいませんか？」

「いいとも。来年でもいいくらいさ」ピピルときたら、教科書のことなんて、どうでもいいみたいです。

2

つぎの日の朝、ピピルは国語の教科書をもたずに登校しました。

国語の時間になりました。

「みなさん、教科書の6ページをひらいてください」と担任の徐先生。

みんなは国語の教科書をひらきます。ピピルは教科書をもっていないのに、ちっとも困ったふうではありません。ランドセルから数学の教科書をひっぱりだし、ごまかそうとしました。

先生は「さあ、いっしょに声にだしてよみましょう」といって生徒たちに朗読させながら、ゆっくりと教室のなかを歩きまわります。先生がピピルのところにきました。ピピルはあわてて数学の教科書をからだで隠そうとしました。

先生はピピルの手から教科書をゆっくりとりあげ、その表紙を見たたん、眉をひそめました。

ちょうどそのとき、みんなの朗読がおわりました。

「国語の教科書はどうしたの？」と先生はピピルにたずねます。

「もってきませんでした」とピピル。

「どうしてもってこないの？」と先生はつづけてたずねます。

「ひとに貸してあげたからです」とピピルは落ち着いています。

「ひとに貸してあげたって？！」先生はすごく怒りました。「どうして教科書をひとに貸したりしたの？ すぐにかえしてもらいなさい」

「今日の放課後、かえしてくれるっていう約束です」とピピルはすわったまま身うごきひとつしませんが。

先生はもっとなにかいいたそうでしたが、なにもいいませんでした。数学の教科書をピピルにかえし、「明日は忘れずにもってきなさい」とだけいいました。

ピピルはうなづきました。

学校がおわり、うちにかえると、ピピルは赤いソファーに顔をくっつけて「ぼくの国語の教科書はもうよみおわった？」

「ええ、よみおわりました。いまおかえしします」というミュージック・シティの総指揮者の声がありました。

ピピルはソファーの底のほうの裂け目から国語の教科書をひきぬきました。

「ソファーにすわって、教科書をひらいてください。あなたのために音楽を演奏しますから、よみながらきいてくだ

さい。いいですか？」と総指揮者はピピルにいいます。

ピピルは「いいよ」といいながら教科書をひらきます。

「じゃあ、1ページ目からやりましょう」と総指揮者はいいます。

「うん」とピピルはページをめくります。

音楽がながれてきました。ピピルはその音楽を伴奏にして教科書をよみはじめます。

ピピルはすぐに気づきました。音楽のメロディーと教科書の内容がじつにピッタリと合っているじゃありませんか。教科書の文章が高い山をえがいているとき、音楽もまた高い山をあらわしていて、まるで山道をのぼりながら景色をながめているような感じがします。教科書の文章が広い海をえがいていれば、音楽は波のしぶきをあらわし、船のデッキにでて大海原の新鮮な空気をすっているような気分になります……

音楽にみちびかれるまま、ピピルは国語の教科書をアツというまよみおえてしまいました。音楽がいきなりストップしました。ピピルはそのまま余韻にひたっています。

こんなに夢になって本をよんだのは生まれてはじめてです。なんと楽しかったことでしょう！　まるで映画をみていたみたいで。

そのときピピルは気づきました。自分はもう教科書のすべての内容をすっかり頭のなかに入れていて、しかも隅から隅までハッキリとおぼえているではありませんか。

そのときルシシがかえってきました。

「ルシシ、ちょっとぼくの教科書をもってきてみて。すっかり諳誦してみせるから」

ピピルはちゃんとおぼえられているかどうか、ためしてみたくてしょうがありません。

お兄ちゃんが自分から教科書を諳誦するといったりしたので、ルシシはなにがおこったのかとビックリ。ルシシは手わたされた教科書をうけとりました。

ピピルは教科書を諳誦しはじめます。

はじめのうちは冗談だろうとおもっていましたが、やがてルシシは目を教科書からはなし、お兄ちゃんの顔をまじまじとみつめます。ルシシの目はまんまるくひらかれています。ピピルはすでに教科書の3分の1をよみおえていました。しかも1字もまちがえずに！

「お兄ちゃんったら……」ルシシはあんまりおどろきすぎて、それ以上なんにも言葉がでてきません。

ルシシの表情をみて、ピピルは自分が奇跡をおこしたことを知り、ピョンピョンと跳びはねてよろこびました。

「いったいどうやっておぼえたの？」ルシシはどんな奥の手があるのか、はやく知りたくてたまりません。

「1回よんだだけで、おぼえちゃったのさ」ピピルは鼻高々です。

「ウソばっかり！　お兄ちゃんなんか、10回よんでもおぼえられっこないことは、みんな知ってるわ」とルシシは口をとがらせます。

ピピルはどうとうガマンできず、なにがあつたかを妹に教えました。でもルシシには信じられません。

「信じられなきゃ、ためしてごらん」ピピルはルシシを赤いソファーにすわらせます。

ミュージック・シティは兄妹のたのみにこたえて、さっきの音楽をふたび演奏してくれることになりました。

ルシシはその音楽を伴奏にして国語の教科書をよみはじめます。するとふたび奇跡がおこり、ルシシもまた教科書のすべての内容をおぼえてしまいました。ルシシはおどろいて息もできないくらいです。いつもだったら教科書をおぼえるのはすごく大変なのに、今日はまったく楽ちんで、あっさり丸暗記できちゃった！

いったいどういうことなのか、ピピルにもわかりません。そこでミュージック・シティの総指揮者にたずねてみました。

「われわれは教科書の内容にもとづいて音楽をつくったのです。その音楽を伴奏にしてよんでいると、まるで教科書の世界にはいりこんでいるような感覚になって、いっぺんに内容がおぼえられるのです」と総指揮者はふたりに説明しました。

「すごいや！　教科書の音楽をつくるなんて！」とあってピピルはふとももをパンとたたきました。

「あ、おもいだしたわ。なにかの本に書いてあつたんだけど、これってバックグラウンド・ミュージックっていうのよ」とルシシ。

「数学の音楽もつくれちゃったりする？」どうやらピピルはまだ満足していないようです。

「やってみましょう」と総指揮者はすぐにひきうけてくれました。

ピピルときたら、遠慮なく数学の教科書を赤いソファーの裂け目に押しこみました。

「クラスみんなにミュージック・シティの音楽をきかせてあげられたら、どんなによいかしら」とルシシはおもいました。しかし誓いはまもらなきゃなりません。

つぎの日、ピピルはわざと国語の教科書をもたずに学校にゆきました。

国語の授業がはじまると、先生は「ピピル、教科書はもってきましたか？」とたずねます。

ピピルはたちあがると、「いいえ」と堂々とこたえます。

「どういうこと？」先生はもう怒りだす寸前です。

「教科書なんて、いらなからです」とピピルは自信満々。

「なんですって！」先生はもう言葉もでません。

「教科書はここにはいています」とピピルは自分の頭をゆびさします。

「ほかの生徒がいうならまだ信じられるけど、きみがいうのはバカげてるね」と先生はピピルのことを鼻でわらいました。

「じゃあ、ためしてください」とピピルは宣戦布告。

「そうしましょう」と先生は教科書をひらきます。

「どこからよみましょうか？」とピピルは涼しい顔。

「第2章」と先生。

クラスの全員がいっせいに第2章をひらきます。クラスのだれひとりとしてピピルが教科書をおぼえているなんて信じていません。ところがピピルは、まさに立て板に水といった感じで、スラスラと、しかも生き生きと、誦読しはじめました。

教師はシーンとしずまりかえています。ピピルの誦読する声だけが、まるで泉がわきでてくるように、よどみなく、とめどなく、口からながれでてきます。第3章、第4章、第5章、あれよあれよというまに全部を誦読してしまいました。

ピピルがひととおり誦読しおえたあと、5分間くらい、教室ではだれひとり一言もしゃべりませんでした。先生は口をアングリとあけたまま、ピピルの顔を見つめています。

「完璧じゃないかもしれないけど、どうか採点してみてください」とピピルは笑顔で先生にいいました。

「ピピルって、こんなにすごかったっけ？」とクラスみんなはザワザワしはじめました。

「ピピルくん、どういう方法でおぼえたのですか？」と先生はいきなり態度をかえます。先生はちゃんと誦読してくる子どもが大好きなのです。ピピルはもちろん教科書をおぼえるなんてことは大キライだし、そもそも教科書をおぼえるなんていうことそのものがどうでもよいとおもっています。でも、今日ばかりは教科書を誦読することで面目をほどこしたので、すごくニコニコ顔です。

「べつに方法なんてありません。教科書をよみながら、ただ音楽を……」とピピルはいいかけて、あわてて口をつぐみました。

「音楽？」と先生はつつこんできます。

「いえ、音楽じゃなくて」とピピルはあせります。

「なに隠してるのさ」「教えろよ、友だちだろ」とクラスメートはさわぎだしました。なんだかすごい勉強の奥の手を見つけたらしいのに、みんなに教えようとしないうちで、ピピルはズルい、とクラスじゅうががやがやしはじめます。

ピピルの顔は真っ赤です。でも、そのまま最後までガマンしました。だって赤いソファのミュージック・シティの秘密をバラすことはできませんから。

家にかえてみると、赤いソファのミュージック・シティの音楽家たちは、すでにピピルの数学の教科書のための音楽をつくりおわっていました。どれくらい効果があるのか実験してみよう、とかれらはピピルにいいます。

ピピルは数学がいちばん苦手です。テストでは70点以上をとったことがありません。かれはソファにすわって、数学の教科書をよみながら音楽をききました。

またもや奇跡がおきました。教科書のなかの数字がすべて音符に変身し、規則ただしく隊列をくんで、ピピルを数学の王国へとつれていってくれるかのようです。数学のむつかしい規則やたくさん概念が、すごくハッキリとピピルの頭にはいつてきます。

数学の教科書をアッというまによみおわってしまいました。

そばにたっていたルシシは、数学の問題を1問、ピピルにわたします。

ピピルはすぐさま解いてしまいます。

ルシシが答案をチェックすると、ちゃんと正解です。

ピピルはなんにもいわず、ランドセルのなかの教科書を1冊のこらずひっぱりだして、赤いソファのなかに押しこみました。

赤いソファのミュージック・シティの音楽家たちは、よろこんでピピルをたすけてあげましょうとあって、ピピルのもっているすべての教科書に音楽をつけてくれました。

それからというもの、ピピルのテストの成績はぐんぐんとあがりつづけます。もともと勉強ができるルシシの成績もさらにあがります。

パパとママは太陽が西からのぼったみたいだとビックリ仰天。

先生はピピルの成績をみて、ボカンとするやら、わらってしまうやら。

そうこうするうちに期末試験が近づいてきます。生徒たちは必死に準備にとりかかります。ところがピピルときたら、いつもどおりサッカーをしたり、映画をみたり、ゲームをしたり、遊びほうけているばかりで……

ある日の午後、ピピルが校門をでると、クラスメートの王福が追いかけてきます。

「ピピル、ぼ、ぼ、ぼく……ちょ、ちょっとたのみがあるんだけど……」と王福はドモリながらいいます。

「なに？ ぼくにできることなら、やってあげるよ」とピピルは胸をたたきます。

王福の成績はクラスでいちばんビリ。いってみればピピルの仲間です。

「ほんと？」王福は目をかがやかせます。「それでこそ友だちってもんだ！」

「いってごらんよ」とピピルはほほえみます。

「ぼくのパパがさ、もし今度の期末試験で不合格だったら、学校をやめさせるっていうんだ。知ってるだろうけど、ぼくはもう2回も留年してるからさ」と王福はしょげかえています。

「ぼくになにが手伝えるの？」勉強のことだとわかったら、王福がいったいなにをたのみたのか、ピピルにはさっぱり見当もつかなくなりました。

「ピピル、おまえって勉強できなかったのにさ、いきなりできるようになったじゃんか。いままでとおなじように遊んでいて、ちっともガンバっていないのに、きつとなにか奥の手をみつたんだろ？ なあ、ピピル、その奥の手を教えてくださいよ！ いいだろ？」と王福はたのみこんできます。

「ぼく……ぼく……奥の手なんてないよ……」まさか王福が赤いソファのミュージック・シティのことをいつてく

るとはおもわなかったので、ピピルはおどろいてしまい、あとずさりしました。

「ピピル、友だちだとおもって、なんとかたすけてくれよ！ ぼくは退学したくないんだ。ギリギリ 60 点とれるように手伝ってくれるだけでいい。それ以上は 1 点もいらないからさ」王福はそういいながら目の涙をぬぐっています。

ピピルはこころがふるえました。だって王福が泣くところなんて、いままで 1 度だってみたことがなかったから。王福がお父さんに皮のベルトでひっぱたかれるところをピピルはこの目でみたことがあります。そのときにだって王福は一滴の涙もこぼしていなかったのに。

まったくだ。ぼくは奥の手をもっている。それなのに友だちが退学させられそうになっているとき、だまっただま見捨てるなんて、それでも男っていえるのか？

ピピルは歯をくいしばり、足をひとつふみならずと、「王福！ ぼくにまかせて。きみを退学させないって約束するよ！ 明日の午後、ここで待ってて、奥の手を教えるから。ただ、だれにも秘密をバラさないでくれよ」

「命にかけても秘密はまもるよ」と王福はかたく誓います。

ピピルがうちにかえてみると、ちょうどだれもいません。

テープ・レコーダーを赤いソファのうえにおき、こっそり録音できるように準備しました。そしてミュージック・シティの音楽家に、もう 1 度、国語と数学の教科書のバックグラウンド・ミュージックを演奏してくれるようにたのみました。ミュージック・シティの音楽家はその要求をひきうけてくれました。

ピピルがテープ・レコーダーの赤いスイッチをおすと、テープがまわりはじめ、うつくしい音楽をひとつのこらず録音してゆきます。

赤いソファのミュージック・シティのひとたちは、そのことにまったく気づいていません。そもそも世のなかにテープ・レコーダーなんていう怪しいものがあることすら知らなかったのです。

ピピルはなにごともなく録音をおえると、テープの片面に国語、もう片面に数学と書きつけました。

これで王福が退学しなくてすむとおもうと、ピピルはこころがスッキリしました。このテープがそとにできることによって、どんな大騒ぎになってしまうのか、このときピピルはまったく予想もしていなかったのです。

つぎの日の午後、ピピルは王福にテープをわたしました。

「このテープ、なに？」王福には意味がわかりません。

「教科書をよみながら、音楽をきいてごらん」とピピル。

「はあ？ そんなことやってる場合じゃないだろ。からかわないでよ」と王福は不満顔です。

「からかう？ これはバックグラウンド・ミュージックって言って、教科書をよむのをたすけてくれるんだ。なんにも知らないくせに」そういうとピピルはテープをとりもどして「もうあげない」

「ごめん、ごめん」と王福は半信半疑でテープをうけとります。

「明日、かえしてくれよ。それにほかのひとには絶対にきかせちゃダメだからね！」とピピルはしつこく念をおしました。

「わかった！」王福はテープをランドセルにしまします。

その晩、パパはテープが 1 本なくなっていることに気づきました。

「ルシシ、テープをみなかったか？」とパパがきくと、ルシシは首をふります。

「ピピル、おまえは？」パパがたずねると、「えっと……あの……」とピピルはしょうがなくウソをつきます。そのようすをみて、パパはちょっと疑っているようです。

「あのテープにはパパの大好きな音楽がはいってるのよ。どこにやったの？」とママが口をはさみます。

しまった！ ピピルはあわてました。もとの音楽はみんな消えてしまっています。

ルシシはなくなったテープがなくなったのは、どうやらお兄ちゃんのしわざらしいと気づきました。でも、テープをいったいなにに使ったのかしら？

もうじき期末テストです。パパは子どもたちの気持を乱したくなかったので、「みつかったら、もとにもどしておきなさい」といって、ゆるしてくれました。ピピルは生まれてはじめて期末テストというものに感謝しました。

つぎの日、王福はテープをピピルにかえます。

「すごいよ！」と王福はうれしそうに顔がかがやいています。

「だろ？」とピピルも得意顔です。

「まるで頭に焼きつけるみたいだったよ。本をよむというより、映画をみているみたい。たぶんもう一生忘れないよ」といって王福は頭をたたきました。

「ただ本をむやみに丸暗記するのって、ぼくは大っキライだ。将来なんの役にもたちっこないしさ。でも、さしあたりテストってやつのためには、暗記というやり方もわるくないよね」というとピピルはテープにキスをし、ランドセルにしましました。

午後、家にかえると、ピピルはテープをこっそりパパの棚にもどしました。ただピピルは、そのテープの中身が赤いソファのミュージック・シティの音楽になっていることを、すっかり忘れていたのです。

仕事からかえてきたパパは、部屋にはいると、すぐにテープがもどっていることに気づきました。ピピルのほうをチラッとみると、なんにもいわず、テープをとってテープ・レコーダーにいれ、再生のスイッチをおしました。

音楽がながれてきたとたん、ピピルは目をまるくしました。しまった！ 赤いソファのミュージック・シティの音楽じゃないか。ルシシもビクビクしています。

パパはというと、お気に入りの音楽が消されてしまったのでカッとなったのですが、これまで耳にしたこともない、すばらしくうつくしい音楽にたちまちひきこまれ、そのまま夢見心地になってしまい、現実の世界のことなどなにもかも忘れてしまいました。

台所にいるママも、料理の手をとめて、うっとり音楽にひたりきっています。

赤いソファのミュージック・シティの音楽家たちは、なにがおこったのかわかりません。あれれ、そこの世界にもこんな音楽があるのかしら？ われわれの音楽とそっくりじゃないですか。

「この音楽はどうしたの？」と音楽をききおえたパパはピピルにたずねます。昨日、テープをもちだしたのはピピルのしわざだと、どうやらわかってしまったようです。

「知らない」とピピルはよけいなことをいわないように気をつけます。

「これこそがホンモノの音楽というものだ。すばらしい！ こういう音楽こそ、週末の音楽会で演奏されるべきだ」とパパはしきりにホメちぎります。

ピピルはすっかり途方に暮れてしまいました。

3

ピピルのパパときたら、ヘッド・ホンをかけたまま、テープをくりかえし再生し、一睡もせず、一晩じゅうずっとききつづけていました。

ピピルもハラハラしてすこしも眠れませんでした。

翌朝、ピピルはランドセルを背負って学校にでかけたふりをして、家のまわりをグルグルとまわります。パパとママが仕事にでかけたのをみてとると、くると身をひるがえして、家のなかに駆けこみます。

ホッと一息つき、赤いソファにすわりこみました。

「ピピルくん、昨日の夜の音楽ですけど、どういうことですか？」と赤いソファのミュージック・シティの総指揮者がたずねます。

「あれは……ええっと……」ピピルは答えられません。だって誓いをやぶってしまったのですもの。

「そこの世界にもあんなにうつくしい音楽があるのですか？」と総指揮者はさらにたずねます。

こうなってしまうてもミュージック・シティのひとたちにほんとうのことをいわないようなら、もう友だちとはいえないとおもって、ピピルはどもりながらいいました。「ほ、ほ、ほんとうに……ご、ごめんなさい。どうかゆるしてください。ぼ、ぼくのクラスメートの、いや、友だちの……」

ピピルはということがおこったのかという事情を、総指揮者にくわしくしゃべりました。

「それでよいのです」

この返事をきいて、ピピルのところはパッと明るくなりました。

「でも、ぼくは自分の誓いをやぶってしまった」と、総指揮者がゆるしてくれたことをうれしくおもいながらも、ピピルはつぶやきます。

「きみの友だちのたすけになれて、われわれもうれしいのですよ」と総指揮者。

「ありがとう」ピピルは赤いソファのミュージック・シティの音楽家たちのやさしさに感激しました。

「テープ・レコーダーねえ。そんなものがこの世にあったとは」とミュージック・シティの音楽家たちはにぎやかに議論をはじめます。ピピルにテープ・レコーダーのことを説明してもらい、ミュージック・シティのひとびとは知識をどんどんひろげてゆきます。

「ヤバイ！ 午前中に期末試験があるんだって！」そういうとピピルは学校にむかって駆けだしました。

ピピルが汗びっしょりで教室にはいったとき、国語の試験はもう半分の時間がすぎていました。

先生はものすごく怒っています。期末試験のときに遅刻するなんて！ ピピルは先生が怒っているのも無視して、答案用紙をもらって席にすわりました。

ピピルにとって試験なんてどうってことありません。だって教科書をすっかり暗記しているのですから。しよせん学校の試験なんてものは、ただ機械的に丸暗記さえしていれば大丈夫なものにすぎないのですもの。

ピピルは快調にすいすいと書いてゆきます。そばにたってみていた先生はもうビックリです。

いちばん早く答案をだしたのは王福です。つぎはピピルでした。

先生はかれらの答案にざっと目をとおして、ほとんど息がとまりそうになりました。いつもクラスの足をひっぱる落ちこぼれのふたりなのに、すばらしい点数じゃありませんか！

教室のそとでは、王福はどうやって感謝の気持ちをあらわしたらよいのかわからず、ピピルを背負って校庭をぐるぐると3周しました。ピピルもうれしそうにわらっています。

クラスの全員が答案をだしおわったとき、王福がはしゃぎながら教室にはしってきました。そして自分でも興奮をおさえられないらしく、「わあい、進級できたぞ！ 進級できたぞ！」と大声でさけんでいます。

先生もクラスのみんなも、王福がこんなにも興奮しているのを見て、これまで「留年大王」というアダ名をつけてかかってきたことを後悔しました。

その晩、家にかえってきたパパが最初にやろうとしたのは、音楽をきくことでした。例のテープをとりだし、プレーヤーにいれて再生のスイッチをおしました。ところが、どういうわけでしょう、なんにも音がでできません！

「どうしたんだ？」とパパは子どもたちにたずねます。

ピピルは、パパと目を合わせないようにして、首をふります。

「おまえはテープをいじったかい？」パパはルシシにもたずねます。ルシシもさっぱりわけがわかりません。

「ほかの曲をきいたら」といってルシシはべつのテープをプレーヤーにいれました。音楽がながれてきました。

「ああ、きけたもんじゃない！」パパは耳をふさいで音楽をとめてしまいます。その曲は、パパがいちばん尊敬していた作曲家のものだっていうのに！

そういえば午前中、ピピルが試験に遅刻したという先生からの電話があったことを、パパはおもいだしました。

「どうして試験に遅刻したの？ なにをしていたのかな？」と、いきなりパパはきいてきました。

パパはどうしてそのことを知っているんだろう、とピピルはうろたえました。

「なにがあったっていうんだ？ それにテープにはいついた音楽はいついどこで手にいれたんだ？ そしてどうして消えてしまったんだ？ ちょうどそのタイミングでおまえは試験に遅刻したそうじゃないか！ ピピル、さっさとパパにいいなさい！」 どうやらパパはあのテープの音楽がききたくてたまらないようです。

赤いソファのミュージック・シティの音楽をパパにきかせてあげたい、とピピルもまたおもわずにはおれませんでした。だってあの音楽を1度でもきいてしまったら、だれだって永遠にきいていたいとおもうにちがいありませんから。

けれども、ピピルはもう2度と誓いをやぶることなんてできません。

息子がちっとも口をきこうとしないので、パパはいまにも怒りだしそうです。ママがたすけにはいます。

「まあまあ、ピピルがあ音楽を手に入れることができたっていうことは、きっとどこかの楽団が演奏したものにちがいないんだから、さがせばきっとみつかるはずよ。そうそう、あなたの友だちに群星楽団のひとがいるじゃない？ かれにきいてみればいいわ！」

ママがパパをなだめているすきに、ピピルはこっそりにげだしました。

ピピルのようすをみて、お兄ちゃんは誓いをやぶったんだわ、とルシシは腹がたちました。そこでルシシはピピルのあとを追いかけてきました。

ピピルはしょうがないのでルシシになにがおこったのかを正直にいいました。

「どうせテープの中身はぼくが消してしまったから、もう大丈夫さ」といってピピルは自分をなぐさめます。ルシシもそれもそうだとおもったので、お兄ちゃんをゆるすことにしました。

ピピルとルシシは赤いソファのミュージック・シティの音楽の価値がよくわかったので、ふたりでミュージック・シティをまもりぬこうと決心をかためました。

夏休みになりました。

赤いソファのミュージック・シティは、毎日、ピピルとルシシのためにすばらしい音楽を演奏してくれました。ピピルとルシシはそのたびに夢のような童話の世界をさまよっているような気分を味わいます。そして生きていることのすばらしさを感じ、うつくしい未来を信じるようになるのでした。

ある晩のこと、ピピルの家族はそろってテレビのニュースをみていました。女性のアナウンサーが画面にうつっています。

「最新のニュースをお伝えします。昨夜、群星楽団の演奏した1曲が、音楽界にセンセーションを巻きおこしました。優美なメロディといい、高雅なハーモニーといい、これまでだれも耳にしたこともないような曲です。ただ惜しいことに、その作曲者がだれなのかはわかっていません。群星楽団はいまその作曲者をさがしています。これからその曲の一部をおとどけます」

画面には群星楽団がうつっています。かれらが演奏しているのは、まさに赤いソファのミュージック・シティの音楽です。

ピピルとルシシはふたりともポカンと口をあけています。

パパとママはすぐよろこんでいます。

「だから楽団の友だちにきいてみたらっていったじゃない。あなたったら時間がないっていついたけど、ほら、この曲じゃないの」とママはいいます。

パパは「すぐに録音しよう！」というのと、得意そうな顔をしてピピルのほうをチラッとみしました。

ピピルの頭にはすぐに王福のことが浮かびました。テープを貸したのは王福だけです。まさかテープをコピーしたってことは？ そうだ王福にちがいない！ ピピルはあわてて王福の家に向かってゆきました。

王福の家に着くやいなや、ピピルは力いっぱい玄関のドアをたたきました。王福のパパはドアをあけてピピルをみると、すぐさま「はいつて、はいつて。王福からきいたよ、勉強をいろいろたすけてくれたってね。なんてお礼をいったらいいか」といいます。

「お礼どころじゃないよ！」とピピルは小声でつぶやきます。王福のパパはピピルの顔色がおかしいのに気づき、いそいで王福をよびにゆきました。

ピピルは王福を家のそとにつれだすと、「このウソつき！ なんでテープをコピーしたりしたんだ？」

「コピーって？」王福にはなんのことやら、さっぱりわけがわかりません。

「とぼけないでよ！ 貸してやった国語のバックグラウンド・ミュージックのテープだよ」

「もしコピーなんかしてたら、ぼくをブンなぐってくれていいよ」と王福はキッパリといいきります。

ピピルはわけがわからなくなりました。王福がコピーしていないとしたら、群星楽団はどうやって赤いソファのミュージック・シティの音楽を手に入れることができたのでしょうか？

王福の表情をみていると、ピピルはかれがウソをついていないと信じざるをえませんでした。

「だったら、いつたい……」ピピルがどうしたらよいかわからないでいると、そこに王福のお姉ちゃんがやたらと上機嫌なようすで家にかえってきました。その顔は赤くほてっていて、なにやらひどく興奮しています。

「王福ったら、はやくお姉ちゃんに教えてよ、あのテープはだれから借りたの？」とお姉ちゃんはたずねてきました。

「テープって、どのテープ？」王福はポカンとするばかり。

「あんたがもってた音楽のテープよ！」

「なんで勝手にぼくのテープにさわったのさ！」と王福は大声でさげびました。まさかお姉ちゃんがピピルの貸してくれたテープに目をつけていたとは、王福は夢にもおもっていませんでした。ああ、自分の不注意のせいで、友だちに申し訳ないことをしてしまいました。

「それがどうしたっていうの？」とお姉ちゃんは年上だとおもって、イバっていいいます。「いっとくけどさ、あたしは偶然にあのテープにはいついた音楽をきいて、こりやすごいっておもって、すぐにコピーして張さんにきかせてあげたわ。張さんもすぐに夢中になっちゃって、そのテープを楽団のところに持って行って演奏したわけよ。するとどうなったとおもう？ たちまち大騒ぎよ！ 今晚のテレビはもうこのニュースでもちきりよ。いまでは全音楽界をあげて作曲者がだれなのかをさがしまわってるわ。でも、どうしてもみつからなくて、あたしが唯一の手がかりってわけ。ねえ王福、お姉ちゃんに教えてちょうだい、あのテープはだれが貸してくれたの？」

お姉ちゃんからなにがおこったのかを知らされて、王福とピピルはおどろくやら、あきれんやら。王福もピピルもよく知っているのですが、張さんというのはお姉ちゃんの恋人で、群星楽団でバイオリンをひいています。

「ピピルが貸してくれたんだ」と、有名になるのはピピルにとってもよいことだとおもったので、王福はあっさり白状しました。

「あんただったの？」と王福のお姉ちゃんはよろこんで、いきなりピピルの手をにぎると「ピピル、はやく教えてよ、どこから手にいれたの？」

王福がこんなに簡単に裏切るとはおもわなかったので、ピピルはおもわず目をまるくして王福をみつめてしまいました。

「ぼくじゃないよ。ぼくはテープを貸したことなんてない！」

ピピルは王福のお姉ちゃんの手をふりはらって、キッパリといいきました。

「王福ったら、なんでウソをついたりするの？」とお姉ちゃんは王福にたずねます。

「ぼく……」まさかピピルがちがうというなんておもわなかったので、王福はなんていえばよいのかわからなくなってしまうました。

「さっさとおっしやい、あのテープはどこで手にいれたの？」お姉ちゃんはいらだって問いつめます。

「ぼく、かえります」ピピルはお姉ちゃんにちょっと頭をさげ、王福をキッとにらみつけると、家からでてゆきました。

「えっ、ピピル、いかないでよ……」王福は追いかけようとしたのですが、お姉ちゃんにつかまってしまいました。

「王福、お願いだからお姉ちゃんに教えてよ、テープはどこからもってきたの！ 音楽界のみんなが作曲者をさがしていて、最初にみついたら大手柄なんだからさ」とお姉ちゃんは必死にたのみこみます。なにがなんでも有名になりたいみたいです。

「おまえにテープを貸したとかなんとか、さっきピピルはいついていなかったっけ？」と奥の部屋からでてきたパパが王福にたずねました。

「いついてないよ」と王福はキッパリと否定しました。

そういえば、とお姉ちゃんはおもいできました。王福はさっきピピルからテープを借りたっていついていたわね。ピピルはあのテープとなにか関係があるにちがいない、とお姉ちゃんは確信しました。

「ピピルの家はどこ？」お姉ちゃんがたずねます。

「いったことない」と王福。

「いいわ、しらべればわかるから」といつてお姉ちゃんは王福をにらむと、すぐに家をでてゆきました。

王福はピピルにすまないという気持ちでいっぱいになりました。かれはぼくのことをたすけてくれたっていうのに、ぼくはかれに迷惑をかけてしまった。こんなじゃ友だち失格だ。でも、それと同時に王福はとても不思議におもいました。ピピルはどこからテープを手にいれたんだろう？ どうしてあんなに秘密にしたがるんだろう？

家にもどってゆく道すがら、ピピルの耳にはたくさんのひとが口々にしゃべっている声がきこえてきました。どれもこれも、さっきテレビで放映されたすばらしい音楽のことばかりです。

「すごかったなあ！ あれこそが音楽だよ！」ある若者がいつています。

「あやうく気をうしないそうになったわい」ある老人がいつています。

「でも、その作曲家がいついだれなのか、まだわかっていないんだって！」と若い女のひとは、うつろな目をして夢見るようにつぶやいています。

ピピルはいよいよ心臓がドキドキしてきました。これはもうハッキリと自分のしでかしたことが面倒をひきおこしています。こんなふうには町じゅうのひとに知られてしまったということは、赤いソファのミュージック・シティに災難がふりかかってしまうのでしょうか？ もし赤いソファのミュージック・シティがこの音楽をつくったことがわかってしまったら、いつたいなにおこるのでしょうか？ 赤いソファのなかは掘りかえされてしまうのでしょうか？ そうなったらミュージック・シティのひとたちは平和に暮らせなくなってしまいます。考えれば考えるほどおそろしくなってきた、ピピルは後悔する気持ちがどんどん胸をしめつけてきました。

家の玄関のところではルシシが待つていました。

「パパは群星楽団のところにいつたわ。なにか録音するんだって」とルシシはお兄ちゃんに伝えました。

ピピルは王福のお姉ちゃんがテープをコピーしたという出来事についてルシシに教えました。

「連中はきっとぼくのところに問いつめにやってくるだろう」とピピルはいついます。「もし赤いソファのミュージック・シティのことが知られてしまったら、音楽家たちはひどい目にあわせられるにちがいない。それにもう2度とミュージック・シティにもどれなくなってしまうかもしれない。そうおもうだろ？」

「きっとそうね」ルシシはうなづくと、からだをブルッとふるわせました。

「こんなことになったのは、なにかも全部、ぼくのせいだ。ぼくはきめた。たとえ死んだって赤いソファのミュージック・シティのことは一言もしゃべらない。そうすべきだろ？」とピピルは妹に賛成をもとめました。

「安心して、あたしも絶対になにもしゃべらないから」ルシシはもともと友だちを裏切るようなことはしない子です。

ルシシは赤いソファのミュージック・シティの音楽の価値についてよくわかっています。それに大人というものが値段がつけられないくらい貴重なものにたいしてどういう態度をとるかっていうこともよくわかっています。かれらは権力をもちいて値打ちのあるものを独り占めしても平気なのです。

「約束だ」ピピルは妹の肩をたたきました。

「約束ね」ルシシは兄にほほえみかけます。

ピピルとルシシがいっしょに家にはいると、ちょうどそこにパパがかえってきました。そのうしろには大勢のひとがゾロゾロとくっついてきているじゃありませんか。

ピピルのパパは群星楽団にゆき、友だちに録音をたのもうとおもっていたのですが、ちょうど楽団のひとたちはみんな手分けして謎の作曲家をさがしまわっていたのです。そのとき王福のお姉ちゃんが張さんのところにやってきて、作曲家を見つけるための手がかりがあるといいました。ピピルという男の子が王福にテープを貸してくれたというのです。たまたまその場にいたピピルのパパは、その男の子の名前を耳にして「たしかに息子はテープをもっていたんだけど、どういうわけかその音楽は消されてしまったんだよ」と証言しました。

そうということがあって、ただちに群星楽団の指揮者は、ピピルのパパ、王福のお姉ちゃん、それに張さんなど大勢のひとをひきつれて、ピピルの家に駆けつけてきたってわけです。かれらは事件の真相を明らかにするつもりなのです。

家までやってくる途中、今晚、あの作曲家の謎はかならず解くことができるでしょう、とピピルのパパは保証しました。かれは息子にたいして父親としての権威をしめすことができると信じきっているようです。

お客さんたちは、どやどやと部屋のなかにはいってきました。群星楽団の指揮者とピピルのパパは赤いソファにすわりました。

「ピピル、こっちにくるんだ。みんなおまえにあいにきたんだから」とパパは息子をよびつけました。

「ぼくに？」ピピルは目をまるくしました。

ルシシはいまのお兄ちゃんの演技はなかなか見事なものだと感心しました。

「おまえは王福にテープを貸したのかい？」とパパはいきなりズバリと本題にはいってきました。ピピルは首を横にふりました。

しょっぱなから失敗してしまいましたが、パパも負けてはいません。うまい手を隠しているようです。

パパは例のテープをもってきて、王福のお姉ちゃんにわたしました。「このテープですよ？」

「まちがいないわ！ これよ！」王福のお姉ちゃんはハッキリといいきりました。

「なにいつてんの、似たようなテープなんていくらでもあるよ」はじめから覚悟をつけていたので、ピピルは堂々としています。

「このテープには、あなたの名前が書いてありますね」と王福のお姉ちゃんはピピルのパパにむかっていいました。

ピピルはグッとつまってしまいました。でも、まだ降参したくありません。「世のなかにはおなじ名前のひとはいっぱいいるよ」そもそも皮という名字はすくないし、それにパパの名前はめずらしいということもわかっていますが、ピピルはガンバります。

「屁理屈をいうな！」とパパは大声でどなりました。

「ねえ、きみ」と群星楽団の指揮者はピピルに語りかけました。「きみもわかっているようだが、この音楽はふつうの音楽じゃない。社会の全体にすばらしい影響をおよぼすものだ。もしきみがこの音楽をつくったひとのことを知っているのなら、ぜひとも教えてくれないか？」

ピピルはこころのなかでおもいました……あんたたちときたら、たかが国語と数学のバックグラウンド・ミュージックをきいただけで、こんなに上を下への大騒ぎをしているみたいだけど、もし赤いソファのミュージック・シティのうつくしい音楽をきいたりしようものなら、それはもう天と地がひっくりかえっちゃうよ！

「ほんとうに知らないんだ」とピピルはいいました。

「じゃあ、あのテープはどこから録音してきたの？」と指揮者はあきらめずに根気よくきいてきます。

ピピルはわらっちゃいそうになりました。だって指揮者はいままさに赤いソファにすわっているというのに、どこから録音してきたのかなんてたずねてくるのですもの。

「ぼくは録音なんてしていないよ」とピピル。

「おまえは知ってるのかい？」とパパはルシシにたずねます。

「知らないわ。お兄ちゃんが録音するところも、あたしはみたことないわ」とルシシは横からお兄ちゃんを応援します。

そうやって対立しあっているところに、ひとりの群星楽団の演奏家がそとからはいってきて「新発見！ 新発見！ 警察がテープの音声分析を試みたら、ちいさな男の子の声がはいついて、その正体はピピルだと判明したぞ！」とさげびました。

ピピルとルシシはおどろいてしまい、かえす言葉もなくなってしまいました。

「さあ、はやく白状しなさい。この音楽はだれがつくったんだ？」パパは満足そうにいいました。

偉大な作曲家の名前がいついにかわかる時がくるとおもい、みんなは息を殺しています。この世のなかのだれよりも早く、この作曲家の名前を知りたいようです。

「ぼくだよ」ピピルはこうなったら自分の身をさしだして赤いソファのミュージック・シティにふりかかる火の粉をふせぐしかないとおもいました。

「きみが？」みんな口々におどろきの声をあげました。

「ふざけるな！」とパパは、はげしい口調でどなりました。

「信じられないなら、あの曲のメロディーをうたってみようか」というとピピルは鼻歌でうたってみせました。

音符のひとつまで、あの曲とピッタリいっしょです。だれひとり声をだすこともできません。どう考えても信じられないけれども、このすばらしい音楽はどうやらこの小学生が作曲したみたいですよ。そんなことがあってよいのでしょうか！

「そういえば、おもいだしたわ。ちかごろお兄ちゃんは机にむかいながら鼻歌をうたって、そのメロディーをなにかに書きうつしているみたいだったわよ」とルシシは、まるで密告でもするみたいに、パパの耳もとでささやきました。

まさか、ほんとう？　うちの息子が作曲したっていうの？　とても信じられないとおもいながらも、ひよっとすると自分の家から神童があらわれたのかもしれない、とパパはすこし興奮しはじめています。

翌朝、すべての新聞はこのことを第1面のトップ・ニュースとして報道しました。ある新聞には「ピピルは天才だ」とあり、ある新聞には「こんなこと絶対にありえない」とあり、ある新聞には「とても信じられないが」とあり……

ピピルをたずねて、ひっきりなしに記者がやってきます。玄関はごったがえしています。ピピルはおそろしくなってベッドのしたにもぐりこんで隠れてしまいました。

作曲家たちは、ひとりのこらず怒りくるいました。いくら音楽会をもよおしても、ちっともチケットが売れません。かれらの作品をおさめたテープを買うものなんて、ひとつ子ひとりいません。それどころか、かれらの名前すらキレイさっぱり忘れられてしまいそうです。それもこれもみんなあの音楽があらわれたせいです。

ここにおいて作曲家たちは、全員の名前をつらねて、ひとつの声明を発表しました。声明はつぎのような内容でした。

ちかごろ世間には神童ともてはやされている作曲家があらわれて、ろくに音楽のことがわからないひとたちの喝采を博しているようであります。その作品はというと、愚劣　きわまりないしろものであります。しかもその作曲家とやらは、音楽大学を卒業しても　いないというではありませんか。音楽をちゃんと専門的に勉強したこともないものが、　はたして芸術的に価値のある曲をつくれたりするでありますでしょうか？　みなさんにお願　いしたい。正しい芸術のほうにもどってきていただきたい。そして正しい音楽を鑑賞し　ようではありませんか！

ある音楽家などはピピルの脅迫状をおくりつけました。そこに書いてあったのは……もう作曲するな、さもないと……

そんなふうな出来事がつづくことによって、作曲家といわれている連中のところが腐っているということ、ピピルとルシシはつくづく思い知りました。道理でうつくしい曲がつけられないはずですよ。

ピピルとその妹は、赤いソファのミュージック・シティのことを秘密にしたという自分たちの判断がまちがっていなかったということ、ますます強く感じていました。もしあの日世間に公表していたら、作曲家たちは赤いソファのミュージック・シティをめちゃくちゃに破壊していたにちがいません。

新聞をひらいてみると、ピピルとかれの曲のことを攻撃するものがだんだんふえてきました。ある記事には「音楽の発展という観点からすると、あの曲はまったく意味をもっていない」とあり、ある記事には「美学的な角度からいうと、あの曲には一文の値打ちもない」とあり、ある記事には「学歴がないものの作品らしく、いかにも幼稚であり、とうてい芸術とはいえない」とあり……

「われわれは学歴をきいているのか？　それとも音楽をきいているのか？」と道ゆくひとびとも議論をたたかわせています。

「こうなったら、いっそのこと学歴の博覧会でもやったらどうだ！」と皮肉をいうひとあらわれてくる始末です。

新聞にいろいろ書きたてられたにもかかわらず、曲の評判はみるみるうちに伝わってゆき、だれひとりとして知らないものがいないくらい隅から隅までひろまりました。

ある日の午後、ルシシはお兄ちゃんにむかって「あたしの考えでは、そろそろ作曲家たちに反撃してやったほうがいいとおもうわ」といいました。

「反撃って、どうやって？」じつはピピルだって、とっくにムシャクシャしていたのです。

「もう1曲つくるっていうのはどう？」とルシシは提案しました。

「そいつはいい！」なるほどそれが作曲家たちにたいする最大の反撃にちがいないとピピルはおもいました。

「そうときまったら、さっそく赤いソファのミュージック・シティに相談しなきゃ」とルシシ。

兄妹はふたりそろって最近の出来事について赤いソファのミュージック・シティのひとびとに説明しました。ミュージック・シティの作曲家たちは、ピピルとルシシが秘密をまもってくれたことに感謝します。

ピピルは自分たちのアイデアを赤いソファのミュージック・シティのひとびとに伝えました。

「よるしい。すぐに楽譜をわたしましょう」と総指揮者はいいました。かれらはピピルとルシシという兄妹がミュージック・シティのことを裏切ったりしないということ信じているのです。

しばらくたってから、ピピルはソファのしたのほうから1枚の楽譜をひっぱりだしました。

「お兄ちゃん、万が一のために、その楽譜を書きうつしておいて！」とルシシは念のためにピピルに注意をうながします。

「そうだね。なにがあっても大丈夫なようにね」といってピピルは机にむかい、楽譜をきちんと書きうつし、それに『春の歌』というタイトルをつけました。

その日の晩、ピピルは『春の歌』の楽譜をパパにわたしました。

「パパ、ぼく、新しい曲をつくってみたんだ」

「ほんとうか？」パパはようやく自分の子どもがほんとうに作曲できるのだという証拠をつかみました。

パパは赤いソファにすわって楽譜をじっくりながめます。うん、まちがいない、これはたしかに息子の書いたものにちがいません。

パパは楽譜を読みふけりながら、ふんふんと鼻歌をうたっていました。やがて「こりゃあ一大事だ！ こいつは歴史にのこる傑作だぞ！」とさけぶと、赤いソファーから跳びあがりました。そして「これからすぐに群星楽団にもってゆく！」と行って駆けだしてゆきました。

翌日、群星楽団はさっそく『春の歌』のコンサートをもよおしました。ホールのまわりは大勢のひとびとがとりかこみ、ひとの山、ひとの海です。しょうがないので巨大なスピーカーをしつらえて、そとのひとびとにむかって放送することにしました。

新聞はいっせいに新しい曲の楽譜をのせています。

作曲家たちは、ふたたび猛烈な衝撃をうけました。というのも世間のひとびとは、もはや作曲家たちの作品になんか見向きもなくなってしまうのです。作曲家たちはみな必死になって自分の地位をまもろうとしました。

赤いソファーのミュージック・シティのひとびとも、はじめて自分たちの能力のすごさに気がつきました。かれらはピピルとルシシの兄妹にここから感謝し、うつくしい音楽をもっときかせてあげようときめました。

ピピルとルシシは、毎日、赤いソファーのミュージック・シティの音楽にどっぷりと身をひたし、かれらの精神はすばらしい高みへのぼってゆきます……

夜、パパが帰宅しました。ひどく暗い顔をしています。

「どうしたの？」ママはパパの顔色がわるいのに気づき、心配そうにたずねます。

「ある作曲家が裁判所にピピルのことをうったえたんだよ」とパパ。

「ぼくをうったえた？」ピピルは目をパチクリ。

「そうなんだ。かれがいうには、おまえはかれの作品を盗んだっていうのさ！ いまの曲も、まえの曲も、みんなかれの作品だっていうんだ」といってパパは息子をみつめました。

「……」おどろきすぎて、ピピルは一言もしやべれません。それでも作曲家のつもりなの？ そんなふうで音楽にかかわる仕事をしていてもいいの？

「そうなのか？」とパパはたずねます。

「まさか」とピピルは落ち着いています。

「明日、裁判がある。おまえが被告だ。法廷にたたななきゃならない」とパパ。

「どういうこと？ ピピルはまだ子どもなのよ。法廷にたつなんてことがあるの？ まだちいさすぎるわ！」とママはとまどっています。

「どうやら特別あつかいの案件ということらしいね」パパはピピルがたいへん冷静なのをみて、すこし安心しました。

その晩、ピピルとルシシはふたりで相談し、計画をたてました。

つぎの日の朝の8時ピッタリ、法廷がひらかれ、音楽を盗んだかどうかという裁判がはじまりました。

うったえた作曲家は、やたらと元気いっぱい法廷にはいつてきて、原告席にたちました。

ピピルは被告席にたっています。

法廷のありとあらゆるところに記者たちがひしめいています。

たくさんカメラによって撮影がつけられています。フラッシュがひっきりなしにたかれています。

法廷ではいよいよ審議がはじまりました。

まずは原告のほうが、自分がどのようにして2曲をつくったのか、その時間や場所についてのべ、さらにその2曲をどのようにして紛失してしまったのかについてのべました。そして、かれはピピルがこの作品を盗んだのだとうったえました。

「そもそも小学生なんかに、あんな曲をつくれるはずがない！」と作曲家は断言しました。「もし信じられないというなら、ピピルにこの楽譜をわたして、鼻歌でうたわせてみたらどうですか？ きっと楽譜なんてよめっこありませんから！」

そういうと作曲はピピルに1枚の五線譜をわたしました。

ピピルはたしかに五線譜をよむことはできません。

「おやおや！」と作曲家はピピルが楽譜をよめないのをみて、すごく得意そうな顔をしました。「ひとつおたずねしますが、そもそも楽譜がよめないひとに、いったい作曲ができるものでしょうか？ それって外国語がわからないひとに翻訳ができるというのと同じじゃないですか！」

法廷はてんやわんやの大騒ぎになりました。

「被告人、なにか弁解することはありますか」と裁判長。

「たしかにぼくは楽譜がよめませんが、それだけでこの曲があの一の作品だということにはなりませんよ」とピピルはすこしもあわてず、なにやら自信タップリにいます。

記者たちはザワザワしています。神童の作曲家はみずから楽譜がよめないことをみとめてしまいました。そうだとすると、あの2曲はいったいだれがつくったのでしょうか？

「あれはわたしの作品だ」と作曲家はあらためていいきました。

「ふうん、だったらここにもう1枚の楽譜があるんだけど、これもあなたの作品だっていうつもりなの？」とピピルはポケットから1枚の紙をとりだしました。

「もちろん」と作曲家はすぐさまハッキリといいました。

「それだったら、この曲の内容をみんなに説明してみよ。鼻歌でもいいからさ。もしあなたがメロディーを口ずさむことができたなら、ぼくが盗んだってみとめてもいいよ」とピピルは攻撃にです。

「……」作曲家はなんにもいえません。

「じつはここにもう1曲あるんだけど、これも鼻歌でうたってみてくれないかなあ」とピピルはポケットからさらに

もう1枚の紙をとりだし、ちっとも攻撃の手をゆるめません。

裁判所につめかけた記者たちの目はすべて一箇所に、そうピピルがもっている2枚の紙にそそがれています。というのも、ひとびとは寝ても覚めても新しい曲があらわれてくるのを待ちつづけているからです。それがいっぺんに2曲もあらわれたっていうのですから！

「あなたはウソをつきましたね！」ピピルは勢いによって攻めこみます。

「……」作曲家はだまって頭をさげたまます。

「ひとつたずねたいのだが、もしきみが作曲したんじゃないとすれば、いったいだれが作曲したのかな？」と裁判長はピピルにたずねました。

「ノーコメント」といってピピルは肩をすくめます。「ぼくは盗んでいません。だったら、だれが作曲したのかを知っていて、その名前をいわなくたって、べつに罪にはなりませんよね？」

「もちろん罪にはならない」と裁判長はいいました。そして原告のほうをゆびさしてピピルにききました。「きみはかれのことをウソをついた罪でうったえますか？」

「うったえません」とピピルはいいました。

作曲家はピピルのほうを感謝のまなざしてチラッとみました。

裁判所の門をでたところで、ピピルは記者たちにとりかこまれました。

音楽ファンたちは、さらに新しい曲があらわれたということを知って、まるで波がおしよせるように裁判所にあつまってきます。ちょうどそこに群星楽団のひとたちが車を飛ばしてやってきました。

ピピルは2枚の楽譜を群星楽団の指揮者にわたしました。

群星楽団はそのまま屋外でみんなのために新しい曲を演奏しました。道ゆく車も人間もみんなたちどまり、あつまってきて、うつくしい音楽にききほれています。

アッというまに夏休みはおわってしまいました。

ピピルとルシシは学校にゆく準備をしています。あの事件があつてから、ほとんど毎日といってよいほど、「あの曲はどこから手にいれたんだ」とパパはきいてきます。ピピルはかたく口をとぎして答えません。パパもすっかりお手上げです。

4

新学期がはじまりました。ピピルのクラスに新しい担任の先生がやってきました。

クラスの全員がどうしたんだろうと不思議におもいます。

「みなさん、あなたたちの徐先生は、かなしいことに胃ガンで入院されました。先生はみんなに勉強をしっかりやるようにと伝えてほしいといっていました」というと新しい先生はさびしそうな顔をしました。

胃ガン？ 胃ガン！

クラスの全員がおどろきました。だれか女の子がしくしく泣きはじめ、やがて教室じゅうが泣き声でいっぱいになりました。

クラスみんなは徐先生が胃の病気をもっていることは知っていました。先生はご飯がちゃんと食べられないときでも、クラスの子どものために補習をしてくれたり、家庭訪問をしてくれたりしました。

ピピルはガンというのがなならない病気だということを知っています。

ピピルはじつは徐先生のことがキライでした。いつもピピルのことを説教してくるし、しょっちゅう無実の罪で叱ってくるからです。でも、いまの気持ちをいうと、ピピルはむしろ徐先生のことをキライだとおもった自分のことがキライです。ピピルは生まれてはじめて気がつきました。この世のなかの出来事について、いちいちわるい方向でとらえたりすることはないのです。それよりもみんなで仲よくすることのほうが大事なのです。

まだ授業中だということも忘れてしまい、ピピルはいきなりたちあがると、病院にむかって走りだしました。

この時間はお見舞いできないよ、と病院の門番のおじいさんはピピルに声をかけました。ピピルはそれを無視して、全速力で病室のほうに駆けこんでゆきます。おじいさんは怒って足をドンとふみならしました。

病室の徐先生は、ピピルの目にはちがうひとのようにみえました。先生はものすごく痩せていました。そばでは奥さんが看病しています。

ピピルのすがたをみると、先生は苦しうにしながらも、ニッコリとわらってくれました。その笑顔からは先生がものすごくガンばってわらってくれているのだということが伝わってきました。

徐先生にはたしかに無実の罪で叱られたこともあって、一生忘れるもんかとおもったこともありましたが、ピピルは忘れてあげることにしました。

最初にお見舞いにくてくれたのが、よりによってピピルだなんて。先生はすこし恥ずかしくなりました。ピピルのことは叱ってばかりでした。クラスのみんなのまえでからかったこともあります。それなのにピピルがまさきにお見舞いにくてくれました。徐先生はこころのなかで考えました。むかし教えた子どもで、大人になってから遊びにくてくれるのは、やんちゃだった連中ばかりでした。かれらは義理がたいからなあ。それにひきかえ優等生だった子は、かつての小学校の先生にところになんか、だれもたずねてこない……

徐先生は胸がいっぱいになり、ピピルの手をにぎったまま、なんにもしやべれませんでした。

その日の午後、ピピルは家にかえってくると、しょんぼりと赤いソファーにすわりこみました。

「ピピルくん、どんな音楽がききたいかな？」ミュージック・シティの総指揮者はたずねました。

「なんにもききたくない」

「どうしたのですか？」総指揮者はおどろきました。ピピルはこれまで1度もミュージック・シティの音楽をききた

くないなんていったことはありませんでしたから。

「ぼくの先生がガンになったんだ」とピピルは涙声でいいました。

「なんのガンですか？」

「胃ガン」

「めそめそしないで。なにか方法をかんがえてみましょう」

「方法って？」いくらミュージック・シティの音楽でも病気がなおせるとまでは、さすがにピピルもおもえませんでした。だってガンはふつうの病気じゃありませんから。

赤いソファのミュージック・シティの音楽家たちは、どうやら自分たちの音楽は万能だと信じているみたいです。人間のからだの器官はすべて音楽によって支配することができるとおもっているようです。かれらは特別な音楽をつくってピピルの先生の病気をなおしてあげようときめました。

1曲の音楽ができあがりました。名づけて『胃ガンをやっつける交響曲』。第1楽章「負けてたまるか」、第2楽章「もりもり食べよう」、第3楽章「100歳まで元気いっぱい」、第4楽章「ガン細胞をぶっとばせ」という4つの楽章にわかれています。

赤いソファのミュージック・シティはこの交響曲を演奏し、ピピルはそれを録音しました。この交響曲はすばらしく神秘的なパワーをもっていました。きいていると元気のエネルギーがみなぎってくるのです。そして生きるんだという強いところがわきあがってきます。

ピピルはつくづく不思議だともいいました。ふつうの音符ばかりなのに、それがいろいろに組みあわされることによって、信じられないくらいすばらしい効果が生まれてくるのです。

そこにパパがかえってきました。

ピピルは赤いソファのところからテープ・レコーダーをすばやく移動させました。

「なにをしていたんだ？」パパは息子のあわてたようすに気づきました。

「音楽をきいてただけだよ」とピピルはどうってこともないという感じをよそおい、テープ・レコーダーからテープをとりだすと、ポケットにしまいました。

「それをよこさない」テープをみつけたパパは手をのばします。

「これはパパの好みじゃないよ」といってピピルはごまかそうとしました。

息子とあの音楽との謎のかかわりを明らかにしたいとずっと気にしつづけているパパですから、ようやく手がかりをみつけたからには、そう簡単にみのがしてくれるはずがありません。

「よこさない！」パパの声は逆らうことをゆるさない感じです。

ピピルはあきらめて、パパにテープをわたしました。

パパはテープ・レコーダーにテープをいれ、再生のスイッチをおしました。

パパはたちまち『胃ガンをやっつける交響曲』にうちのめされ、すっかり夢見心地になってしまいます。

そばにいるピピルは居ても立ってもいられません。こうしているあいだにも、1秒、1秒、ガン細胞はじわじわと徐先生の命をむしばんでいるのです。ピピルはこの交響曲をつかっけて、なんとしてでも徐先生をたすけてあげたいのです。それなのにパパはのんびり音楽を鑑賞しています……ピピルのところには、どうしようもなく「殺人」という2文字が浮かんできました。

パパはようやく交響曲をききおえました。

「いったいこの音楽はどこから？」とパパはつぶやいています。

これ以上もはや一刻も時間をムダにすることはできません。ピピルはいきなりテープ・レコーダーからテープをとりだすと、すぐさま身をひるがえして走りだしました。

パパが正気にもどったとき、ピピルのすがたは影もかたちもありませんでした。

ピピルが病院に着いたとき、徐先生はすでに意識不明でした。

「いそいでテープ・レコーダーを用意してください」とピピルは看護師にいいました。

「テープ・レコーダー？」看護師はピピルがふざけているのだともいいました。

「はやく用意してください。ぼくは先生をたすけられるんです！」とピピルは強い調子でいいました。

ひとりの医者がピピルをみて、かれがテレビにでていた神童の作曲家であることをおもいだしました。

医者がテープ・レコーダーをはこんできました。

ピピルはテープをテープ・レコーダーにいれました。

『胃ガンをやっつける交響曲』がながれはじめます。第1楽章がおわるころ、徐先生の顔色にほんのり赤みがさしてきました。メロディーが耳の鼓膜から徐先生のなかにはいつてゆき、からだの奥のほうの命の源にまでとどき、「さあ、目をさまして、いっしょに病気とたたかおう」とはげまします。徐先生のからだじゅうの細胞や神経は、音楽にはげまされて、ゆっくりとうごきはじめました。

つづいて第2楽章がはじまります。メロディーが徐先生の食欲を刺激して、ご飯が食べたいなあと感じさせます。徐先生はパッチリと目をひらきました。

そして第4楽章がおわると、奇跡がおこりました。徐先生はむっくりと上半身をおこしたじゃありませんか。生と死の境界線のうえをさまよっていた先生は、音楽の強い力にみちびかれ、ついに病気に勝って、ふたたび見事にこの世にもどってきたのです。

奇跡がおこったということを知り、それが真実かをたしかめようと、病院じゅうの医者があつまってきました。

徐先生はしっかりとピピルの手をにぎっています。

「この音楽をくりかえしきいてください。そしてガン細胞をすっかり消してしましましょう！」とピピルは先生にくれぐれも念をおしました。

ほかの胃ガンの患者の家族たちもつぎつぎにピピルのもとをおとすれ、どうか命をたすけてほしいとたのんできました。

「いいですとも。どんどんコピーしましょう」とピピルはいい、「はやく録音機をもってきてください」と病院の院長先生をうながしました。

録音機はひっきりなしにコピーをつくりつづけています。おかげで入院している胃ガンの患者たちはみんな『胃ガンをやっつける交響曲』のコピーをもつことができました。

夜中になって、ピピルは家にかえりました。

パパとママが赤いソファースにすわっています。ルシシも椅子にすわっています。まるで法廷のような緊張感がただよっています。

ピピルはどうやら自分が被告のようだと思悟り、部屋のまんなかたち、おとなしく審判がくだるのを待ちました。

「さて、今日という今日は、あの音楽の謎について説明してもらおうか！」とパパはいい、さらに「どうしてもだ」とつけくわえました。

ピピルは一言もしゃべりません。

「こんなにおそくまで、どこにいったの？」とママが心配そうにたずねました。

「先生のお見舞いに病院にいった」とピピル。

「あのテープはどこにある？」とパパ。

テープは病院にあるので、ピピルは持っていません。

息子はいったいだれにテープをわたしたのか、とパパはますます疑いをつのらせます。

「はやくいいなさい、だれにテープをわたしたんだ？」とパパはきびしい声でいいました。

「徐先生に貸してあげた」とピピルは正直にいわざるをえませんでした。

「ウソをつくな。徐先生はいま重い病気にかかっている、とても音楽なんてきけるはずがない」とパパは信じません。

話が徐先生の病気のことになったので、ピピルはおもわずニッコリとほほえんでしまいました。

「いいニュースがあるんだ。徐先生の胃ガンがなおったんだよ！」とピピルはうれしそうに手をこすりあわせました。

「なおった？」パパとママ、それにルシシも信じられません。

「ほんとうだよ、ぼくがなおしたんだ！」とピピルはキッパリといいきます。

パパとママは、こんなデタラメなことを平気でいうなんて、この子はすっかりダメになってしまったとおもいました。

「徐先生はもう意識不明になっていたんだけど、ぼくがもっていった音楽をきいたら、すぐに意識がもどって、いまではご飯も食べられるようになったんだよ！」とピピルは身ぶり手ぶりで説明しました。

パパのこころにあの曲のことが浮かんできました。あのすばらしいメロディーだったら、なるほど死にそうなひとを生きかえらせるような力をもっているかもしれせん。

ちょうどそのとき、徐先生の奥さんがたずねてきました。

「こんなおそい時間にどうなさったのですか」とピピルのママがいうと、「ピピルくんが主人の命をたすけてくれたことのお礼をいいにきました。おふたりが立派なお子さんを育ててくださったおかげです」といって徐先生の奥さんは目の涙をぬぐいました。

「ほんとうだったのか？」とパパはおどろきます。

「もちろん、ほんとうですとも！」とピピルは徐先生の奥さんはほほえみしました。

パパはピピルの顔を見つめながら、なんにも言葉がでてきません。

ガンをなおす音楽があるというのがどんなにすごいことなのか、パパにはよくわかっていました。

パパはそのまま、徐先生の奥さんと一言もしゃべろうともしないで、午後家に帰ってきたときの情景を必死におもいだそうとしました。

あのときピピルは赤いソファースにすわっていた。赤いソファースのうえにはテープ・レコーダーがおいてあった。そしてピピルはなにかを録音しようとしていた。

そうだ、とパパはおもいだしてきました。今朝、テープの音楽をきいたけれども、それはあとできいた音楽とはちがっていた。ということは、ピピルがそれを録音したのは今日だということになる。昼間は学校にいてるから録音することはできない。どう考えてみても、録音することができるとしたら放課後しかない。そしてルシシがいうには、ピピルは学校からかえってきってから家を一步もでていない。だとすれば、ピピルが録音できる場所といえば、この家しかないということになる。

パパは目をみひらいて、部屋のなかをグルリとながめわたしました。

洋服ダンス、勉強机、本棚、なんにも変わったようすはありません！　パパはわけがわからなくなってしまいました。

「わたしは病院にもどります。主人の看病をしなさいといけないので」と先生の奥さんがいうので、ピピルたちはみんな玄關のところまで見送りにゆきました。

ふたたび部屋にもどったとき、パパの目に赤いソファースのすがたが飛びこんできました。

「そういえばピピルは、どうしてテープ・レコーダーを赤いソファースのうえにおいていたのだろう？」とパパはそのときのピピルのふるまいが怪しいとおもいはじめました。

ピピルとルシシはびくびくして心臓が口から飛びだしそうになっていました。ふたりともパパのほうをみることはできません。ひとりは髪の毛をとかすふりをしながら、洋服ダンスの鏡にうつったパパのすがたをうかがっています。も

うひとりとは本棚の本をさがすふりをしながら、ガラス窓にうつったパパのようすをみえています。

パパはすぐに子どもたちの注意が自分のほうにそそがれていることに気づきました。どうも不自然です。いったいだれがこんな夜おそくに髪の手をとかしたりするのでしょうか！

パパは手をのばして赤いソファを何度もなでさわりました。さらに赤いソファをガタガタとゆさぶったりもしました。

ピピルとルシシはたがいに目をみあわせました。このままだまってみている場合じゃありません。なんとか対策をねらなきやなりません。

「どうなさったの？」ママが部屋にはいってきました。

「どうもソファのスプリングがこわれたみたいだ。修理しようかな」といってパパはふたりのようすを観察します。

ピピルとルシシときたら、それはもうドキドキハラハラして跳びあがっちゃいそうです。まさに緊急事態です。

とはいえピピルとルシシにはパパをおさえる知恵がさっぱり浮かんでできません。やめてといったりすれば、かえって赤いソファのことが疑われるかもしれません。

「あなたに修理できるわけじゃないじゃない」といってママはあきれたようにパパのほうをみます。「冗談はそれくらいにして、もう夜おそいんだから。さあ、みんな寝なさい」

「そうだよ、パパにソファの修理なんてできっこないよ」とピピルはママのいうことに調子をあわせ、「パパ、もし修理できるなら、そのソファをバラバラにしてみよ。ぼくもやりかたを教わりたくらいだ」とわざとらしい声でいいました。

ピピルがやたらと元気よくいうもんで、パパも困ってしまいました。

ピピルがソファをバラバラにしてみたらと落ち着いた感じだったので、パパもこの赤いソファにはきつと怪しいところはないのだろうとおもいました。とはいっても、あの音楽とこの赤いソファにはなんにも関係がないのでしょうか？

「さあ、もう寝なさい」とママの命令がぐだりました。

翌日になると、『胃ガンをやっつける交響曲』のことで世間はそれはもう大騒動です。音楽界、医学界、心理学界…あらゆる分野のひとびとが奇跡の出現におどろいて、目をぱちくり、口をあぐりとしています。

夜が明けたばかりの午前4時、1000人をこえる記者とガン患者の家族たちがピピルの家をとりにかこんでいます。かれらは夜のうちにやってきて、夜が明けるまでしずかにしていたのです。そしてピピルが玄関にでてくるのを待っていたのでした。

ルシシがいちばんさきに目をさました。そしてカーテンをあけてみてビックリ仰天！ 窓のそとは黒山のひとばかりではありませんか。

「パパ、ママ、たいへんよ、ちょっときて！」とルシシは両親の寝室のドアを力いっぱいたたきました。

「どうしたんだい？」とパパは寝ぼけまなこをこすります。

「窓のそとをみて！」とルシシ。

パパとママもたまげてしまって、あわてて着がえて玄関にゆきました。

「あなたがたは……」とパパがたずねました。

「わたしは『××新聞』の記者です」とメガネをかけた若者が身分証明書をパパにつきつけ、「ひとつおたずねしたいのですが、おたくの息子さんはどのようにしてガンをなおせる音楽をみつけたのでしょうか？」ときいてきました。

パパがまだなんにも返事をしないうちに、べつのひとりの記者が割りこんできました。

「わたしは『××雑誌』の編集長ですが、ピピルくんにごひともインタビューしたいので、どうかお時間をつくっていただけませんか？」

「わたしは『子ども新聞』のものですが、ピピルくんは子どもたちのヒーローでして……」

「どうかひとつ……」

「父はガンなのですが、ピピルさんにたずねていただきたくて」

「……」

ピピルのパパは頭がすっかり混乱してしまい、だれの問いにどう答えればよいのやら、まったくわからなくなってしまいました。それにくわえてテレビ局のカメラがずっとパパのすがたをとりつづけています。

どうやらピピルが学校にゆくのは無理のようです。それどころか家から一歩もでられそうもありません。ルシシがランドセルを背負って家からでようとしたとたん、たちまち大勢にとりかこまれてしまいました。

「きみはピピルくんの妹ですね？」と『子ども新聞』の記者が声をかけて、「ピピルお兄ちゃんのおもしろいエピソードはありませんか？」とたずねてきました。

「お兄ちゃんは学校からかえってくると家でなにしているのですか？」とべつの記者がひとを押しつけながらきいてきます。

「教えてほしいんだけど……」

「教えて……」

ルシシは一歩もすすむことができず、頭をかかえて家にひきかえしてしまいました。

家族全員、だれひとりとして家からでられません。まるで有名にでもなったかのような気分を味わうことになりました。

ひとりのハンチングをかぶった中年の男が、パパが油断しているすきに、ピピルの家のなかに無理やりにはいりこんできました。

ピピルのパパは玄関のドアをしめながら、「どういうつもりですか？」と勝手にはいりこんできた男に文句をいいま

した。

「わたしはビューティフル・サウンドという音楽会社の社長です」といって男はピピルのパパに名刺をわたしました。「あなたの息子さんと、どうしてもお話がしたいのです」

ピピルが部屋からでてきました。

「ぼくがピピルです」と自己紹介しました。

「こんにちは。はじめまして」と社長はものすごくていねいにお辞儀をしたかとおもうと、「あなたの音楽は世界じゅうのひとびとに衝撃をあたえました。たんにきいて楽しむための音楽というだけではなく、なんと不治の病であるガンまでなおしてしまうのですからね。そこでひとつご提案なのですが、あなたの音楽によってひとびとを苦しみから解放し、全人類に幸福をもたらしてはいかががでしょう」

ピピルはうなづきました。

「わが社はまさに最新の録音設備をほこっております。またわが社のつくるテープは世界じゅうから称賛をあびております。わが社と契約をむすんでいただければ、われわれは責任をもってあなたの音楽を全世界にむけて発信いたしますが、いかがなものでしょうか？」という社長はあらかじめ用意してきた契約書をピピルにわたしました。

ピピルはその契約書をよんでみました。

「もし賛成していただけるなら、そこにサインしてください」と社長はもう一刻も待たないというふうにい、さらに「ただサインしてたださるだけで、すぐに10万円の印税をおはらいしましょう」といいました。

「お金？」ピピルは一瞬おどろきましたが、すぐにピンとききました。この社長は赤いソファのミュージック・シティの音楽をつかってお金をもうけようとしているのです。

ピピルはそもそも自分はなんの権利ももっていないとおもっています。だってこの音楽は、ぼくがつくったわけじゃないのですから。

たくさんの方の患者たちが赤いソファのミュージック・シティの音楽に期待をよせています。それなのにこの社長ときたら、病気のひとたちからお金をもうけようとしているのです。

ピピルは契約書を社長にかえました。

「どうして？」と社長はおどろきました。「すくないっていうの？　じゃあ、15万円、これでどう？」

「まだまだ」とピピルは社長をからかいます。

「20万円！」と社長はおもいきっていいました。いったん契約さえむすんでしまえば、あとで何千万円ものお金がはいつてくることを、かれはわかっているのです。

「ぼくはお金なんていりません。たったひとつのもの、それだけをたしかめたかったのです」とピピルはいいました。

「たったひとつのもの？」社長にはピピルがなにをいいたいか、さっぱりわかりません。

「ぼくがたしかめたかったたったひとつのもの、それはあなたのこころです」といってピピルはわらいました。「失礼しました。ゆるしてください」

社長のほっぺたの肉がピクピクとかすかにうごいています。さすがに恥ずかしくなったようです。ピピルは、わざとらしく善人のようなふりをして、そのくせこころが欲でけがれている、このウソつき社長のことが大キライです。

パパとママは息子のこころの気高さにおどろき、そういう息子をもてたことをうれしくおもいました。どうして今まで気づいてやれなかったのでしょうか。ふだんはあんなにワソツキで、イタズラばかりしているピピルなのに、いざとなったらシッカリしているではありませんか。パパはおもわず息子にキスしました。

ルンシもお兄ちゃんにこころの底から感心しました。

「きみはこの音楽をひろめる気がないのかい？」と社長はまだあきらめていないようです。

「もちろんひろめるつもりですよ！　しかし売りものではなく贈りものとして！　無償で人類にプレゼントします！」とピピルは宣言しました。

「そんな」と社長はガックリ。何千万円ものお金が目まえから消えてしまい、くやしそうに口をゆがめています。

社長が玄關からでたとたん、それを押しのけるように白髪の老人がはいってきました。

「わたしは音楽大学の教授だ」とまず自分の身分を明らかにしました。この教授はたいへん権威のあるひとです。芸術がわかっていないとか、学歴がないとか、新聞でピピルのことをさんざん攻撃したひとです。

「わが大学はピピルくんを破格の待遇で学生としてむかえるつもりだ」と教授は真剣な顔でいいました。

「でも、ぼくは楽譜がよめませんよ！」とピピルはいいました。楽譜がよめないものを音楽大学に入れるなんて、すごくおかしいとおもいます。

「それでもかまわん！」と教授はキッパリといいました。

どういうこと？　ピピルにはまったく理解できません。頭の回転がはやいルンシは、ピピルの耳もとで「お兄ちゃんを入学させてから、この学生はわれわれがそだてたんだっていうつもりなのよ」と小声でささやきました。

ピピルはすっかり理解しました。どういう大学をでたかっていう学歴なんて、それこそ一文の値打ちもないのです。どんなに学歴がすごかったって、ろくに仕事ができなければ、そんな学歴なんてゴミといっしょです。ちゃんと仕事ができさえすれば、なんにも学歴がなくなっても、仕事をしたということがその人間を証明するのです。

「ありがとうございます。でも、おことわりします」とピピルはていねいに教授にいいました。

教授は顔を赤くしました。かれは自分が「教授」という肩書きにこだわって、これまで過去のひとの知識をなぞるばかりで、なにひとつ自分ならではの新しいものを生みだしてこなかったということに気がつきました。自分はこの子どもにも負けているんじゃないだろうか教授は感じていました。

夜になり、これからどうするつもりだ、とパパは息子にたずねました。

「ちがう種類のガンをなおすための音楽をつくって、10本くらいのテープに録音したら、それを赤十字社に無料でく

ばるつもりです」とピピルはこたえます。

「どうやって録音するんだ？」とパパ。

「それは秘密。パパにも教えられない。お願いだから、もうこれ以上そのことはきかないで」とピピルはいいました。

わかった、とパパはうなづきました。今日の出来事とおして、かれは息子のことがよく理解できました。これまで知らなかった息子のいろんなことが、はじめてわかったような気がします。

「パパがテープを買ってこよう。何本くらい必要かな？」とパパはピピルを手伝ってくれようとしています。

「ママにきいてみて。ガンの種類のぶんだけのテープがあるといいな」といってピピルはママのほうをみてわらいました。

ママはさっそく医学書をしらべにゆきました。

赤いソファのミュージック・シティは、ガンのちがう種類のぶんだけの、ちがう音楽をつくってくれました。その音楽は、何百万人、何千万人という患者のガンをなおし、かれらに安らかな暮らしをあたえました。

全世界のひとびとは、赤いソファのミュージック・シティの音楽に身をひたすことによって、こころ楽しく生きてゆくことのよるこびを味わい、さらに豊かな生活をもとめるようになりました。

その音楽がどこからやってきたのか、だれが作曲したのか、これまでも、これからも、ずっと謎のままです。

2 名画騒動

1

国際空港はものものしく警備されています。無線機を手にもった警察官がいたるところにウロウロしています。警告灯をつけたパトロール・カーがつぎからつぎへと駆けつけてきます。

空港をおとずれた旅行者たちは、今日はきっと外国の国家元首をのせた飛行機がやってくるにちがいないとおもいました。

いろんな事情に通じているひとは、これはどうも怪しいと感じていました。空港のまわりに外務省の車が1台もみあたりません。そうかとおもうと文化庁の車がなんと8台もあつまってきていて、お日さまのしたで1列にならんでいます。

機体にまぶしく光るマークがえがかれたジャンボ・ジェットの専用機が、いましも滑走路にすべりこもうとしています。すさまじい自然の慣性の法則をうちやぶるようにして、巨大な機体がゆっくりと舞いおりてくるさまは、まるで巡洋艦が港にはいってくるようです。

警察官たちはおそろしくピリピリしています。かれらの目はそこらじゅうを油断なくみまわっていて、空港にいる旅行者をひとりのこらず衣服のなかまで透視しようとするかのようです。

専用機がゆっくりと着陸するやいなや、手に武器をたずさえた兵士たちがいっせいに機体をとりかこみました。兵士たちは、ひとりひとり武器をかまえ、機体を背にして、専用機のまわりにズラリとならんでいます。

装甲車が5台、専用機にちかづいてきました。

文化庁の役人が専用機のタラップからおりてくる外国人と挨拶をかわしています。それと同時に、専用機の貨物室から箱がとりだされ、専門家たちが丁寧にチェックしたうえで、それを装甲車にはこびこんでいます。

F国には世界的に有名な24枚の名画があります。それら24枚の名画はどれもみな人類の歴史における最高の画家によってえがかれたものなのです。どの1枚もすべて値段がつけられないくらい価値のある宝物なのです。そういう名画のなかの一部を国外にもちだして展示してよいかどうかということについて、F国の議会において3年間にわたって激しい論争がくりひろげられ、ようやく承認されたのです。

このたび8枚の名画が国外で展示されることになりました。展覧会を主催する国は「絶対に安全であることを保証する」と胸をたたきましたが、それでもF国は心配でたまりません。

名画をはこぶための装甲車は、実弾をこめた銃をかついだ兵士や警察官たちに護衛されながら、飛行場をはなれ、国家美術館へとむかいました。

きたるべき展覧会のために、国家美術館は2年もまえから改装工事をおこなってきました。展示会場には最高の盗難防止システムがほどこされました。館内の温度と湿度はつねに一定にたもたれており、その誤差はほとんどゼロだそうです。

入場料はとんでもなく高いにもかかわらず、チケットを手に入れるためには美術館の切符売場に真夜中のうちからならばねばなりません。おまけに入館するさいには「カバン厳禁・コート厳禁・カメラ厳禁」という非常にきびしい条件をまもらねばなりません。美術館はもうちょっとで「目玉以外のからだの部分はすべて入館禁止」という規則をつくるどころでした。

午前中の授業がおわり、ピピルはごはんを食べに家にかえってきました。郵便受けをあけて新聞をとろうとしたら、パパにあてた1通の封筒がはいっていました。

パパが封筒をひらいてみると、なかには市の美術家協会からおくられた名画展覧会の入場券がはいっていました。

「その展覧会のチケットって、たしかすごく手にはいりにくいはずよ。いつの日になってる？」と食卓のそばからママがたずねます。

パパがチケットの裏面をみていると、「おやおや、今日の午後だ」

パパとママは残念そうに首をふりました。

ピピルの家はちょうどいま引越しの準備をしていて、パパとママは今日の午後いっしょに新しい家にゆき、室内装飾の業者とうちあわせをします。

「ぼくがゆくよ。ムダにするともったいないじゃん」といってピピルは茶碗をおき、パパの手からチケットをとりました。

「午後の授業はどうするの」とママは反対します。

「こういう展覧会をみるほうが、授業なんかより、うんと勉強になるよ」といってピピルは助けをもとめるようにパパのほうをみました。

「それもそうだ。じゃあ、いってきなさい」芸術の香りをかぐことは人間の成長にとって大切なはたらきがあるとパパはおもっています。

「あたしもいきたい！」とルシシ。

「チケットは1枚しかないから、コインをなげてきめよう」とピピルが提案します。

ほかの方法がおもいつかないので、しょうがなくルシシは同意しました。

「表か裏か、どっちにする？」コインをなげるとき、ピピルはお兄ちゃんらしい度量をあらわして、ルシシにさきにえらばせてあげます。

「表」とルシシ。

いつものコインなげどおり、ピピルの勝ちになりました。

「バイバイ。あとで感想を教えてあげるね」というとピピルはまだごはんを食べおわっていないのに、チケットをもって家から駆けだしてゆきました。

ルシシはコインを何度もひっくりかえしてみましたが、どうしても怪しいところはみつきませんでした。

2

その絵をひと目みたたん、ピピルのからだじゅうの血はたちまち固まってしまいました。世界はすっかり消えてなくなり、ただピピルと絵だけが存在しているかのようです。

その油絵は17世紀のヨーロッパの偉大な画家がえがいたものでした。暮れのこった夕陽が、ちょっと風変りな木づくりの小屋を、まんべんなく照らしています。風がゆるやかに吹いていて、木の葉がしずかにゆれているようです。小屋のそばの草のうえに、うっとりするくらいの美少女がすわっていて、そのかたわらには牧羊犬が腹ばいになっています。

ピピルの心臓をギュッと締めつけたのは、その美少女と牧羊犬でした。

これまでも絵にえがかれた女の子はいっぱいみたことがあります。これほどまでにピピルのところをひきつけた美少女はありませんでした。絵のなかの女の子をピピルの目がとらえた瞬間、かれの脳ミソと全身をつらぬいて、いままで感じたこともないような衝撃がはしたのです。

しかも不思議なことに、ピピルは自分がこの女の子のすべてことをわかっているような気がしたのです。そして女の子もまたピピルのことをわかってくれていることが、その目から伝わってきました。それは恋愛というのともちがって、自分のなかに相手がい、相手のなかに自分がいるといった、まるで電流がかよあうような感じでした。

目はこころの窓だといいますが、このときピピルはこころの底からこの言葉を信じられるような気がしました。

ピピルはこの絵のまえで2時間くらいたちづけていました。そしてその女の子といっぱいおしゃべりしました。もちろん言葉なんて使わずに。

閉館をしらせるチャイムが鳴りました。ピピルは、3歩あるくたびに1回ふりかえりながら、展覧会場をあとにしました。

そとはすっかり夕暮れです。ピピルは胸がどうしようもなくモヤモヤとしたので、美術館のちかくの公園にゆき、ベンチに腰をおろしました。

そのとき1枚の木葉が、ピピルの鼻先をかすめて、ひらひらと地面におちました。ピピルはその木葉をボンヤリとながめていました。

だれかがピピルの肩をたたきました。

ふりかえったピピルは、息をのみました。

そばにいたのは絵のなかの女の子です。牧羊犬もそばにいます。

ピピルはあわててベンチからたちあがりました。そして女に子のほうをむきましたが、どうしたらよいのかわかりません。

「こんにちは。あたしはサリー」といって女の子は手をさしだしました。

「サリー……」ピピルの頭のなかでは、この名前がグルグルとまわっています。

「さっきはあんなにたくさんおしゃべりしたでしょ。そうじゃない？」とサリーは手をさらにピピルのほうにのばしてきました。

たしかに油絵のなかの女の子です！

ピピルはドキドキしながら女の子の手をにぎりました。

「お名前は？」とサリー。

「ピピル」ピピルの顔はちょっと赤くなっています。

「素敵なお名前ね」といってサリーはほほえみました。その笑顔がまたすばらしく魅力的です。

ピピルは牧羊犬の頭をなでました。牧羊犬もうれしそうにピピルに尻尾をふりました。

「どうやって絵からぬけてきたの？」とピピルはサリーにたずねました。

「あたしにもわからないの。もともとあたしには意識はなかったんだけど、あなたの目ってすごいね、あなたの目につめられているうちに、だんだん感覚がついてきて、そのうちに身体がうごくようになったの」とサリーはおもいだしながらいきました。

「じゃあ、あの絵のなかはカラッポになっちゃったの？」とピピル。

サリーは肩をすくめます。

「きみはまたあの絵のなかにもどっちゃうの？」とたずねるピピルのところは複雑でした。サリーにはいなくなってほしくないけど、とはいえ名画がどうなっちゃうのかも心配です。

「いいえ、もどらないわ。あなたといっしょにいたいもの。それに、どうやったらもどれるのかしら？ こうやって生きている人間を、あなたは絵のなかにもどせる？」とサリーはたずねました。

美術館にとっては気の毒なことになったなあ、とピピルは1分間くらいは同情しましたが、すぐにうれしくてウキウキしてきました。

「あなたの国がみてみたいわ。いろんなところにつれて行ってね」とサリーはいいいます。

「うん。ぼくの国はとっても広いんだ。いっぱい案内してあげるよ」ピピルはすぐにもサリーをつれて国じゅうの名山や大河をみせてあげたくてたまりません。

「ところで、あたしたちいつまでここにいいのかしら。あなたの家につれていってくれる？」とサリーはピピルにいました。

ピピルはようやくサリーの住まいをどうするかという問題に気がつきました。

あらためて考えてみると、サリーをこのまま家につれていってよいものやら、ピピルはすこし不安になってきました。サリーを名画からひきはなしてしまうことで、あとでどんな面倒なことになるかということも気になりますが、それよりも家のない女の子をつれてゆくということのほうが、ピピルにとってはよほど大問題です。

パスポートや身分証明書をもっていないサリーは、そもそもホテルにはとまれません。しかもサリーのいでたちは17世紀のヨーロッパのもので、ものすごく人目をひきます。いまは夕方だからいいけど、もしこれが昼間だったら、道ゆくひとにとりかこまれてしまうにちがいません。

「もしかしたら、あなたには家がないの？」サリーはどうやらピピルが悩んでいるのに気づいたようです。

「あるけど……」とピピル。

「お父さんとお母さんにいじめられてるの？」

「そんなことはないけど……」ピピルはなんていえばよいのか困ってしまいました。

「じゃあどうしてつれていってくれないの？」とサリーはさっぱりわけがわからないという顔でピピルをみつめます。

「なんていうかさ……ぼくとしてはさ……」ピピルはどうしたらよいかわかりません。

「あたしたちって友だちでしょ？」サリーにもすこし事情がわかってきました。

「うん」とピピルはうなづきます。

「あなたはあたしといっしょにいたい？」サリーはたずねます。

「もちろん」とピピルは強くうなづきます。

「だったら……」サリーは両手をひろげ、ピピルに返事をうながします。

21世紀の自分のほうが17世紀の女の子よりもウジウジしているなんて、とピピルは恥ずかしくて穴があったらはいりたくなりました。

そのときピピルは新しい家のことをおもいつき、目がキラリとかがやきました。

新しい家はまだ内装工事をやっている最中ですが、そのうちのひと部屋だけは工事がおわっていて、そこなら泊まることができます。

ピピルはちょうど新しい家の鍵をもっていました。

「ぼくの家につれてゆくよ」とピピルはサリーにいいました。

サリーはにっこりしました。

サリーをこのままバスにのせるわけにはゆかないことはハッキリしているので、ピピルは手をあげてタクシーをとめました。

タクシーの運転手はサリーと牧羊犬をみて目をまるくしています。

ピピルは行く先を運転手につげました。

サリーはどうやらはじめて自動車にのったようです。窓のそとをみたかとおもうと、運転手のほうをみたりしていません。

「これはなに？」サリーはピピルにたずねました。

「車だよ」とピピル。

「だれがひっぱっているの？」

「エンジンだよ」

「エンジン？ ずいぶん力持ちなのね。なにじん？」

「なにじんって、人間じゃないよ。エンジンっていうのは機械なんだ」といってピピルはわらうのをガマンします。

タクシーの運転手はうしろの座席のふたりの子どもの会話をずっと気にしているようです。

新しい家に着きました。ピピルはポケットからお金をだして運転手にわたしました。それは教科書を買うためにママからもらったお金でした。

運転手の目はピピルとサリーが建物の入り口にはいってゆくのずっとみつづけていました。

3

ピピルの新しい家は4LDKのマンションです。玄関のまえには室内装飾のための資材がおかれています。

「新しい家なのに、どうしてこんなに散らかっているの？」とサリーはたずねます。

「内装の工事をしているんだ。ぼくとしては室内をやたらと装飾するには反対なんだけどね。せっかく新しい部屋になるっていうのにさ」とピピルはいうと、さらに言葉をつづけました。「ぼくはパパにいつかやった。たとえば台所だけど、なにかを壁にはりつけることは重要じゃないってね。重要なのは、鍋になにをいれるかだよ。本棚をいくつもっているかなんていうのも重要じゃない。重要なのは、どれくらい想像力をもっているかっていうことさ。床のうえになにを敷くかなんてことも重要じゃない。重要なのは、歴史のうえにどんな足跡をのこすかっていうことだ」

「で、パパはなんていったの？」と聞いてサリーは腰をまげてわらいました。

「バカげたことをいうんじゃないってさ」

「あたしはあなたのいうとおりでとおもうわ」とサリーはピピルの味方をします。

「ハッキリいって、部屋のなかを飾りたてるのって、他人にみせるためだよ。だれもみな自分はよい家に住んでいるってことを自慢したいんだ。でも、その室内装飾のための資材はみんな化学でつくられたものばかりで、それが古くなると空気のかなかに有害な物質をまきちらしたりして、ひとの健康に害をおよぼすんだよ。自分の健康をそこなうまでして他人に自慢したがるなんて、得よりも損のほうが大きいとおもうんだ」ピピルはサリーに味方してもらっ

たもんで、ずいぶん張りきっています。

サリーのほうもピピルはなかなか分析する力があるし、それに洞察もとても深いと感心しています。

「この部屋はもう飾りつけもおわっていて、家具もそろっている。きみはすこし休んだほうがいいよ。ぼくは妹のところに行って、きみが着られる服をさがしてくる。その恰好のままじゃ、そとにでられないからさ」とピピルはいいました。

「いってきて、あたし待ってるわ」さっきタクシーのなかでピピルからいろいろ事情を説明してもらったので、サリーはいま自分がいるピピルの世界のことがわかってきていました。

ピピルは家にかえりました。家族はちょうど夕食の支度をしているところでした。

「展覧会はどうだった？」とキッチンから顔をだしてママがききました。

「よかったよ」とだけピピルは返事をして、すぐさま妹の部屋にゆきました。

ルシシは机にむかって宿題をしています。

部屋にはいると、ピピルはドアをしめました。

ルシシはふりむいてピピルをみましたが、あっさり無視して、また勉強にもどりました。

「まだコインなげのことを気にしてるの？ それより頼みがあるんだけど」とピピルはわらいながらルシシのかたわらのソファにすわりました。

「お兄ちゃん、ズルしたでしょ」とルシシ。

「まさか。天に誓ってやっていないよ」とピピル。

「だったらどうしてお兄ちゃんは1回も負けないの？」とルシシはたずねます。

「とっておきのコツを教えてやろう。ぼくはコインをなげるまえに、こころのなかで「勝つぞ、勝つぞ、勝つぞ」とくりかえすんだ。だから勝つんだよ」とピピル。

「ウソばかり」とルシシは信じません。

「これはこころの魔力っていうんだ。ウソだとおもったら、今度やってごらん。きっと勝つから」といってピピルは胸をたたきます。

「でも、あたしだけじゃなくて、お兄ちゃんもこころのなかで勝つぞってくりかえすんでしょ？」とルシシはききます。

「そうになったら、どっちのほうが自分のこころを信じているかっていう問題になるな」とピピル。

ルシシは半信半疑でうなづくしかありません。

「で、頼みってなに？」とルシシはたずねました。

ピピルは午後におこった出来事をひととおりルシシに説明しました。

「ホント？」と聞いてルシシはピピルの目をみつめました。

「ホントのホント」というピピルのからだからはホントだという雰囲気がただよってきます。

「するとその女の子はいま新しい家にいるってということ？」とルシシはまだ信じきれていないようです。

「うん」

「その女の子は17世紀の名画のなかからでてきたってわけね？」とルシシはわざと17世紀という4文字を強調してたずねました。

「そう、17世紀。いまから300年くらいまえだね」とピピルはキッパリといいきります。

「すごいじゃない。でも、すると政府はどうなるの？」とルシシがたずねます。

「政府？ 政府がどうかした？」とピピルにはさっぱりピンときません。

「名画のなかから女の子が消えちゃったら、政府はF国にたいして責任をとらなきゃならなくなるんじゃないかしら？」とルシシはいいます。

「べつに絵がなくなったわけじゃないし、F国がちゃんと調査すればわかることだよ。それにあの女の子は自分の意志で絵のなかからでてきたんだから、政府なんて関係ないさ。ぼくたちの世界が楽しそうだとおもったからだよ！」とピピルはちょっと得意げにいいました。

「あらあら、そんなこといいのかしら。なんだかこの世界に素敵なひとがいるみたいじゃない！ 17世紀の名画のなかの女の子をひっぱってこれるなんて、そんなすごいひとにコインなげで勝とうとおもうなんて、あたしがバカだったわ」とルシシは得意顔のピピルに皮肉をいいました。

「おまえの服を借りたいんだけど、いい？」とピピルはたずねました。

「そんなことより、パパとママにちゃんといってほしいよ」とルシシはいいます。

「ダメだよ。きっと叱られちゃうよ」とピピルはあわてて反対しました。

「わるいこともしていないのに、なにビビってるの！ 盗んだり、奪ったりしたわけじゃなくて、女の子が絵のなかから勝手にでてきちゃっただけなんですよ？ いまのうちにパパとママにいいおかないと、あとで面倒なことになったとき、どうしようもなくなっちゃうわよ。それにその女の子を新しい家にいつまでも隠しておくわけにもいかないじゃない！ 昼間に内装工事のひとがきてるあいだ、女の子をどこに隠しておくつもり？」ルシシはいろんなことを全部しっかりと考えています。

ピピルもパパとママにちゃんと話すしかないかと納得しました。

家族の全員がテーブルをかこんで食べはじめました。

「あら、ピピル、どうして食べないの？」とママは息子がなんにも口にはこぼうとせずにそわそわしているのをみてたずねました。

「ぼく……」ピピルはルシシのほうをチラッとみました。

「またなにかイタズラをしたのか？」とパパはもう慣れっこという感じでいいました。

「いや……イタズラっていうか……」とピピルは口ごもります。

「あたしが説明するわ」というとルシシは茶碗をおいて、パパとママに美術館での出来事についてピピルにかわって説明しました。

以上、説明おわり、とルシシ。

パパとママは目をみつめあっています。それからふたりは同じタイミングでピピルのほうをみました。

目をあわせるのが怖くて、ピピルはうつむいています。そして叱られるのをじっと待っています。

ところが奇妙なことに、だれも一言もしゃべりません。叱りつけようかとおもったパパとママですが、ふたりはまた同じタイミングでおもいできました。ふたりがはじめてであったのは、じつは美術館なのです。ふたりともまだ高校生でした。

沈黙がつづきました。

なんとも気まずい沈黙です。

「これは厄介なことだ」とパパがようやく口をひらきました。「その女の子をF国にひきわたさねばなるまい」

「どうして？」とおもわずピピルがいました。

「絵のなかから女の子がいなくなったことを、政府はF国にどうやって説明すればいいんだ？」とパパはピピルにたずねました。

ピピルはなんにもいえません。

「提案なんだけど、これからサリーにあいにゆきましようよ」とルシシがいました。

パパがうなづきました。

ようやくピピルの家族にあえて、サリーはうれしそうです。

ピピルのパパとママはサリーという女の子がものすごくかわいいことにおどろきました。そしてルシシもサリーのことがとても好きになりました。

「サリー、きみは美術館にもどるべきだってパパはいうんだ」とピピルはサリーの耳もとでささやきました。

「どうして？」とサリーは不思議そうにします。

ピピルはその理由をサリーに伝えました。

「あたしは自分の意志でやってきたのであって、あなたが絵のなかからあたしを盗んだわけじゃないのだから、なんの責任もないとおもうわ！」とサリーはきっぱりといました。

「われわれの政府の名誉のことをおもっているんだよ」とパパはサリーに説明しました。

「あなたたちの政府の名誉と、いったいどんな関係があるっていうの？」とサリーはまったく理解できないという顔をしました。「だって名画はなくなっていないんだもの！」

「サリー、おちついて」とルシシはなだめました。

「あたしは絵にはもどらないわ。あなたたちとはなれたくない。ピピルとはなれたくない。あなたたちといっしょにいたい。あなたたちの家庭にはいりたい。あたしの気持はそうなのに、ふたたび絵のなかにもどして、あたしを命のない人形にしてしまうつもりなの？」そういうとサリーはしくしく泣きはじめました。肩がゆれています。

サリーの涙をみて、ママの気持がやわらかくなりました。そして夫にいます。「この子のいうことにも一理あるわ。それにこうして生きているんだから、どうやってまた絵のなかにもどすつもり？」

「パパ、この子をおいてあげましようよ！」とルシシもお願いしました。

パパは眉をひそめて部屋のなかをいったりきたりしています。

「よし、とりあえずこの子をおいてあげることにしよう。そして事件のなりゆきを注意しながらめながら、どうすればよいかを考えよう」こんなかわいい女の子をまた絵のなかにもどすのが、パパもかわいそうになってきたのでした。

ルシシは家からもってきた服をサリーに着せてあげました。ママはサリーの着ていた服をタンスのなかにししまいました。

「さあ、じゃあ家にかえろう。サリーと牧羊犬においしいものを食べさせてあげなきゃな」とパパ。どうやらパパはこの威風堂々とした牧羊犬のことがひどく気に入ったようです。

4

政府は美術館にたいして「閉館したあとは5分ごとに警察官が館内を巡回しなければならない」というきびしい規則をさだめていました。

美術館のまわりにも警察官が3歩ないし5歩という間隔でびっしりと配備されています。さらに警察のやとった飛行船が美術館の上空に浮かんでいて、美術館のまわり3キロ以内のうごきを監視しています。

4名の拳銃をもった警察官が2列にたんで美術館のなかをまわって名画の数を確認しています。5分ごとの巡回の、ちょうどいま今晚の15回目がおわりました。

名画は1枚もなくなっています。

かれらが展示会場をはなれようとしたとき、突然、ひとりがちどまりました。

「どうした？」とリーダーがたずねました。

「ちょっと気になるんですよ、あの絵が」とその警察官はいます。

「どの絵だ？」とリーダーの顔に緊張がはしります。

その警察官は仲間を気になっている絵のところにたつてゆき、そのまえにたたくみました。

「この絵がどうかしたのか？」といいながらリーダーは絵を固定したネジをしらべたりしましたが、なんにも異常はみつかりません。

「この絵のなかには女の子がいて、それに犬もいたはずなんだけど、なんで消えてしまったのだろう？」とその警察官はいいます。

「なにバカなことをいってるんだ。そんなことがあるわけじゃないか！」とリーダーはいいました。かれはただ絵の枚数をしらべるだけで、いちいち絵の内容までは気にしていなかったのです。

「いや、たしかにこの絵のなかには女の子がいたような気がする」ともうひとりの警察官がいいました。

「ほんとうか？」とリーダーはふたりの部下の顔を見つめました。

「そんな気がするんです」とふたりは自信なさげにいいます。

リーダーはベルトにつけた無線機で連絡をとりました。

30秒後、美術館の専門家がはしってきました。

その絵のほうに目をむけた瞬間、専門家はたちまち両足の力がぬげ、そのまま地べたにへなへたと尻モチをついてしまいました。

「教授、大丈夫ですか？」リーダーはてっきり教授が脳卒中にでもなったのかとおもいました。

「絵が……絵が……絵がとりかえられている」と教授は壁にかけられた絵を指さしてさげびました。

「まさか……」リーダーはおどろいて目をむいていましたが、やがて警笛をひっぱりだし、めったやたらに吹きだしました。

警笛の音をきいた警備センターのひとはすぐさま警報機を鳴らしました。

耳をつんざく警報機の音が、まるで野生の馬がそこらじゅうを駆けまわるように、美術館のガランとした展示会場のなかに響きわたります。

騒ぎをきいて駆けつけてきた展覧会の責任者である文化庁の役人は、絵をみたとたん魂がぬけたように口をポカンとあけているばかりです。

「警戒！ アリ1匹ここからだすな！」と名画を警備する責任を負っている警察の副長官は大声でわめきました。

警察官や兵士によって、まさに水も漏らさないといった感じで、美術館のまわりはびっしりと包囲されています。

空港も閉鎖されました。自動車も運休になり、道路も封鎖されました。

このたびの展覧会にかかわっている偉いひとたちは、ひとりのこらず自宅からよびつけられ、ただちに現場に駆けつけました。

だれもみな名画をみながら、ため息をつくばかりです。

「このドロボウは頭がくるっているんじゃないか。1枚の絵を盗んで、かわりに1枚の絵をかけてゆくとは、なんてふざけたやつなんだ！」

「こんな大きな絵をどうやって会場にはこびいれたんだ？」

「おそらく内部にスパイがいるにちがいない」

F国から名画をはこんできた専門家は、警報機のけたたましい音でベッドからたたきおこされ、よろめきながら展示会場にやってきました。かれは名画をひと目みるやいなや、ひと声おおきく悲鳴をあげ、つづけて大声でののしり、そのうち怒ったり、泣いたり、怒ったり、泣いたりをくりかえして、いくらなだめてもおとなしくなりません。

F国の専門家が大使に電話で連絡すると、大使は車にもものらず、靴もはかず、裸足のままで美術館にはしってきました。

大使はこれで自分が大統領になる夢がぶっこわれてしまったと感じました。じつは来年のF国の大統領選に出馬するつもりで、そのためにかれはこの展覧会を先頭にたって推進してきたのでした。そんな時期にこんなことになってしまったら、大統領になるどころか、ヘタをすると町長の秘書にすらなれないかもしれません。

警察からは盗難の専門家たちがやってきて、きわめて冷静に、事件を検証しはじめました。現場をしらべ、証拠をおさめ、写真をとりました。

まもなく鑑識の結果がでてきました。この名画にはとりかえられたといういかなる痕跡もみられないということでした。

「そんなバカな」と大使はいい、「ありえない」と1000回もくりかえしました。

「ご覧ください。絵を固定したネジはいじられておらず、はじめに警察がとりつけたときのままの状態で、まったく異常はありません」と盗難対策の専門家はF国の大使にきっぱりといいました。

「わが国の専門家はどこだ？」と聞いて大使はふりかえりました。

F国から名画をはこんできた専門家は、まるでシャワーでもあびたみたいにボロボロと泣きじゃくっていましたが、あわてて涙をぬぐいました。

「きみが鑑定してみなさい。この絵はちゃんと本物か？」と大使は母国の専門家にたずねました。

専門家はポケットから虫眼鏡をとりだして、ぶるぶると手をふるわせながら、絵をじっくり検査しはじめました。

その目はだんだん大きくひらかれてゆき、つけていたコンタクトレンズが目からこぼれ落ちてしまいました。

F国の専門家はふりかえって大使をさがしました。

「わたしはここだ。で、どうなんだ？」と大使は専門家の表情がおかしいことに気づきました。

「本物です」と専門家は大使に耳打ちします。

「本物？」という大使は、気はたしかかと専門家の脈をはかろうとします。

「正真正銘の本物です」といって専門家は大使の手をふりはらい、自分は気はたしかだとアピールします。

「そうだとすると絵のなかの女の子と犬はどうなったんだ？」と大使。

「まったく謎です。こんな盗み方をするドロボウはみたことがありません。絵にえがかれたものの一部だけを盗んで、しかもその痕跡をのこさないなんて」といって専門家は絵のなかの女の子と犬がえがかれた箇所をさわってみますが、まったくキズひとつありません。

大使は文化庁の役人にむかっていいました。「かならず2日のうちに事件を解決し、わが国に名画をかえしていただきたい。さもないとあなたの国に全責任をとってもらうことになる」

F国の専門家がすかさずつけくわえました。「ほかの名画についても展示は中止します。わが国の警察がそれまで責任をもって警備します」

あきらかに無茶だとはおもいましたが、なんにも文句がいえません。

政府のほうも警察にたいして無茶な命令をくだします。「24時間以内に事件を解決せよ」

警察の長官は部下たちにいいました。「この事件を解決したものに、長官の座をゆずる」

5

警察のなかで「名探偵」というアダ名でよばれている捜査隊長の陳さんに事件を解決するという重責がまかされることになりました。かれに与えられたのは、たったの24時間だけです。

陳さんの頭はじつにハッキリしていて、10分ほど考えてから、部下に命令しました。「当日の監視カメラの映像をみせてくれ」

名画が展示されているあいだ、すべての絵の正面の壁には監視カメラがつけられていて、ずっと撮影しつづけていたのです。

陳さんはタバコに火をつけ、それをくゆらせながら、目をほそめ、画面にあらわれてくる入場者たちをじっくり観察しはじめました。

陳さんが事件を解決するためにもちいるのは、なにはさておき直観です。かれは得意の直観をもちいて、大勢のなかからひと目で犯人を見つけだします。すべては直観なのです。

ところが今日の陳さんには、画面のなかのすべての人間が犯人のようにみえるのでした。

「こいつに注意しろ」と陳さんは画面のなかの人物を指さして部下にいいます。

30分もたたないうちに、陳さんは70人以上の容疑者をたてつけに指さしました。部下たちは、どうしてよいかかわらず、たがいに顔を見あわせています。陳さんの直観はどうやら役に立たないようです。

突然、陳さんは鼻のさきちょを画面にくっつきそうなくらい近づけました。名画のまえにたつままうごこうとしないピピルをみつけたのです。

「この男の子は、盗まれた名画のまえに2時間もたちっぱなしだぞ！」と部下にいいました。部下たちも画面をとりかこみます。

「テーブルを巻きもどして、もう1回みてみよう」というと陳さんはタバコを灰皿にぐりぐりと押しつけました。

捜査員の全員が目まばたきひとつせず画面にそそがれています。

夢のなかをさまよっているようなピピルの顔がうつっています。

絵のまえに2時間もたちっぱなしだということは、よっぽどその絵に夢中になっているにはちがいないけれども、まさかこの男の子が絵を盗むなんてことはありえないと捜査員たちはおもいました。だって年齢からしても不可能です。

陳さんは眉をしかめてピピルをみえています。とても苦しそうな表情です。

ドン！ 陳さんの手が机をたたきました。

部下たちはいっせいにたちあがりました。事件を解決するヒントがみつかったんだ、とかれらにはわかっています。

「この男の子をさがしだせ！」陳さんは食いしばった歯のすきまから言葉をしぼりだしました。かれの直観は、この画面にうつった男の子が名画の盗難になんらかの関係があると告げたようです。

部下たちはさまざまな手段によってピピルの素性を明らかにしようとしてきました。

その日の夜、サリーを歓迎するために、ピピルの家はちょっとしたお祝いムードでした。

ママはサリーのためにたくさんのご馳走をつくりました。パパは牧羊犬のためにおいしいドッグフードをあげました。

サリーは生まれてはじめて食事ということをして、生きているということのよろこびを感じました。

食べているあいだじゅう、サリーはつぎからつぎへと質問しつづけました。みんなはかわるがわるそれに答えてあげました。明日、自分がガイドになって、サリーのために町じゅうの観光地を案内してあげよう、とパパは約束しました。

ピピルの家族はみんなサリーのことが大好きです。それに牧羊犬のことも。

「これはなに？」とサリーはテレビを指さしました。

「テレビよ」とルシシは牧羊犬を抱っこしながらいいました。

「テレビ？」と聞いてサリーは首をかしげ、「ごはんをつくるの？」

みんな大笑いしました。

ピピルはテレビをつけてあげました。

画面にひとりの女性アナウンサーがうつり、その頭のわきには「今晚のニュース」と書いてあります。

サリーは目をまるくしてみえています。

女性アナウンサーがあるメーカーの自動車を宣伝しているところに、だれかが1枚のメモをわたしました。そのメモをみたたん、ほがらかだった女性アナウンサーの顔がいきなり暗くなりました。その表情からして、わるいニュースだろうということが予想されました。

「ただいまはいつてきた緊急速報をおとどけます」と女性アナウンサーはメモを読みはじめました。「わが国でもよおされているF国の名画展覧会ですが、明日から展示が中止されることになりました。1枚の絵が盗難にあったことが原因のようです。手もとの資料によれば、その名画は5000万ドルを超える価値をもっており、F国の国宝のひとつと

ということです。ある情報によれば、F国はわが国にたいして厳重な抗議をおこなったそうであり、またべつの情報によれば、警察は24時間のうちに事件を解決するべく全力をあげて捜査しており、手がかりをもつ市民はどうか情報を提供してほしいとよびかけているとのこと。この事件はわが国の信用にかかわる問題です

お祝いムードは一瞬にして冷めきってしまい、ピピルの家族全員のまなざしがサリーと牧羊犬にそそがれます。

「こうなっては政府に知らせるしかあるまい。国の信用を傷つけるわけにはいかないからね」とパパはゆっくりと一言ずつ囁みしめるようにいいました。

「あたし、絵にもどりたくない」ピピルのパパのいうことは理解できましたが、サリーはいいました。「みんなといっしょにいたい」

パパはどうしても「きみは絶対にもどるべきだ」ということを口にだせないでいましたが、かといって政府にこのことを報告しないと事件が解決しないだろうし、また今後ともこの国でいかなる国のいかなる展覧会であろうとも2度もよおすことができなくなるだろうということも想像していました。

しかし、もし報告したらサリーの運命はどうなってしまうのでしょうか？ いまはすでに生きた人間であるサリーは、自分の生きてゆく道をえらぶ権利もっています。

つらい選択でした。

「サリーはだれにもわたさない」といってピピルはたちあがりました。「サリーはもう名画の一部分なんかじゃなくて、ちゃんと命をもった人間だ。まるで物みたいにあつかっちゃいけないよ。サリーは自分の運命をきめる権利もっている。たしかにあの名画はF国の国宝かもしれないけど、サリーはまちがいなく自分の望みによって絵からでてきたのであって、ドロボウによって盗まれたわけじゃない。F国はこの事実をちゃんと考えるべきだよ」

パパは息子のいう理屈はまったく正しいとみとめざるをえませんでした。たしかにそのとおりで、サリーはもう絵ではなくて、生きている人間です。

玄関でだれかがドアをノックする音がしました。

のぞき窓からそとをのぞいたママは、跳びあがるほどビックリしました。

「警察よ」とダイニングルームにもどってきたママはいいました。

「サリー、牧羊犬をつれて、ぼくの部屋に隠れて」とピピル。

サリーと牧羊犬はすぐさまピピルの部屋に身をひそめました。

パパは呼吸をととのえ、ドアをあけました。

「ピピルくんのお宅でしょうか？」ドアのそとの捜査隊長の陳さんは丁寧にたずねました。

「そうです。どうかしましたか……」とパパはどういう用件かということをつたねました。

陳さんは名刺をだしてピピルのパパにわたしました。

「警察の方ですか。ピピルにどんなご用でしょうか？」パパはこの捜査隊長はどうしてここがわかったのだろうかと感じていました。

「ちょっとかがいたいことがありますね」と陳さんはにこやかにいいました。「ピピルくんはご在宅でしょうか？」

「おります。どうぞ」とパパはしょうがなく陳さんを家にいれました。

陳さんはほかの警察官たちに廊下で待機するようにいいました。

「きみがピピルくんだね？」と陳さんはすぐにピピルに気づきました。

ピピルはうなづきました。

「きみは名画が盗まれたことを知っているかい？」と陳さんはピピルにたずねました。

「盗まれたわけじゃないでしょ？」ピピルは「盗む」といういい方が耳ざわりでなりません。

「ほお、どういうことかな？」と陳さんは興奮しました。どうやら捜査の方向はまちがっていなかったようです。

「それは……」ピピルはどういえばよいのかわからなくなってしまいました。

「それはこういうことなのです」とパパはこの陳さんが腕利きの名探偵であり、どうやらピピルと名画盗難とのあいだには関係があると疑っているらしいことに気づきました。そこでパパはいっそのことサリーが絵のなかからやってきたということを陳さんに洗いざらい打ち明けてしまったほうがよいと考えたのでした。

家族全員が陳さんの反応をうかがいました。

陳さんはいくと、まるでアラビアンナイトの物語をきかされたような顔をしています。

ピピルが名画をみていたときの夢うつつの表情をおもいだし、陳さんはこの話を信じることにしました。

「サリーはどこです？」と陳さんはたずねました。

「サリーをつれてきなさい」とパパはピピルにいいました。

「パパ！」とピピルは抗議しようとしてました。

パパはピピルの肩をたたいて「この探偵さんは信用できそうだ。サリーをつれておいで」

陳さんはピピルをみてうなづきました。

ピピルはだまったまま陳さんの目を30秒間じっとみつめ、それから部屋のほうにはしってゆきました。

6

サリーと牧羊犬が陳さんのまえにやってきました。陳さんはポケットから名画の写真をとりだしました。

サリーはたしかに17世紀の名画にえがかれた少女です。

「いっしょにきてください」と陳さんはサリーにいいました。

「パパ！」ピピルは大声でさげびました。ダメされたとおもいました。

「ピピルくん、誤解しないでほしい。わたしはサリーをF国の大使のところへつれてゆきただけだ。F国の大使はわが国にたいして2日のうちに事件を解決しろと要求してきた。そうしなければ、わが国が責任をとらされることになる。とりあえず大使にすべての真実を説明し、それから国際社会にむかって事情をしっかりと公表して、そのうえでサリーがどうしたいのかを考えてあげたいとおもう。どうかわかってほしい、F国は人権を尊重する国であることを」と陳さんはピピルにいいました。

「じゃあ、ぼくもサリーといっしょにゆきます」とピピルはまだまだ安心していないようです。

「いいとも」と陳さんは同意しました。

ピピル、それにサリーと牧羊犬は、陳さんといっしょに家をでました。

ルシシとパパとママは、一晩中、一言もしゃべらず、まんじりともせず待ちつづけました。

F国の大使館。

黒塗りの車が3台、大使館の敷地にはいつてゆきました。

守衛が大使に名画の盗難事件が解決したことを伝えたと、文化庁の役人がすぐに駆けつけてきました。

大使は2段飛ばし3段飛ばしで転がるように階段を駆けおり、広間に飛びこんできました。

「絵は？」と大使はまっさきになげました。

文化庁の役人が陳さんに目くばせします。

陳さんはサリーと牧羊犬を大使のまえにつれてゆきました。

「どういうことだ？」と大使はげんなりした顔をします。なんで女の子と犬をつれてくるのかさっぱりわけがわかりません。

陳さんはひととおり事件のいきさつを説明し、それからピピルを大使に紹介しました。

「からかうんじゃない！」という大使の首には青筋のようにふくらんだ血管が浮きだしてきて、そのままピクピクとふるえています。どうやら生まれてはじめてプライドがひどく傷つけられたと感じたようです。

「これは事実です」と陳さんは冷静にいいました。

「ふざけるな！」と大使はわめきました。「メチャクチャだ！ デタラメだ！ とんでもない！ けしからん！…」

「大使、おちついてください。信じられないのであれば、どうぞ名画の写真とくらべてみてください」というと陳さんはポケットから写真を取りだし、大使にわたしました。

大使はその写真をビリビリとひきちぎりました。

陳さんは大使を拳銃でもってパンと撃ってやりたいくらい腹がたちました。

そこに事態をききつけたF国の専門家がやってきました。かれはさすがに冷静で、もっている名画の写真をひっぱりだすと、それを実物とじっくり照らしあわせています。

服装のほかはピッタリと一致しています。

F国の専門家は大使の耳もとでなにかひそひそいいました。

大使はその耳打ちをきいて、サリーと牧羊犬のほうをむいていいました。

「よろしい。きみたちがこの女の子を名画のなかの少女だというなら、ちゃんと17世紀の服を着せてみせてもらおうか。そうしたら、われわれも考えてみよう。ただし忘れないでほしいのだが、われわれには専門家がついている。かならず17世紀の服装でなくちゃいかん。コピーした服でごまかすんじゃないぞ」

「この子の服はどこにあるの？」と陳さんが小声でピピルになげました。

「いっしょにとりにゆきましょう」とピピル。

「あたしもゆくわ」サリーはこの場所にいたくないようです。

文化庁の役人は大使といっしょにここで待つことになりました。

さっそく自動車にのってピピルの新しい家にむかいました。

ダンスをあけたピピルはビックリ。

ダンスのなかはカラッポでした。

「服がなくなったのかい？」と陳さん。

「たしかにここにいったよね？」とピピルはサリーになげました。うん、とサリーはうなづきます。

陳さんは途方に暮れました。かれは腕時計をみました。もうひとつ別の事件を解決している時間はありません。どうやって盗まれたのか、まったく手がかりもありません。

サリーは牧羊犬の頭を軽くなで、その耳もとでなにかをささやきました。

牧羊犬はダンスのなかの臭いをかぎまわります。

陳さんの目がキラッとかがやきました。

牧羊犬はダンスをはなれ、まっすぐ玄関のほうにむかい、そのままマンションの出口からそとにはしりだしてゆきました。

「車で追いかけるんだ！」と陳さんが命令しました。

7

ピピルとサリーは陳さんの車にのりこみました。

牧羊犬は大通りにはしりでたかとおもうと、数十歩はしたところで、いきなりたちどまりました。そのまま首をたれて迷っているようです。

「もしドロボウが車でにげたとしたら、犬は追いかけられるの？」とピピルは心配そうにいいました。

「あの犬ならできるよ」と陳さんは牧羊犬のことを信じているようです。牧羊犬が考えるのをジャマしないように、うしろのほうに車をとめて、しずかに待ちつづけました。牧羊犬は頭をひくくして地面の臭いをかいでいましたが、やがて頭をあげ、あたりをグルリとみまわし、さらに耳をピンとたてて音をさがしています。

突然、牧羊犬は地面を蹴ってはしりだしました。陳さんは車で追いかけます。牧羊犬はだんだんスピードをあげてゆきます。そのうごきはとても自信にあふれています。ピピルが車のスピード・メーターをのぞいてみたら、なんと時速 80 キロもでています。「まえにいるあの車を追いかけているんだわ」サリーは牧羊犬のところがよくわかります。陳さんはうなづきました。

牧羊犬はまえをゆく小型車に追いつくと、うしろからその屋根に飛びのりました。ピピルはまえの車をどこかでみたおぼえがあるような気がしました。陳さんはその車を追い越すと、ハンドルを右にきって進行方向をさまたげ、その車をとめさせました。陳さんは拳銃をかまえながら車からおります。ピピルはおもいだしました。あの車はサリーといっしょに美術館から新しい家までのったタクシーです。車からおりてきたのは、やっぱりあのときの運転手でした。陳さんは車の座席のしたからサリーの服を見つけだしました。「どういうことかな？」陳さんは運転手にたずねました。

「ニュースをみて、名画が盗まれたことを知ったんです。そういえば先日、ふたりの子どもと 1 匹の犬をのせたっけとおもいだし、あの女の子と犬は絵のなかのものにちがいないとおもったもので、歴史のある服を盗みだして、それを売って金にしようとおもったんです」と運転手はすべてを白状しました。お金をもうけるどころか、運転手は牢屋にはいることになってしまいました。陳さんはサリーに服をわたして「これに着がえてください」といいました。タクシーの屋根から牧羊犬がおりてくると、陳さんはその頭をやさしくなでながら「おまえの手柄だ」といいました。

自分の服を着たサリーが牧羊犬といっしょに大使のまえにあらわれると、大使と専門家はおどろきを隠せませんでした。専門家はサリーのそばにゆき、「その肩かけをちょっと拝見してよろしいですか？」といいました。サリーは肩かけを専門家にわたしました。専門家は虫眼鏡でその肩かけの成分をしらべました。「まちががなく 17 世紀に織られたものです」と専門家は大使にいいました。「こんなことがありうるのか？」と大使は肩かけを手にとって、その感触をたしかめました。大使館の秘書が、大使のもとに 1 通のファックスをもってきました。ファックスをみたたん、大使の顔には大粒の汗が浮かんできました。

F 国の外務省からの大使にたいする命令で、ただちに帰国の準備をせよとのことでした。名画を紛失した責任をとらせて大使をクビにするという議案が、国会で全会一致でみとめられたということでした。「すぐに記者会見だ。わたしは全世界にむけて重大な発表をおこなう」と大使は汗をふきふき秘書にいいつけました。

かれは大使という職に命がけでしがみつこうとしています。そのためにはサリーが名画からでてきたということを感じるしかありません。ほかのこのされた道はありません。ピピルの望むところではありませんでしたが、サリーは数百人の記者のまえに立たされることになりました。サリーのすがたが全世界にむけて公表されることになってしまいました。記者会見がおわり、大使はサリーと牧羊犬が大使館にとどまることを要請しました。ピピルはつよく反対し、陳さんのほうをみました。陳さんは大使にいいました。「われわれにはサリーと牧羊犬の安全をまもる義務があります。かれらとはなれるわけにはゆきません」

はげしい論争のあげく、大使はしょうがなく同意しました。ただし大使はまるで脅迫するかのような口調でいいました。「もしサリーと牧羊犬の身になにかあったら、わたしが F 国を代表して、きみたちの国との国交断絶を宣告することになるだろう」

ところが今度は陳さんの上司がどうしてもサリーがピピルの家にゆくことをゆるしません。陳さんの上司はサリーと牧羊犬をどこかのホテルを借りきって保護すべきだといいはりました。陳さんは拳銃をひきぬいて、上司にむかって「サリーとピピルをいっしょに家にかえらせないと撃ちますよ」といいました。上司は拳銃におどされて、仕方なくゆるしました。ピピルは陳さんは男らしいと感心しました。「きみはサリーと牧羊犬をつれて家にかえりたまえ。なにかあったらまた連絡する」と陳さんはピピルにいいました。

太陽がのぼるころ、ルシシとパパとママはふたたびサリーと牧羊犬に再会することができました。これでようやく家族みんながそろった、と全員が感じていました。

F国のひとびとはニュースによって国宝の名画が盗まれそうになったという事件があったということを知りました。そして名画のなかから女の子と牧羊犬がでてきたらしいという話題で国じゅうがもちきりになりました。わが民族の画家の神のごとき筆によってえがかれた絵のなかからあらわれた同胞を、はやくひと目みてみたいと大騒ぎになりました。あるひとは「サリーはちっちゃな女の子だ」といったかとおもうと、あるひとは「サリーの年齢はわれわれ国民の祖母にあたる」といったりしています。

大使の人気はぐっと急上昇です。世論調査によれば、もしかれがつぎの大統領選に出馬するようなことになれば、64%の有権者がかれのバカバカしい名前のしたにチェックすることになりそうだということです。

その情報をきいた大使は、いっぺんに3本のブランデーを飲みほしました。そしてすぐさま文化庁の役人に連絡をとり、サリーをF国につれてゆく専用機が2時間後に着陸するから、サリーと牧羊犬に出発の準備をさせるようにと伝えました。

サリーはF国にゆくつもりはありません。それは牧羊犬もいっしょでした。

なぜ帰国したくないのか、F国の大使にはまるっきり理解できません。かれはサリーと面談して、やっとなさしだけ事情がのみこめました。

「なにがあっても絶対につれてゆく」大使はサリーがこの国のだれかに魔法をかけられたにちがいないとおもいました。

「サリーのこころを尊重してください。この子はもう絵ではありません。人間なのです」とピピルは大使にいいました。

大使はピピルのことをジロリとにらみましました。

大使はF国と連絡をとり、それからピピルの国の外交官にはげしい言葉でつづられた声明文をおくりつけました。その内容はこういうものでした……もしサリーと牧羊犬をわが国にわたさないなら、わが国は武力をもちいてとりかえずであろう。

これは両国にとって戦争の火種になりかねないような文書です。

サリーはピピルの国とF国が争うのはイヤです。

けれどもピピルとはなれるのはもっとイヤです。

サリーはこういう世の中で生きているよりも、むしろ絵のなかにいるほうが気楽なのかもしれないとおもいました。

サリーはぼんやりと感じていました。生きているということが、かならずしも良いことだとはかぎらない。生きているということは、すくなくとも良いことのすべてではない。

たくさんの家庭の平和をまもるため、サリーは牧羊犬といっしょに帰国することにきめました。

サリーにはわかっていました。ピピルとはなれてしまったら、いまこうしている世界もまた消えてしまということ

を。

でも自分の世界をまもるために、たくさんのひとの世界をなくしてしまうことは、サリーにはできませんでした。

ふたつとも大丈夫であるようなやり方は、どうしたってみつからないものです。

よろこぶひとがいれば、かなしむひともあります。くるしいひとがいれば、うれしいひともあります。それが人間というものです。それが生きるということです。

ピピルはサリーがのっている専用機がゆっくりと離陸してゆくのをながめています。

ピピルは泣いたりしません。でもその顔は涙でぬれていました。